■　『北海道文学大事典』ご利用の皆さまへ――ネット上での公開にあたって　■

【はじめに】

『北海道文学大事典』（編集・北海道文学館／発行・北海道新聞社）が 1985（昭和 60）年に刊行されてから四半世紀以上が過ぎました。多くの皆さまにご利用いただいてきたこの『大事典』も、今日では入手が難しくなった事情から、ここ数年来その内容をインターネット上で公開してほしいという声が当文学館にしばしば寄せられてきました。

そこで、これらのご要望におこたえするために当文学館では、このたび「人名編」について先行的に北海道立文学館のホームページ上で公開することにいたしました。北海道の文学にいっそう親しんでいただくために、どうかお役立てください。

原則的には『大事典』刊行当初の姿にとどめました。したがって、訂正を加えるべき箇所も若干は残っていますが、調査可能な範囲で修正をほどこしました。なお、今後も調査を継続し、より精確な情報をご提供するつもりです。

【ネット版『北海道文学大事典』編集上の留意点】（順不同）

＊　この『大事典』の当該ホームページ上における公開は、公益財団北海道文学館が、自らの責任において公開するものです。

＊　この『大事典』は既に絶版になっているものです。また、北海道新聞社の出版権も消滅しています。

＊　ここに搭載された個々の記事は刊行時に原稿買い取りの方式で集められ、個々の執筆者には、北海道文学館から稿料が支払われています。

＊　今回の公開は『大事典』の「人名編」にとどめ、「雑誌編」「事項編」については、調査・訂正などの作業を進める過程で順次アップしていきます。また、『大事典』の冒頭に収められていた、写真（グラビア）ページは割愛しました。

＊　公開に際しては、『大事典』初版に僅かながら認められた誤字・脱字、また誤記について、可能な範囲で修正をほどこしました。

＊　一部の記事中には、人名漢字などの用字（正字体や旧字体）について、コンピュータ処理のうえで画面への反映が困難な例があります。カッコ内に「偏」や「つくり」を掲げて判断していただけるように努めましたが、刊行時のままとした例もあります。

＊　『大事典』刊行後の物故者は多数にのぼりますが、今回の「人名編」の公開に際して**没年月日が判明した人物については、見出し語（人名）を赤いラインで囲み、「人名編」　記事の最後に一覧表を掲げました。**なお、相当数の没年月日不明の人物が残っています　が、調査を継続し、新たに判明した情報を追加していく予定です。

＊　この『大事典』の記事内容は、コンピュータのディスプレイ上でのみ読み得る形式を採用しています。画面上の記事は**プリントアウトできません**ので、ご留意ください。

【お 願 い】

物故者の没年月日など、新たな内容訂正を可能とする情報をお持ちの方は、当文学館までメール等でご一報ください。　※e-mail:bungaku@h-bungaku.or.jp

（2012年4月3日）

北海道文学大事典

●北海道文学館 編

北海道新聞社

北海道文学大事典

北海道文学館　編

北海道新聞社

「北海道文学大事典」刊行の辞

昭和四十二年（一九六七）四月二十三日に〈北海道文学館〉が発足してから、二十年近い歳月がたちました。前年秋に北海道の文学者が総力を結集して開催した〈北海道文学展〉の画期的な成功がもたらしたものです。

以来、各種の文学展・文芸講座・文学散歩・図書の刊行など多くの事業を重ねながら北海道文学に関わる諸資料の収集・保存・活用につとめ、現在九万点を所蔵するに至っております。満度の状態には道遠しですが、しかし、これほど一堂に収納している機関は北海道広しといえども私どもの文学館以外には見当たらないと自負しています。

展示室・閲覧室・収蔵庫・事務室を置く札幌市資料館を本拠に北海道文学センターの役割を果たし続けてゆく所存ですが、このほど北海道新聞社のご助力を得て念願の事業である「北海道文学大事典」を編集・刊行の運びとなりました。

全国的にみて、府県単位による総合的な文学事典としてはおそらく最初のものだろうと思いますが、これもひとえに館が牛歩のうちにも積み重ねてきた実績にほかならないと考えています。

項目は、人名編が二二八三、雑誌編が七一八、事項編が一三八、しめて三一三九項目の多きを数えます。ご執筆くださった三四〇人の方に心からなる感謝の意を表すものですが、小説・戯曲・評論・随筆・児童文学・詩・短歌・俳句・川柳と、文学全ジャンルを包含したこの総量は、現在の館ができうる最良の事典であるといっても言いすぎではありません。

北海道新聞社の深いご理解を得て刊行されるこの事典が、おおいに活用され、北海道の文化・文学の向上に限りなく役立つことを心から願うものです。

昭和六十年十月

北海道文学館

北海道文学大事典執筆者（五十音順）

相内　晋
相川　正義
青木　政雄
青地　繁
青葉　鬼善
青葉テイ子
青山ゆき路
朝倉　賢
浅野　明信
浅見　祐治
東　延江
安住　尚志
足立　敏彦
新井　章夫
安東　璋二
飯田　智佳
飯田　安子
五十嵐健二
池永　竜生
石井　有人
石岡草次郎
石家久一郎
泉　孝
居関　透
伊東　廉
稲葉　吉正
井上　二美
猪股　泰
今井　国夫
今井　要太
入江　好之
岩佐和歌子
上田　豊
鵜川　章子
内田　弘
梅田　恭平
江口源四郎
江原　光太
遠藤　裕
大久保興子
大須田一彦
太田緋吐子
太田　光夫
大塚　陽子
大西　雄三
大野　信夫
大場　豊吉
大広　行雄
岡澤　康司
小笠原　克
岡　嘉彦
小国　孝徳
小名　禔郎
小野規矩夫
小野寺与吉
貝塚　忠弘
柿崎　清一
笠井　静子
笠井　信一
笠井　稔雄
笠原　肇
可知　春於
加藤　多一
金坂　吉晃
金谷　信夫
金子　一男
金子徳四郎
金崎　葭杖
加納　愛山
叶　楯夫
神谷　忠孝
川上喜代一
川端　麟太
川辺　為三
川村　濤人
川村　美翔
河邨文一郎
神埜　努
木内　進
菊地　慶一
菊地　信一
菊地　滴翠
北川　頼子
北川　緑雨
北川　玲三
北　光星
北野　青村
北野　竜介
北見　恂吉
木ノ内洋二
木下　順一
木原　直彦
木村　隆
木村　哲郎
木村　敏男
木村　南生
木村　正雄
木村真佐幸
木村和嘉子
葛見　勇
工藤　欣弥
工藤専三郎
久保田一雄
久保　吉春
倉島　斉
小池　進
越郷　黙朗
小島　嘉雄
小谷　博貞
後藤軒太郎
小林小夜子
小林　孝虎
小林　正明
小檜山奮男
小堀　煌治
小松　瑛子
小松　茂
小松　宋輔
小森　利夫
斎藤　邦男
斎藤　大雄
斉藤　征義
坂井　一郎
坂下　銀泉
坂田　文子
桜井美千子
酒本　寿朔
佐々木逸郎
佐々木子興
佐々木露舟
笹原登喜雄
佐藤　喜一
佐藤庫之介
佐藤　孝
佐藤　忠雄
佐藤　初夫
鮫島　昌子
更科　源蔵
椎名　義光
塩見　一釜
鹿野　正伍
滋野　透子
宍戸　鉄蔵
柴村　紀代
島　恒人
嶋田　一歩
下村保太郎
東海林淳子
白幡　千草
新蔵　利男
新明　紫明
菅井　彬人
須貝　光夫
菅村敬次郎
菅原　政雄
杉本　晃一
須合　尚剛
鈴木　勝男
鈴木　勝美
鈴木　青光
鈴木　青柳
鈴木杜世春
鈴木　光彦
鈴木　幸吉
須田　抄二
瀬戸　哲郎
園田夢蒼花
平　忠昭
平　善雄
高木　喬
高津戸　明
高野斗志美
高橋　昭夫
高橋　明雄
高橋　愁
高橋　富子
高橋　信子
高橋　秀郎
高橋　正彰
高橋　和光
高原　与祢
高山　亮二
武井　静夫
竹岡和田男
武田　隆子
竹田てつを
只木かほる
田中　章彦
田中　和夫
棚川　音一
谷川　文利
谷口　広志
谷崎　真澄
玉井　裕志
玉川　薫
田村　圭司
田村　哲三
千葉　宣一
千葉　益也
辻　星行
辻脇　系一
津田　遙子
続橋　利雄
堤　寛治
坪川美智子
坪谷　京子
寺師　治人

照井　千尋
東野ひろ子
堂本　茂
土江田千治
時田　則雄
土蔵　培人
富岡木之介
富田　正一
友田多喜雄
鳥居　省三
長井　菊夫
永井　浩
中川　吉夫
長木谷梅子
中沢　茂
長沢としを
中嶋　常雄
中島　正裕
永田耕一郎
中舘　寛隆
永田　富智
中坪　青雲
長野　京子
永平　利夫
永平　緑苑
中部川信一郎
中村　勝栄
中本　俊生
中山　周三
中山　信
中山　勝
名島　俊子
鍋山　隆明
南河　達雄
新妻　博
西川　青濤
錦　俊坊
西嶋　征夫
西村　一平
西村　信
布川　初朗
野田　牧聖
萩原　貢
橋爪まさのり
畑沢　草羽
畑中　康雄
堀田　輝子
堀井　利雄
堀井　美鶴
堀越　義三
本田錦一郎
本田　大柳
前田　信一
増谷　竜三
水出みどり
菱川　善夫
日高　昭二
比良　信治
平田　角平
平松　勤
深海　秀俊
福井　剣山
福島　瑞穂
福地　順一
福本　範子
藤川日出尚
藤田　昌彰
藤本　英夫
船尾　彊
文梨　政幸
古川　善盛
細井　剛
細谷徹之助
堀田　克衛
堀井　利雄
本山　哲朗
百川　梢介
森山軍治郎
八重樫　実
八木橋絵民
矢口　以文
八子　政信
矢島　京子
八森虎太郎
山内　栄治
山岸　巨狼
八巻　春悟
水口　幾代
光城　健悦
嶺岸　柳舟
宮口　良朔
宮崎　勝義
宮崎　芳男
宮田　千恵
宮西　頼母
宮之内一平
宮村　フヨ
宮本　貞子
村井　宏
村上　清一
茂木健太郎
米坂ヒデノリ
本山　節弥
本山　哲朗
脇田　勇
脇　哲
鷲尾　待人
鷲谷　峰雄
和田　謹吾
渡辺　勇
渡辺　健治
渡辺　洪
渡辺　恍人
渡辺ひろし
山口勝次郎
山口　透
山下　和章
山田　政明
山田　緑光
山名　康郎
山本　丞
湯田　克衛
横井みつる
横沢いさを
横道　秀川
吉田　秋陽
吉田福太郎
米坂ヒデノリ
脇田　勇
脇　哲
鷲尾　待人
鷲谷　峰雄
和田　謹吾
渡辺　勇
渡辺　健治
渡辺　洪
渡辺　恍人
渡辺ひろし

◪写真撮影・写真協力

札幌市教育委員会文化資料室
市立小樽文学館
藤井　治
北海道新聞社

目次

「北海道文学大事典」刊行の辞……北海道文学館　3
北海道文学大事典執筆者……4
凡　例……7
北海道文学大事典・人名編……9
北海道文学大事典・雑誌編……401
北海道文学大事典・事項編……613
北海道文学略年表……木原　直彦編　709
索　引……756
編集後記……772

凡　例

◇北海道文学にかかわる小説・戯曲・評論・随筆・児童文学・詩・短歌・俳句・川柳のほか一部関連ジャンルも含めて構成した。

◇人名・雑誌・事項の三部で構成し、それぞれ五十音順に配列したが、収録項目は三一三九（人名二二八三、雑誌七一八、事項一三八）であり、執筆者数は三四〇人である。

◇項目の配列は、ひらがな、かたかな、漢字を問わず表音による五十音順とし、濁音、半濁音を無視した。音引きは音順に入れていない。

◇項目の記述は、原則として昭和59（一九八四）年12月現在を基準とした。

◇アンソロジー類は雑誌の部に入れた。

◇原則として常用漢字と現代かなづかいを用い、引用は原文のままとしたが、署名原稿なので若干の不統一も止むを得ない。

◇執筆者の記述にしたがったが、事典の性質から最小限の記述の統一をはかった。

◇北海道を対象とする地域の文学事典であることから、スペースは北海道事項を軸に配分した。たとえば夏目漱石の項であっても少スペースとしている。

◇生、没年は「明43・10・1～大14・2・15（1910～1925）」とし、生存中は「明43・10・1～（1910～）」とした。

◇ジャンルは（　）で囲み、二つ以上あるときは点で区切った。

◇出生地は、道外の場合原則として「○○県生まれ」とし、東京、大阪、京都は都府を省いた。道内は「○○市生まれ」または「○○（支庁）管内○○町生まれ」とした。現在地名を使用している。

◇本名の姓が同じ場合は省略し、名前だけにした。本名と姓名の間に句読点は付けていない。

◇年号は初出のみ「明治5年」などと入れ、次の同年号は「23年」とし、年号は省略した。ただし、年号が戻ったり文章が長い時には年号を繰り返すこともある。

◇文中の雑誌名は「　」でくくった。結社名はバラツキがあるが原則として「　」でくくり、結社名に賞が付くときは「　」をはずした。

◇作品名のあとに付く出版年月、出版社名は（昭35、北海道新聞社）のように表示し（　）内に出てくる数字（5巻）なども算用数字を用いた。

◇出身学校名は、一般的にわかる場合はフルネーム（北大＝北海道大学）とし、微妙なものは原稿どおり無理に統一しなかった。旧制、庁立、道立、国立などは、あったほうがよくわかる場合のみ使用した。

北海道文学大事典・人名編

装丁　佐藤　信明

ま

前川　正（まえかわ ただし）　大9・6・30～昭29・5・2（1920～1954）〔短歌〕旭川市生まれ。昭和21年北海道大学医学部学生当時「羊蹄」「アララギ」入会。樋口賢冶に啓発される。24年佐野孝雄らと「旭川アララギ月報」を発行。気鋭の歌人を擁してユニークな編集を続けたが、肺疾患のため夭折した。「前川正歌集」はキリスト教徒らしい誠実な人生態度の証である。のちに作家となった三浦綾子は前川のすすめにより作歌を始め、その指導を受けた。（小国孝徳）

前川康男（まえかわ やすお）　大10・12・25～（1921～）〔児童文学〕東京生まれ。札幌と東京を往復しながら成長する。早稲田大学独文科卒。早大童話会では、坪田譲治の指導を受けた。学徒出陣で北京、南京、上海を転々とし、昭和21年6月まで上海で抑留生活。札幌に復員。人形劇を持って道内を歩く。24年に上京、新潮社で週刊誌の編集をした。文学的には「原始林あらし」「川将軍」で児童文学者協会の新人賞を受賞、38年「びわの実学校」に長編「ヤン」を連載、「ぼくはぼくらしく」（三十書房）が処女出版。42年実業之日本社から「ヤン」を出版。サンケイ児童出版文化賞、児童福祉文化奨励賞受賞。45年長編「魔神の海」が講談社から出て、日本児童文学者協会賞を受賞。これで確固たる地位を確立した。最近はやさしく意外性のある語り口調の作風に変化してきている。（笠原　肇）

前田含水（まえだ がんすい）　明33・12・1～昭54・6・10（1900～1979）〔俳句〕奈良県生まれ。本名要。昭和7年より句作。戦前「南柯」「プリズム」同人。戦後は「雪垣」「葦牙」で活躍したが、旭川市で病没。昭和56年刊の遺句集「青嵐」は成人した三人の子女が編んだもの。（園田夢蒼花）

前田河広一郎（まえだこう ひろいちろう）　明21・11・13～昭32・12・4（1888～1957）〔小説〕仙台市生まれ。徳富蘆花に私淑、その後援で渡米、一三年間労務者や編集者をしながら英文で小説を発表。帰国後「三等船客」（大11、自然社）で登場し、プロレタリア文学に異彩を放った。評論集「十年間」、評伝「蘆花伝」、長編「火田」など。「セムガ」（昭5、日本評論社）収録の標題作は北洋漁業を素材とする。（小笠原克）

前田信一（まえだ しんいち）　明43・6・8～（1910～）〔短歌〕胆振管内虻田町生まれ。札幌鉄道教習所卒業後、網走、北見管内各国鉄駅勤務、戦時中に中支で野戦鉄道司令部従軍を経験。昭和38年網走駅長、40年退職。父の勤務に従って女満別在住中、中田緑雨を通じて四賀光子の歌集「藤の実」に接して「潮音」歌風にひかれ作歌に志した。昭和2年「潮音」加入、5年1月「新墾」創刊に参加。42年北見新墾支社代表、46年「潮音」幹部同人。38年網走駅長時代に網走短歌会発足に尽力したのをはじめ、北見市、端野町、留辺蘂町等で短歌を通じて地域文化向上に努力。57年北見文連文化賞、58年北見市文化功労賞を受賞する。作品は改造社の新万葉集、講談社の昭和万葉集にも作品採録。作風、人柄ともに温厚、誠実で、北国の生活に根ざした真情吐露を信条としている。日本歌人クラブ会員。（田村哲三）

前田夕暮（まえだ ゆうぐれ）　明16・7・20～昭26・4・20（1883～1951）〔短歌〕神奈川県生まれ。本名洋造。明治38年尾上柴舟の車前草社に加わり、自然主義の新風となる。「向日葵」（明40）を経て44年に「詩歌」創刊、萩原朔太郎、山村暮鳥ら詩人をも育成、大正13年北原白秋らと「日光」創刊。自然主義から外光派的歌風、あるいは自由律短歌にも移行した時期があり、感覚的で常に内部革新を心がけた。昭和5年来道。歌集は「収穫」「陰影」「生くる日に」「水源地帯」等。（村井　宏）

前田楽山（まえだ らくざん）　明33・5・15～昭56・12・23（1900～1981）〔短歌〕山形県生まれ。本名勝也。昭和6年国学院大学神学部卒。在学中に折口信夫、金子薫園両教授の指導を受けていたが、本格的に作歌を始めたのは昭和50年2月、伝統の興風会の会長を引き受けてから。生活の中での感動を素朴に生地のままに表現することを信条とした。北海道神宮宮司。（永平利夫）

前野聖子（まえの せいこ）　大15・3・12～（1926～）〔俳句〕秋田県生まれ。私立高等女学校卒。食料品の自営業を営む。昭和38年土岐錬太郎を知り「アカシヤ」に入会する。48年同木理集（無鑑査）同人。アカシヤ俳句会寿都支部長。俳人協会員。（岡澤康司）

真壁　仁（まかべ じん）　明40・3・15～昭59・1・11（1907～1984）〔詩〕山形市生まれ。本名仁兵衛。大正14年「抒情詩」に作品を推薦され、猪狩満直、更科源蔵らと親交を結び、「港街」「至上律」に作品を発表、次いで「北緯五十度」に加わり、詩華集「北緯五十度詩集」に「蠶の詩」を発表、農民詩人として活躍。農民運動に参加し、生活綴方運動に関連して検挙される。昭和14年以来数度にわたり道内を旅し、北海道紹介の文を残す。郷里蔵王山麓にある「峠」の詩碑は美幌峠での作であるといわれている。詩集は「街の百姓」「青猫の歌」（青磁社）、「日本の湿った風土について」（昭森社）、「冬の鹿」（潮流社）、「真壁仁詩集」（土曜美術社）、ほかに「黒川能」（昭28）、「人間茂吉」（昭46）、「野の文化論」全五巻（昭58）、「野の自叙伝」（昭59）。その他著書三〇余冊あり。法政大学出版部刊の「みちのく山河行」は毎日出版文化賞を受賞した。（更科源蔵）

牧　章子（まき しょうこ）　大14・2・5～（1925～）〔短歌〕空知管内浦臼町生まれ。本名宮之内秀子。一五歳ころから口語歌誌「青空」で作歌。昭和17年「新墾」に入社、小田観螢に師事して本格的な作歌活動に入る。現在幹部同人。著書には37年に「朱の帯」、47年に「藍匂う」、59年に「木偶のかたちに」という三巻の歌集がある。札幌市内に長く酒房を経営する歌人で、人生をみつめる深い眼差しと女性らしい美意識を収斂する作風が目をひく。（足立敏彦）

牧　章造（まき しょうぞう）　大5・6・27～昭45・10・3（1916～1970）〔詩〕東京生まれ。本名内田正基。敬虔なキリスト者の家に生まれ、馬込小学校を経て昭和4年神奈川県立工業学校機械科卒。日本エスケイエフ興業入社。萩原朔太郎、菱山修三らの影響下に詩作。昭和14年大連に赴任、「満洲詩人」に参加し、新聞、放送等に活躍。昭和20年終戦により退社。23年日本通運に入社した。北川冬彦主宰の「時間」や「新表現」「日通文学」に拠り華麗な詩活動を展開。菱山修三の牧作品盗作事件が皮肉にも牧の文名を高からしめた。27年日通ペンクラブ第一回文学賞を受賞。28年一切を棄てて愛人恵美子とともに北海道に渡り、十勝管内足寄町の阿寒硫黄鉱業に入社、河邨文一郎と親交を結び、「核」の創立に加わる。大自然のなかの生活は牧の詩を都会的な華麗な抒情から、沈痛だが大きな肯定を伴う求道的なものに変え、ことに晩年の詩には澄明、哀切な、一種の鬼気を孕むものが多い。河邨の紹介で金子光晴の知遇を得、河出文庫「金子光晴詩集」（昭29）を編著した。37年会社閉山のため職を失い、帰京して西武百貨店に入社、「山の樹」に加わる。詩集に「磔」「虻の手帖」「畏」がある。53年7月十勝管内足寄町の野中温泉に詩碑が建立された。（河邨文一郎）

牧野法郎（まきの のりお）　大12・8・19～（192

3〜）〔小説〕帯広市生まれ。札幌光星商業学校卒。「北海道文学」「札幌文学」「波紋」（詩誌）の同人。作品集に「北国暮景」（さるるん書房）があり、エッセー「ウタリの四季」が「朝日ジャーナル」に連載された。（小松　茂）

牧野芳子（まきの よしこ）　大15・4・22〜（1926〜）〔詩〕名古屋市生まれ。愛知県立第一高等女学校高等科卒。昭和22年「詩と詩人」（新潟）同人となり、24年刊行の第一詩集「航跡」で詩学審査会第一回推薦詩人に選ばれる。のち夫道幸と詩誌「弧」を創刊。林野庁技師の夫とともに帯広に移り「弧」を続刊。「野性」（札幌）同人となる。帯広在住中に詩集「北の薄暮」（昭31）、「精英樹」（昭32）を刊行して浦和市に転居。詩誌「時間」（東京）、「地球」（浦和）同人となる。詩集「ある週末」（昭46）を刊行。名古屋に帰り、詩集「アミエルの歌」（昭56）を刊行。「詩は原始への郷愁でもある」（「アミエルの歌」あとがき）とあるように、自然の営為に対する深い洞察に彩られた詩風である。日本現代詩人会、中部日本詩人会員。名古屋市在住。（佐々木逸郎）

牧屋善三（まきや ぜんぞう）　明40・5・17〜昭52・5・11（1907〜1977）〔小説〕渡島管内松前町生まれ。本名岡田五郎。小説家岡田三郎の実弟で、筆名は兄の命名。明治44年ころ生家は破産し、小樽に移り、一時樺太海馬島にも住む。小学生のとき上京。三・一五事件に連累して明治学院高等部を中退した。このことは岡田三郎「三月変」に描かれている。大宅壮一のもとで翻訳に従事したり、浅草の軽演劇団で脚本家生活を送るなどした。昭和15年に自伝的小説「傀儡」を丹羽文雄の推選で「文学者」に連載し、明石書店から「限りなき出発」と改題して出版。16年には船山馨、野口富士男らの青年芸術派と「新創作」に参加して本格的な作家活動に入る。戦中に「春の雲光り」「明日ひらく花」「歴史の夜」、戦後には「女はよく嘘をつく」などの著書がある。「北海道文学」連載の「岡田三郎と私」は、この兄弟を知る好個の回想録。次第に休筆状態になり、千葉県習志野市で没した。（木原直彦）

正岡陽炎女（まさおか かげろうじょ）　明19・11・13〜昭42・1・15（1886〜1967）〔俳句〕高知県生まれ。本名辰雌（ときめ）。明治23年大洪水に遭って田畑の大半を失ったため、30年5月北海道に移住、初め北見の国クンネップ原野、のち屯田兵村沼貝村（現美唄市）に居住。36年美唄キリスト教会奥村伝道師の紹介により札幌北星女学校でミッション教育を受け、41年神戸頌栄幼稚園保姆伝習所卒業、弘前若葉幼稚園勤務。湯浅純一と結婚して東京に移る。病を得て44年夏、故郷美唄に帰り正岡家に復籍する。夫と死別して忠兵と結婚。俳句は大正11年俳誌「枯野」主宰の長谷川零餘子に師事。13年7月同誌巻頭となり、本道女流俳句の草分けとして活躍。零餘子没後一時中断したが昭和6年「水明」に拠り長谷川かな女に師事する。26年6月美唄空知神社境内に、師の零餘子・かな女夫婦句碑を建立。同年美唄水明句会機関誌「暁水」を創刊主宰。30年水明賞受賞。33年師の夫婦句碑と並んで陽炎女句碑が建立された。〈農婦野に座せば陽炎髪なぶる〉。主観性の強い中に抒情豊かな句風を見せ、道内水明系作家の先達として活躍した。（横道秀川）

正木幸平（まさき こうへい）　大15・1・2〜（1926〜）〔俳句〕函館市生まれ。旧制函館商業学校卒。食品販売業。昭和25年ころより作句、読売俳壇などに句を投じ、「にれ」同人。58年にれ創刊五周年記念作品随筆の部「伝統片々」が入賞第一席となる。（竹田てつを）

真崎晋吾（まざき しんご）　大9・11・17〜昭54・2・19（1920〜1979）〔小説〕岩手県生まれ。本名菊池一雄。庁立旭川中学校中退後、元満蒙学院中退、華北軍嘱託。特務機関に属していたこともある。引き揚げ後、上川管内愛別町愛山に住み、総合誌「北の女性」発刊、昭和21年7月第四号で廃刊。24年「辺境文学」創刊号に小説「甕天」を掲載、24年度北海道文化奨励賞を受賞。翌25年短編集「甕天」（北鳴社）刊行。ほかに共著「北海道の女」（昭38、北書房）等がある。その後上京して神田神保町で「現代書房」出版元となり、「日本の奇病」であたり、「青の時」（寺崎浩）、「漂泊の中国作家」「現代美術のカルテ」等を出し、自分も三次元的立体小説を試みるが続かなかった。百田宗治に私淑。愛別町愛山に百田宗治詩碑を建てた。（佐藤喜一）

正宗白鳥（まさむね はくちょう）　明12・3・3〜昭37・10・28（1879〜1962）〔小説、批評〕岡山県生まれ。本名忠夫。東京専門学校（現早稲田大学）卒。早稲田大学出版部を経て明治43年まで読売新聞記者。以後、創作、批評に専念。独自の〈私批評〉を確立。自然主義運動に貢献。昭和10年春来道、樺太国境まで旅した。「北遊記」（昭10・8、中央公論）を残し、国木田独歩、岩野泡鳴などの北海道取材作を回想している。（和田謹吾）

増田羽衣（ますだ うい）　明40・4・1〜（1907〜）〔俳句〕小樽市生まれ。本名政雄。昭和3年比良たつじの勧めにより作句。昭和5年「ホトトギス」入選以来同誌に拠る。昭和21年「はまなす」発刊に参画。俳誌「春潮」所属。札幌刑務所篤志面接員として収監者の俳句指導に当たる。第一銀行に勤め定年退職。著書「高浜虚子先生入選句集」（昭59）。句碑〈天高し火の樽前は高からず〉を59年札幌市平和の滝に建立。（菊地滴翠）

益田月石（ますだ がつせき）　大14・1・2〜（1925〜）〔俳句〕稚内市生まれ。本名一也。旧制中学卒。小学校助教、警察事務官、地方新聞社勤務を経て病院事務長。昭和20年ころより道内外の俳誌を遍歴、24年「氷原帯」（当時「北方俳句人」）に所属、同人。37年退会後数年句作を休止する。43年「風土」入会、同人。46年「丹精」素玄集に投句。48年「壺」復刊と同時に同人参加。50年「風土」退会。51年俳人協会員。現在「壺」同人会幹事。（金谷信夫）

益田喜頓（ますだ きいとん）　明42・9・11〜（1909〜）〔演劇〕函館市生まれ。本名木村一。庁立函館商業学校卒。実業団野球の函館オーシャンクラブ選手を経て、昭和6年札幌で五十嵐久一が旗あげした「赤い風車＝ジャズ・フォーリー」に参加。同劇団解散後、坊屋三郎らとアキレタ・ボーイズを経て、コメディアンとして洒脱な芸風で一家をなした。主な舞台に「屋根の上のヴァイオリン弾き」などがある。（佐々木逸郎）

増谷龍三（ますたに りゅうぞう）　昭5・1・3〜（1930〜）〔短歌〕十勝管内池田町生まれ。昭和25年帯広畜産大学卒。道内高等学校の教諭を歴任。55年置戸高校の教頭、58年から小樽桜陽高校教頭。短歌は26年超流派を標榜して発刊された「山脈」に入社。次いで27年小田観螢の主宰する「新墾」に入社。ほどなく同人となり、49年から57年まで選者を務める。この間、34年に道歌壇に新風をもたらした「千の種子」五〇首により、第三回北海道歌人会賞を受賞。この受賞を機に、菱川善夫の推輓等もあり、全国歌壇の有力歌人としての位置を確立した。36年第二回新墾賞受賞。38年前衛短歌推進の理論家菱川が組織した「北海道青年歌人会」に入会、以後主力メンバーとして先駆的な役割を分担した。40年同会の有力メンバーだった細井剛その他の同志を糾合、「現代短歌の美と思想」を追究する磁場としての同人誌「素」を創刊、その編集に携わった。50年「道青年歌人会」を改組、新たに創立した「現代短歌・北の会」に参与、中核幹事として運動の展開に尽力した。57年「新墾」を退社。細井剛、坪川美智子、鈴木杜世春と共に、作品と評論が相拮抗する新歌誌「岬」を発刊した。短歌と評論を共に書く優れた歌人であ

る。

増永たけし　明43・8・24～昭55・9・26（1910～1980）〔短歌〕士別市生まれ。本名猛。大正5年水田農業経営に転換の両親と深川市に転住。昭和3年ころから短歌に志し、吉植庄亮選北海タイムス歌壇に投稿。6年歌人鬼川俊蔵らと深川短歌会を創立。さらに吉植庄亮主宰「橄欖」に入会、農民短歌を主に究めて、10年同人に推薦される。22年「原始林」同人となり、活発に活動を展開し、28年合同歌集「原始林十人」にも加わる。農業のかたわら深川農業協同組合監事、同理事を務める。39年離農して札幌に転住。45年北海道歌人会幹事。50年処女歌集「芽生」を上梓。筋萎縮症で入退院を繰り返しながらも増永たけし、つよし兄弟歌集「暑寒別岳」を編集発刊する。（鈴木杜世春）

松井鴉城夫　昭8・2・27～（1933～）〔小説〕日高管内えりも町生まれ。本名松井博。地元の高等小学校卒。作品に「海の鷲」（昭55、帯広「市民文芸」）、「海蝕」（昭56、同）があり、同人誌「凍河」の編集発行人。俳誌「寒雷」（加藤楸邨）にも所属。（神谷忠孝）

松井満沙志　大7・3・12～（1918～）〔俳句〕桧山管内今金町生まれ。本名仁。日本通信学園卒。小樽市役所吏員として定年まで勤務後、日本赤十字社に勤めて退職した。「緋衣」「葦牙」に学んだが、昭和25年飯田蛇笏来道を機に「雲母」に入会、同人。小樽俳句協会発行の「小樽の俳句」「小樽歳時記」の刊行に当たる。小樽雲母支社幹事。現代俳句協会員。NHK学園俳句講座講師。（菊地滴翠）

松居陽子　昭16・10・15～（1941～）〔小説〕桧山管内熊石町生まれ。道立保育専門学院卒。「北限」同人。主な作品は「薬」「紅い花」「夕暮れには家に帰る」「揺れる街」（「北限」）のほか、「わら人形」（「北方文芸」）がある。（小松　茂）

松浦武四郎　文政元・2・6～明21・2・10（1818～1888）〔探検、紀行〕三重県（伊勢国一志郡）生まれ。幼名竹四郎、諱は弘、字は子重、通称武四郎。多気志楼、北海道人などと号した。若いころから日本各地の山川を踏破する。弘化2（一八四五）年二八歳のとき初めて蝦夷地に渡った。当時松前藩の旅人の取り締まりがきびしく、人別を江差におき、商人となって東蝦夷地を知床岬まで探検した。翌年は北蝦夷地（樺太）勤番役の僕として同地を探検、嘉永2（一八四九）年に国後、択捉島を探検し、翌年に「初航蝦夷日誌」「再航蝦夷日誌」「三航蝦夷日誌」を著した。安政2（一八五五）年には箱館奉行となった堀利熙の推挙により幕府御雇に登用され、翌3年に蝦夷地の上地により、蝦夷地請取役・向山源太夫手付として東、北、西蝦夷地を一周し「竹四郎廻浦日記」三一巻を著す。翌年には東西蝦夷地山川地理取締を命じられ、翌5年にかけて西蝦夷地および石狩、上川地方、天塩川上流など内陸を調査し、「東西蝦夷地山川取調日誌」八五巻、「東北蝦夷地山川地理取調図」を著して呈上した。安政6年に御雇を辞し、「蝦夷紀行」二四巻をはじめ多数の著書を刊行した。明治2（一八六九）年に開拓判官に任じられ、北海道名、国郡名の選定などを行ったが、アイヌ介護など新政府の方針が意にみたず、翌3年に辞任。その後は官途に就くことなく、著述をもって余生を過ごした。（小野規矩夫）

松浦睦子　昭6・3・5～（1931～）〔詩〕十勝管内芽室町生まれ。庁立富良野高等女学校卒。31年「オメガ」同人。「波紋」「木星」に参加。44年版「核詩集」に「特別委員会」、55年版に「日常の怖れ」を発表。46年詩集「幻点」を刊行。女流詩人には異色な、深層心理に投影する政治的なプシコ・イデオロギーを、鮮烈な詩的論理で分析する主知主義の詩風は、北海道の代表的な前衛詩人として全国的な評価を受けた。55年「とかち詩界0の会」を結成。中心メンバーとして運営に情熱を注いでいる。一方、米川文子門下の俊鋭教授で、箏曲、三絃教室を主宰。51年には北海道文化使節団の一員としてギリシャを訪れ、文化交流に貢献した。（千葉宣一）

松浦裕子　昭24・11・30～（1949～）〔詩〕渡島管内松前町生まれ。藤女子短大英文科卒。「蒼街」同人を経て「詩界0の会」同人。「詩と思想」の新人賞に推薦される。朗読詩、舞踏詩、ジャズトリーなど、前衛詩運動の旗手として、耽美主義の繊細華麗な詩風と共に注目される。（千葉宣一）

松岡繁雄　大10・4・30～（1921～）〔詩〕秋田県生まれ。高等小学校卒。海軍下士官として南方海域へ行き、負傷後帰郷。昭和21年詩誌「霧」（秋田県雄勝）創刊。同年北海道に渡り雨竜郡浅野炭鉱に勤務。同22年「浅野文学」「群炎」を主宰。23年高江常雄、浅香進一、関谷文雄と「炭鉱四人詩集」を刊行。同詩集に発表した作品「英さん」が映画「女一人大地を行く」（監督亀井文雄）の原作となる。25年札幌に転居。職場演劇、詩のサークルなどの指導に当たり、「北方文学」「野性」「火山帯」の同人に参加。30年伊達に転居し、「北方詩脈」「風貌」に参加。38年再び札幌に戻り「詩の村」創立同人として参加。22号以降同誌の編集、発行に当たる。詩集に「風信」（昭48）、「瞽女おろし」（昭57）がある。（佐々木逸郎）

松岡二十世　明34・2・15～昭23・2・9（1901～1948）〔政治〕宮城県生まれ。第二高等学校、東京大学卒。日本農民組合北海道連合会の活動家として、月形村争議などを指導。小林多喜二「転形期の人々」、島木健作「礎」などのモデルとも目される。敗戦後、ソ連の抑留先で死去。エンゲルス「ドイツ農民戦争」の訳著（昭2）がある。（小笠原克）

松岡　寛　昭3・3・1～（1928～）〔詩〕旭川市生まれ。都立向島工業卒。雪印乳業調査役。昭和26年「青芽」に参加。27年北川冬彦の「時間」同人となる。第一回時間新人賞受賞。29年安田博、佐々木高見らと「眼」を創刊、編集同人。30年「眼年刊詩集」に「くらい進化論」を発表。「新器管」「湾」で活躍。31年1月北海道詩人協会の設立準備委員となり、同協会の発足に尽力。34年昭森社より詩集「死者の門」を刊行。H氏賞の有力候補となる。58年「松岡寛詩集」（日本現代詩人叢書、芸風書院）を刊行。日本現代詩人会員。北海道の戦後詩史を飾るモダニズムの旗手として、多彩な方法的実験を展開。政治と科学の二重に拘束された戦後の精神空間に、詩の自立的価値領域を開拓した功績が評価される。（千葉宣一）

松尾秀夫　大14・5・24～（1925～）〔短歌〕空知管内妹背牛町生まれ。空知農業学校卒。農業。昭和20年3月応召、敗戦でシベリアに抑留され、24年8月帰還する。同年より作歌、農業雑誌「酪農」文芸欄に投稿し、その選者白山友正にすすめられて昭和27年「短歌紀元」に参加。39年「有刺鉄線」で短歌紀元賞、41年「鉄の扉」で北海道歌人会賞受賞、共にシベリアの体験を詠う。55年歌集「ポプラ」を出版。妹背牛町文化貢献賞受賞。（萬上義次）

松尾正路　明38・1・7～（1905～）〔仏文学研究、エッセー〕静岡県生まれ。東京外国語大学卒。昭和4年から43年まで小樽高等商業学校（商科大学）教授、退官後北海道武蔵女子短大教授。昭和12年から13年パリ留学。帰国後岩田一男、国松登、木村茂雄と「北方詩族」創刊。戦後は北海道新聞のコラム〝朝の食卓〟でエスプリ豊かな随筆を書く。著書に「地球の春－詩と批評のあいだ」（昭44、春秋社）、「思索と印象」（昭

55、たくみ書房）がある。（小笠原克）

松川愛子（まつかわあいこ）　大正13・12・10～（1924～）〔短歌〕弘前市生まれ。昭和17年東京日本女子高等学院卒。同学院で柳原白蓮より短歌指導を受ける。戦後東京より来道する。昭和31年「凍土」を経て、41年「グループ・素」に加わり、増谷竜三らと活動を共にし、さらに50年に発足した「現代短歌・北の会」に参加し、現代短歌運動体の中の一翼を担う。その後同会を退会し、58年「短歌人」に入会。（坪川美智子）

松川洋子（まつかわようこ）　昭2・12・17～（1927～）〔短歌〕函館市生まれ。本名岡部洋子。庁立札幌高等女学校卒。国鉄苗穂工場、札幌通産局などに勤務。昭和27年「原始林」に入会、山下秀之助に師事、29年「鴉族」創刊に参加、現在両誌同人。40年同人誌「素」の創刊に参加、編集委員。57年同誌解散後、葛原妙子創刊（56年）の「をがたま」（超結社季刊誌）に入会。31年原始林賞、37年鴉族賞、39年には北海道歌人会賞を受賞した。また39年9月短歌研究社より歌集「黄の花粉」を刊行した。この歌集は「傾心」「反芻」「過現」の三部作からなり、カトリシズムの陰影を滲ませながら、少女性、母性そして女の業等の多面性を豊かな抒情と鋭い感性をもって表現した。39年東京での「フェスチバル律」参加の叙事詩「稚内」や「北の会'76」等でも活躍、名実共に女流の第一人者である。〈血流しても得ると思へず終の日にほほゑみて夫をのがるる言葉〉（増谷竜三）

松倉ゆずる（まつくらゆずる）　昭2・3・20～（1927～）〔俳句〕空知管内新十津川町生まれ。本名譲。農業。昭和26年より北海道新聞俳壇（土岐錬太郎選）に投句を続けたのち、28年「アカシヤ」に加入。43年同百花集同人。51年同木理集（無鑑査）同人に推される。57年句集「安住」上梓。アカシヤ俳句会運営委員、編集長として活躍しているほか、新十津川支部の指導者。俳人協会員。（岡澤康司）

松坂凡平（まつざかぼんぺい）　大12・3・4～（1923～）〔俳句〕三笠市生まれ。本名英雄。関東軍軍属、海軍応召、復員後炭鉱に就職したが、閉山のため東京で証券会社の寮管理人をつとめる。昭和51年退職して札幌に移る。俳句は昭和29年細谷源二に師事し「氷原帯」に加入、現在企画同人。ほかに「粒」「つばき」「俳句ポエム」の同人。51年句集「火山湖」を氷原帯叢書として刊行。作風は自由奔放主義を標榜する。（川端麟太）

松沢昭（まつざわあきら）　大14・3・6～（1925～）〔俳句〕東京都生まれ。昭和21年飯田蛇笏に師事し「雲母」に投句、のち同人。36年「秋」創刊、39年「四季」を創刊し主宰となる。句集は「神立」「安曇」「短詩型文学全書・松沢昭集」「父ら」「山処」「宅居」の六冊。ほかに近刊「海と山とわが俳句」など評論、随筆の著書多数。杉野一博ら有力同人を擁し来道も頻繁、道内の隅々まで熟知する。現代俳句協会副幹事長。（園田夢蒼花）

松島日差子（まつしまひさこ）　昭5・11・24～（1930～）〔詩〕美唄市生まれ。本名佐藤久子。岩見沢高等女学校卒。滝川市で商工観光関係の事業を運営。詩は昭和40年ころから書き始め、「滝川文学」「滝川詩話会会誌」等に発表。45年に詩誌「かたぱると」創刊同人となり脚光を浴びたが、54年同誌の廃刊により、現在は53年から同人参加した「木星」と「曠野」の両誌に作品を発表している。（坂井一郎）

松平幸雄（まつだいらゆきお）　昭6・2・21～（1931～）〔俳句〕空知管内雨竜町生まれ。昭和28年池津海彦らと郷土俳誌「暑寒帯」創刊、発行編集人。「礫」創刊同人。39年札幌に転居、一時作句を中断、54年「道」同人となる。57年個人俳誌「谿流」創刊。句集に「湿地の火」がある。（辻脇系一）

松田一夫（まつだかずお）　大1・9・12～（1912～）〔短歌〕留萌市生まれ。本名一雄。

昭和6年旭川市夜間中学校卒。21年薬局を開設。昭和7年から9年「吾が嶺」、9年から16年まで「香蘭」、21年から30年まで「あさひね」同人、23年12月飯田佳吉没後、同誌が終刊する30年まで発行人として責任を全うした。28年「コスモス」に入会、第一部会員。52年10月歌集「鮭のぼる町」を東京の伊藤書房より発行（コスモス叢書）。これは著者四五年の作歌生活を代表するものであり、〈戦前の歌〉と〈戦後の歌〉が収められており、宮柊二を師と仰ぐ心情がよく表出されている。「コスモス」旭川支部のまとめ役として活躍。60年1月から「北海タイムス歌壇」の選歌を担当している。〈四十年薬商ひ子を育て生の証明を歌にぞかけし〉（小林孝虎）

松田貞夫（まつださだお）　昭5・4・5～（1930～）〔評論〕宇都宮市生まれ。北海道教育大学札幌分校卒。高校教員。著書に「本庄陸男・オホーツクの頃」、編著に「本庄陸男・オホーツク作品集」などがある。オホーツク新書刊行会を作り、文学を中心にオホーツクをめぐる諸事象について刊行をつづけている。「文芸網走」同人。（木原直彦）

松田静偲（まつだせいし）　大9・2・8～（1920～）〔小説、短歌〕桧山管内乙部町生まれ。三歳からの樺太生活や抑留体験をもとにした作品が多い。小説「緊急輸送指令」で、第一〇回北海道新聞文学賞佳作受賞。作品集に「杳い日」がある。「原始林」同人。国鉄文学会員。（田中和夫）

松田宗一郎（まつだそういちろう）　明31・4・24～昭35・5・3（1898～1960）〔短歌〕富山県生まれ。札幌師範学校を卒業後、道内の小学校に勤務、昭和15年から小樽市内の校長を歴任し、国語教育に実績を残す。富良野時代に小田観螢を知り、大正9年「潮音」、昭和5年「新墾」入社。岡本高樹の「新墾」の編集発行を実質的に助け、「新墾」の初期の基盤づくりに大きく貢献した。著書に遺歌集「標石」（昭36）、遺文集「永日永夜」（昭36）がある。（足立敏彦）

松田鉄切丸（まつだてつまる）　昭4・4・1～（1929～）〔短歌〕岩手県生まれ。昭和30年「新墾」入社、さらに「潮」にも関与し、29年七飯療養所で療養中の会員らの「渓音」発行に尽力し、合同歌集も出す。千島返還の願望を文芸誌に賭けている。（水平利夫）

松田葉留枝（まつだはるえ）　明39・5・27～（1906～）〔川柳〕岩見沢市生まれ。本名は る枝。昭和41年柳の芽川柳会創立と同時に参画。47年浜中登起の後を継いで二代目会長となる。51年年川柳句集「きもの」を札幌川柳社より刊行。身辺日用雑貨等を利用した川柳アイディア展を創案、現在も引き継がれている。岩見沢市教育委員会より表彰（昭45）、同市功労賞受賞（昭54）など文化活動に貢献。（斎藤大雄）

松田善雄（まつだよしお）　大正6・12・4～（1917～）〔詩、児童文学〕札幌市生まれ。昭和12年札幌師範学校卒。同人誌「蛇の足」に小説「泥行記」連載。昭和22年北教組結成時の文化部長。「北の子供」「つららの笛」「時計台文庫」に童話「ぶらんこ」「すずらん」ほか、北海道新聞に詩「すわりだこ」ほかを発表。札幌市内数校の小中学校校歌を作詞している。校長を一九年間歴任。「幼稚園とおかあさん」に「チャイム・チャイム」を連載。（渡辺ひろし）

松永伍一（まつながごいち）　昭5・4・22～（1930～）〔詩、評論〕福岡県生まれ。県立八女高等学校卒。村の中学校国語教師となり詩を書き始め、丸山豊主宰「母音」同人。谷川雁、黒田喜夫らと「民族詩人」を創刊。昭和41年「日本農民詩史」の執筆を開始し、45年法政大学出版局刊全五巻を完結。毎日出版文化賞特別賞受賞。中島葉那子、猪狩満直ら道内詩人に新しい光を当てる。詩集多く、評論「日本の子守唄」「松永伍一著作集」全六巻ほかがある。（友田多喜雄）

松野郷俊弘（まつのごうとしひろ）　昭8・8・12～（1933～）〔詩〕上川管内上富良野町生まれ。詩誌「先列」「童貞」（のち改題「フエスタ」）同人を経て詩誌「情緒」同人。詩集「蒼い魚」（昭32）、「風」（昭59）を刊行。詩風は硬質に見える抒情だが、長い詩歴の故もあり、ゆるぎない作風を示している。旭川詩人クラブ、北海道詩人協会員。（下村保太郎）

松橋英三（まつばしえいぞう）　明44・10・16～（1911～）〔俳句〕留萌市生まれ。本名英蔵。函館商業学校卒。家業の漁網、船具、陶器商を継いで経営し、昭和34年廃業する。39年留萌酒販協同組合に入り現在専務理事。俳句は在学中より学んでいたが、昭和7年「雲母」に入会し飯田蛇笏に学ぶ。「雲母」同人。39年石原八束に師事、「秋」同人。伊藤凍魚主宰「氷下魚」同人。留萌市社会教育委員、留萌市文化協会長等を務め、44年留萌市文化賞を受賞。留萌市千望台に建つ、吹雪で行き倒れた姉妹の慰霊碑には英三の句〈その日より雪野の果ての姉妹星〉が彫られている。昭和23年に雲母寒夜句三昧個人賞を受賞。28年には第二二回同団体賞を雲母留萌支社が受賞する原動力となった。47年第九回秋賞を受賞。49年留萌支社合同句集「海鳴」監修。現代俳句協会員。（菊地滴翠）

松場斗舟（まつばとしゅう）　大2～昭22（1913～1947）〔俳人〕生地不詳。本名俊雄。八歳のころ俳句をおぼえ、昭和6年ころから旭川旭仙会で本格的に句作。12年以後は「海賊」「プリズム」「俳句会館」「水輪」と新興俳句一筋に進んだが、肺患に冒され三四歳で没した。（園田夢蒼花）

松原地蔵尊（まつばらじぞうそん）　明30・10・10～昭48・10・7（1897～1973）〔俳句〕富山県生まれ。本名重造。樺太大泊中学から小樽高等商業学校、東京商科大学卒。小山銀行を経て山一証券取締役。大正5年2月「ホトトギス」初入選以後一〇年余り投句。高商在学中緑丘吟社を創始、写生による近代性を小樽俳壇に導入した。「鹿火屋」「枯野」に参画、昭和6年「句と評論」（のち「広場」と改題）を創刊、新俳句運動の一方の旗頭として活躍、戦後は「新暦」を主宰し、後進の育成に専念、細谷源二も傾倒した。北海道の俳句界に大きな影響を与えた「ホトトギス」についで「枯野」があったが、その全盛時代は地蔵尊の手引きによって活況を呈した。文芸味ゆたかな作品〈渡り漁夫汽車乗り換の駅に遊ぶ〉のように、人間的な機微を捉えるのが特徴。著書に「松原地蔵尊句集」「現代名俳句集」収録の「灯台」など。俳人協会評議員、現代俳句協会顧問歴任。（島　恒人）

松原良輝（まつばらよしてる）　昭6・6・3～（1931～）〔詩〕帯広市生まれ。旧制十勝農業土木科卒。ジャーナリストとして活躍。昭和25年7月谷克彦、平沢剛一郎、吉川洋司らと帯広詩話会を結成。「オメガ」「カプセル」「変貌」に参加。35年12月吉川洋司、鷲巣繁男と「詩酋長」を創刊。「白の交響詩」、「真夏の詩」を発表。「とかち詩界0の会」に所属。「サイロ」の児童詩運動にも協力。帯広、十勝の文化運動にも指導的役割を果たしている。昭和20年代には、最も前衛的な新鋭詩人として注目され、人間の条件として自由の絶対性を探究する詩的アナーキストである。多彩な詩的行動の中核には、透徹した文明批評がある。（千葉宣一）

松前広長（まつまえひろなが）　元文2・12・25～享和元・5・10（1737～1801）〔漢文学〕松前家第一一世藩主邦広六男、門閥村上系松前家を嗣ぎ、家老となる。安永九（一七八〇）年松前藩の歴史である「福山秘府」全六〇巻をはじめ、「毛人井蛙談」「覆瓶草」「夷酋列像附録」「松前志」等を著している。広長は博学で、特に漢文を能くし、書画にも長じ、さらには音曲にも秀で、雅号を琴書堂と号した。（永田富智）

松村忠義（まつむらちゅうぎ）　大15・4・26～（1926～）〔短歌〕札幌市生まれ。札幌商業

学校、札幌短大卒。北海道開発調整部勤務。札幌商業の国語の教師であった中山周三の指導を受け、作歌を始める。昭和23年「原始林」に入会。都市生活者の乾いた心情を託した心象風の写実的な作品が多い。感受性の特異さと鋭さにおいて、同誌の中でも異色の作家である。34年田辺賞を、41年原始林賞を受賞し活躍したが、現在は休詠している。（猪股　奏）

松本昭夫（まつもとあきお）　昭10・3・23～（1935～）〔詩〕上川管内比布町生まれ。早稲田大学文学部仏文科卒。「早稲田詩人」「詩の村」「異類都市」を経て、現在「あうら」同人。詩集に「暗い春」（昭53）、「聖なるカオス」（昭57）がある。北海道詩人協会、旭川詩人クラブ会員。（富田正一）

松本一哉（まつもとかずや）　大12・4・8～（1923～）〔詩〕三重県生まれ。戦後、大阪で浜田知章らの行動主義モダニズム詩グループ「山河」の同人となり、詩集「サーカスの女王」（昭34）、「死んだまね」（昭36）等により新鋭詩人として注目された。住友銀行に勤務し、札幌支店転勤を機に、昭和36年河邨文一郎らの「核」に加入、鋭角的な視角と鋭利な切れ味をもつレトリックで、独自の詩境を開拓した。挫折者の視角から、なおも正統的な汎世界性を堅持しつつ、鋭く現代文明に挑んでいる、とも評される。昭和46年東京へ、50年大阪へ転居。47年に第三詩集「鳥の論理」を核の会から上梓。評論集に「中原中也論」（昭35、山河出版社）がある。日本現代詩人会員。（河邨文一郎）

松本弘二（まつもとこうじ）　明28・9・21～昭48・6・29（1895～1973）〔美術〕佐賀県生まれ。「種蒔く人」（大10）、「文芸戦線」（大13）同人として小説、美術批評をほぼ毎号書いた。「窟を囲る話」（大14・1、「文芸戦線」）は札幌の淫売窟の点描。（小笠原克）

松本剛太郎（まつもとごうたろう）　明23・3・27～昭43・2・11（1890～1968）〔医師〕徳島県生まれ。父今次郎の第二農場、十勝管内芽室町に育ち、九州帝国大学医科大学卒。妻は書家松本春子。医師のかたわら「万葉集医事談」（昭9）、「荻野吟子小伝」および陸別の開拓者、医師関寛の事蹟を調査発表した。北海道大学医学部第一内科教室の創設に当たり、札幌医師会長、北海道医師会長をつとめた。（佐々木逸郎）

松本しげる（まつもとしげる）　大9・3・1～（1920～）〔俳句〕留萌管内小平町生まれ。本名茂。庁立留萌中学校卒。医療専門学校主任教員。昭和30年から伊藤凍魚の指導を受け「氷下魚」で作句。44年より寺田京子に師事「白の会」を結成、現在に至る。51年木村敏男に師事「にれ」同人。53年と57年に札幌市民芸術祭奨励賞を受賞した。（竹田てつを）

松本清張（まつもとせいちょう）　明42・2・12～（1909～）〔小説〕広島市生まれ。小学校高等科を卒えたあと生活の苦労を重ねる。朝日新聞九州支社勤務時代に書いた処女作「西郷札」が直木賞の候補となり、昭和27年の「或る『小倉日記』伝」が芥川賞に選ばれた。社会派推理作家として常に話題作を生んでいるが、本道取材作も代表作に数えられる。九州から北海道にまたがって列車時刻表を駆使した「点と線」（昭32・2～33・1、「旅」）は推理小説の世界に一紀元を画した。週刊誌記者が連続殺人の謎をさぐるうち事件の背後に暗躍する黒い集団に立ち向かう「黄色い風土」（昭36・5、講談社）は小樽が重要な舞台。安保の季節である昭和35年に夕張で小児マヒが多発したが、現実のポリオ流行に細菌謀略をからませた「屈折回路」（昭38～40、「文学界」）は夕張が重要な位置を占めている。講演などで来道の機会が多い。（木原直彦）

松本　徹（まつもとてつ）　昭8・8・19～（1933～）〔評論〕札幌市生まれ。大阪市立大学国語国文科卒。近畿大学教授。「三

島由紀夫論」(昭48、朝日出版社)、「変容つづける人物」(昭57・9、「文学界」)などの評論のほか徳田秋声研究に新境地を開拓。「文学界」同人雑誌評を担当。(神谷忠孝)

松本秀男 大6・9・10〜(1917〜)〔短歌〕美唄市生まれ。前赤平市助役。「新墾」「潮音」同人。昭和17年ころから作歌を始める。42年から赤平短歌連盟会長。連盟の合同歌集や記念誌、また地域に根ざした短歌行事の開催、不遇だった歌人の歌集出版をするなど、地域文化振興の推進者。46年赤平文化協会賞を受賞。同連盟も赤平市の文化奨励賞を受けている。北海道歌人会委員。(永平利夫)

松本道介 昭10・2・26〜(1935〜)〔評論〕札幌市生まれ。二歳で東京に移住。東京大学独文科卒。中央大学教授。主要評論「日本回帰の内実」(昭48・12、「新潮」)、「野呂邦暢論」(昭59・1、「文学界」)。「文学界」の同人雑誌評欄の執筆者の一人。(神谷忠孝)

松谷一令 明36・10・28〜(1903〜)〔短歌〕函館市生まれ。旧制函館商業学校二年より作歌。昭和7年「心の花」入会、石榑千亦に師事。石榑の没後は小宮良太郎、鷲見治喜次の「朱鳥」に参加。15年樺太移住。17年「樺太短歌」同人。22年引き揚げ後は無所属のまま作歌。46年「原始林」に入会、相良義重に師事したが、相良の逝去後は石川澄水を経て土蔵培人に師事する。54年歌会始入選。(新蔵利男)

松山善三 大14・4・3〜(1925〜)〔映画、シナリオ〕兵庫県生まれ。岩手医学専門学校を中退して松竹に入社し、代表作に昭和36年の「名もなく貧しく美しく」がある。厚田の網元で道会議員を務めた異色人物がモデルの「厚田村」上・下(昭53・6、潮出版)、晩成社をひきいて十勝を開拓した「依田勉三の生涯」上・下(昭54・11、同)、敗戦直後に真岡郵便局で交換台を守って集団自決した乙女たちの事件を発端とする「氷雪の門」(昭55・11、同)などの本道取材作がある。(木原直彦)

松吉鋼三 大3・10・7〜(1914〜)〔短歌〕桧山管内江差町生まれ。札幌第一中学校卒。満州、シベリアを経て、昭和46年室蘭営林署長を退職。昭和9年「アララギ」、29年「ヒグマ」、31年「北海道アララギ」、39年「海鳴」入会。58年歌集「山の風」を刊行した。函館市在住。(笹原登喜雄)

間所祥司 昭10・7・14〜(1935〜)〔俳句〕十勝管内豊頃町生まれ。帯広農業高等学校卒。日本甜菜製糖株式会社に入社。31年「氷原帯」に入会、ほかに「海程」などの同人。37年句集「反芻」を氷原帯叢書として出版。38年氷原帯賞受賞。北海道地区現代俳句協会幹事。北海道俳句協会委員。59年より「氷原帯」の編集を担当。(川端麟太)

真船豊 明35・2・16〜昭52・8・3(1902〜1977)〔劇作、小説〕福島県生まれ。早稲田大学英文科中退。一三歳で函館の海産物貿易商の養子となったが、間もなく復籍した。早稲田大学を中退後再び北海道へ渡り、牧夫として働きながら留岡幸助創立になる遠軽の北海道家庭学校の少年たちと起居を共にし、のちにその体験から「太陽の子」(昭11)を執筆した。この作品は同年阿部豊監督によって映画化された。代表的戯曲に「鼎」(昭9)、「鉈」(昭10)、「裸の町」(昭11)、「山参道」(昭16)、「中椿公館」(昭21)、「黄色い部屋」(昭23)があり、昭和10年に書いた「なだれ」につづき「激流」「雪」「仏法僧」「冬の夜話」などラジオドラマにも名作を残した。長編小説に「雁の影」(昭20)、「陽気な家族」(昭24)ほか。昭和27年放送文化賞受賞。40年からは真船豊書斎劇場を主宰した。「真船豊選集」全五巻、「真船豊ラジオドラマ選集」、小説集「白魚」などがある。(佐々木逸郎)

間宮茂輔 明32・2・20〜昭50・1・12(1899〜1975)〔小説〕東京生まれ。本名真言。慶応大学中退。株屋勤めなどを経て「不同調」創刊(大14)に参加、左傾して地下活動も経験、昭和8年入獄、10年転向出獄。「あらがね」(昭13)、「党員作家」(昭33)、「鯨工船」(昭34)など。第一創作集「突棒船」(昭13・10、竹村書房)の標題作は、オットセイ撃ちにオホーツクへ乗り出す海洋文学。(小笠原克)

間宮林蔵 安永4〜弘化元・2・26(1775〜1844)〔探検〕茨城県(常陸国筑波郡)の農家の子として生まれる。数学の才を認められ、江戸に出て普請役村上島之丞の配下となって地理学を学ぶ。寛政12(一八〇〇)年に幕府蝦夷地御用雇として島之丞に随行して蝦夷地に渡り、伊能忠敬から測量術を習得した。文化3(一八〇六)年に択捉の沿岸を実測し、5年に樺太島の探検を命じられ松田伝十郎と共に同地を見分。さらに同年から翌6年にわたり再び樺太を探検して、樺太が半島ではなくて島であることを確認した。この成果をとり入れた「日本辺海略図」を作成し、さらに大陸交易に赴くギリヤーク人に同行してアムール下流の満州仮府デレンを調査した。文化7(一八一〇)年「東韃紀行」「北蝦夷図説」を著し、「北蝦夷島図」を作製した。間宮の地図を入手したシーボルトは、「日本」を著してその中で間宮海峡の名を初めて世に紹介した。(小野規矩夫)

丸木俊 明45・2・11〜(1912〜)〔絵画〕札幌市生まれ。庁立札幌高等女学校を経て女子美術大学卒。女流画家協会、从展会員、ソビエト芸術アカデミー名誉会員。「原爆の図」の制作者。著書に「女絵かきの誕生」(昭52、朝日新聞社)がある。(神谷忠孝)

丸山薫 明32・6・8〜昭49・10・21(1899〜1974)〔詩〕大分市生まれ。東京大学国文科中退。「椎の木」に属し、三好達治、堀辰雄と「四季」を創刊。戦中山形県下に疎開、西川町岩根沢小学校代用教員を勤め、札幌青磁社の詩誌「至上律」の編集委員に参加。昭和23年詩集「仙境」を札幌より出版。27年夏藤原定、山室静とオホーツク海岸を旅し、当時の感慨を詩集「月渡る」の「ぼくの旅で」にうたい込んでいる。(更科源蔵)

丸山靖生 昭12・1・12〜(1937〜)〔小説〕樺太生まれ。本名靖雄。昭和22年引き揚げ後、留萌管内増毛町信砂御料に開拓農民として入植。35年「文芸首都」、留萌ペンクラブに入会。同会員誌「PEN」に処女作「三号室」を発表。38年同誌発表の「男爵とぼく」が「週刊新潮」同人誌秀作選となり、翌39年5月4日号に掲載された。地方公務員。日高管内浦河町在住。(東野ひろ子)

み

三浦綾子 大11・4・25〜(1922〜)〔小説〕旭川市生まれ。旭川市立高等女学校卒。歌志内神威小学校教員となり、のち旭川啓明小学校に移る。昭和21年退職。肺結核、脊椎カリエスにかかり、以後一三年間闘病生活を送る。23年幼なじみの前川正と再会、精神の転機を得る。27年西村久蔵(「愛の鬼才」の主人公)を知る。この年洗礼を受けキリスト教に入信、プロテスタントとなる。30年三浦光世と出会い、34年結婚、旧姓堀田から三浦へ。36年「主婦の友」に「太陽は再び没せず」が当選。39年朝日新聞大阪本社創刊八五年(東京本社七五周年)記念一千万円懸賞小説に「氷点」が当選。「朝日新聞」に連載、出版のあと映画化、テレビ化され、氷点ブームをま

き起こし一躍脚光をあび、作家の地歩をきずく。以後、「積木の箱」「塩狩峠」「自我の構図」「帰りこぬ風」「残像」等を発表、多数の読者を獲得、ベストセラー作家となる。この間に「道ありき」ほかの自伝、「旧約聖書入門」等を出す。深い信仰の情熱を作家生活の根底に据えるが、心理葛藤のするどい把握力とストーリー・テーラーとしての抜群の力量があいまって、広範な読者層をひきつけ、ユニークな小説世界をきりひらいた。50年「細川ガラシャ夫人」、51年「天北原野」、52年「広き迷路」「泥流地帯」、54年「続泥流地帯」等々エネルギッシュに創作活動をくりひろげ、多くが映画化、テレビ化された。55年「千利休とその妻たち」で歴史小説への関心を深める。56年「海嶺」によって新境地をひらき視野を海外に広げ、海外取材旅行はじまる。57年直腸ガン手術。58年「水なき雲」「愛の鬼才」、59年「北国日記」。取材のためアメリカ、イスラエルへ。この間に作品の多くが各出版社の文庫本となりひろく読まれていくが、英語、中国語等をはじめ各国語にも翻訳紹介されている。59年「三浦綾子作品集」全六巻が朝日新聞社から刊行、完結をみた。

〔氷点〕　長編小説。正編＝昭和39年12月9日～40年11月14日朝日新聞連載。朝日新聞社（昭40・11）刊。続編＝昭和45年5月12日～46年5月10日同紙連載。同社（昭46・5）刊。旭川を舞台に、〝原罪意識〟を追求したキリスト者の視点とストーリーテーラーの才能が結合し、現代文学に新分野をひらいた。

（高野斗志美）

三浦浩明　大5・3～昭52・3・26（1916～1977）〔俳句〕札幌市生まれ。本名浩。早稲田大学商科卒。在学中に「馬酔木」に拠り、昭和13年「葦牙」に入会。のち「壺」「アカシヤ」などにも投句、晩年「河」に拠る。句集に「青嶺」（昭50）がある。

（佐々木子興）

三浦　栄　昭2・7・16～昭26・12・27（1927～1951）〔詩〕渡島管内松前町生まれ。北海道大学文学部国文科中退。昭和26年4月「ＡＴＯＭ」第七号に「ブランコをゆすれ」を発表。文学的遺書「一片耿々の志」を「ＡＴＯＭ」終刊号に残して、北大農学部四階屋上より投身自殺を遂げた。27年9月友人有志により遺稿集「赤い雪」が刊行された。フランス象徴主義体験を経て、中原中也と松尾芭蕉の間で人生の詩と真実を探究。敗戦を横須賀海兵団で迎えた精神の傷痕が、人間不信と存在論的孤独感の中核となっている。

（千葉宣一）

三浦三郎　大3・12・18～昭31・4・22（1914～1956）〔小説〕富山県生まれ。戦後釧路郵便局で労働運動に入り、昭和22年全逓新聞創作コンクールに小説「古川一等兵の死」で一位入選。ほかに「良子」（昭27）がある。いずれも「釧路現代文学選集」第一〇巻に収録。

（鳥居省三）

三浦哲郎　昭6・3・16～（1931～）〔小説〕青森県生まれ。早稲田大学仏文科卒。「忍ぶ川」（昭35・10、「新潮」）で芥川賞受賞。第一二回新潮新人賞に運上旦子の「ぼくの出発」（昭55・7、「新潮」）が選ばれたときの選考委員の一人。本道取材作に「踊子ノラ」（昭49、講談社）、「愛しい女」（昭54、新潮社）ほか。代表作に「白夜を旅する人々」（昭59）がある。

（神谷忠孝）

三浦敏之　大11・4・1～（1922～）〔短歌〕札幌市生まれ。北海道大学卒。小樽、札幌、旭川で高等学校教員を勤めた。小、中学生時代早くも啄木や牧水の歌、上田敏の詩を好み、北大予科時代に宇野親美から万葉集を学ぶころから本格的に短歌への傾倒をみせた。一時「新墾」に所属したが、昭和26年夫人久子と共に「原始林」入社。斎藤茂吉研究にも熱心で、平明な表現のうちに温かい人間味を漂わす詠風である。

（村井　宏）

三浦久子　昭6・9・5～（1931～）〔短歌〕岩見沢市生まれ。藤女子短期大学卒。札幌東高等学校在学中から中山周三の指導を受ける。夫敏之と共に昭和26年「原始林」入社、46年原始林賞、48年原始林田辺賞受賞。華やかさはないが、温順な自然観照のなかに生来のやわらかな抒情が滲透する。教員だった夫に従い各地に転住したが、その都度地域の短歌会の結成や強化に夫を助けている。

（村井　宏）

三浦牧人　明35・1・23～（1902～）〔俳句〕後志管内島牧村生まれ。本名由太郎。少年のころより作句。昭和7年岩内に移り泉天郎の指導を受け、のち「若葉」「馬酔木」「春汀」「天狼」「ホトトギス」「鹿火屋」「玫瑰」「古潭」等に拠り、作句した。

（園田夢蒼花）

三上省吾　明34・7・1～昭53・3・27（1901～1978）〔短歌〕恵庭市生まれ。大正14年から農産物検査員、林産物検査員、林業技術普及員として官庁に勤務した。昭和24年「新墾」に入社して小田観螢に師事、幹部同人として活躍するとともに、北海道林務部監修の「林」歌壇の選者として後進の指導にも当たった。歌集に「蒼林」（昭49）があり、誠実な全人的表現を歌風とした。

（足立敏彦）

三上静風　大14・3・12～（1925～）〔短歌〕上川管内美瑛町生まれ。本名権次郎。美瑛高等学校卒。美瑛町社会福祉協議会事務局長。短歌は啄木にひかれていたが、昭和22年に高橋和光を知り、小田観螢の「新墾」、太田水穂の「潮音」に入社。「新墾」の銀河同人、「潮音」の同人、旭川短歌会（新墾、潮音）の代表。また地元美瑛町内の「しろがね短歌会」の指導に当たっている。

（高橋和光）

三上敏夫　大14・7・10～（1925～）〔児童文学〕渡島管内上磯町生まれ。小学校教師として、生活綴方教育を実践、多くの記録を刊行。あわせて児童文学作品を書き、作品に絵本「ハナとひげじい」（昭52、草土文化）、「流氷」（「日本児童文学」）、「ぷっちゅまん」（「北方文芸」）、「空と海と少年」（「母と子」）などリアルに子どもの世界を描いたもの多数。北の仲間同人。昭和59年より名寄女子短期大学教授。

（菊地慶一）

三岸好太郎　明36・4・18～昭9・7・1（1903～1934）〔絵画〕札幌市生まれ。大正10年札幌第一中学校卒。12年第一回春陽会展に入選。昭和5年独立美術協会創立会員となり、同展を中心に活躍した。昭和42年遺作二二〇点が遺族から寄付され、道立美術館（現三岸好太郎美術館）が開館した。画論のほか「上海の絵本」などの詩作品を残している。子母沢寛は異父兄にあたる。

（工藤欣弥）

三木澄子　明42・1・2～（1909～）〔小説、児童文学〕長崎県生まれ。本名磯野澄子。愛知県立第一高等女学校卒。少女時代より文学に志し「令女界」「若草」などに小説を寄稿。第一三回芥川賞候補作品「手巾の歌」（昭16）で作家としてデビューし、その他の小説によって新人女流作家として嘱望された。戦後少女小説に転じて「まつゆき草」（昭30、ポプラ社）など多くの作品を発表。また名作童話、伝記小説などにも幅広く活躍した。昭和36年小学館児童文学賞佳作、57年日本児童文芸家協会功労賞を受賞。作品に「北に青春あり」「雪の恋歌」「白鳥に告げた言葉」（集英社）など北海道を舞台にしたジュニア小説があり、「ねことときつねがさんぽして」（昭54、小学館）、「手のひらの星」（昭59、「北海道児童文学全集」収）などの童話作品も多い。長く東京在住であったが49年より網走市に在住し、執筆活動を続ける。

（菊地慶一）

三木唯史　明45・3・1～昭53・12・6（1912～1978）〔短歌〕紋別市生まれ。本名公。旭川師範学校卒。釧路

市第四小学校訓導。昭和9年発起人の一人として「北海道綴方教育連盟」を結成。11年「青垣会」入会。16年1月綴方教育事件で検挙される。同年7月釈放後は美幌町役場に勤務、教育長も務めた。共著「氷峡」、歌集「オホーツク斜面」、詩集「びほろ・さんか」、研究「美幌のユーカラ」がある。（棚川音一）

三木露風　明22・6・13～昭39・12・29（1889～1964）〔詩〕兵庫県生まれ。本名操。詩集「廃園」により北原白秋とともに詩壇に一時代を画した。次いで「寂しき曙」「白き手の猟人」「幻の田園」「良心」を刊行したが、「良心」は大正4年7月渡島管内上磯町当別のトラピスト修道院訪問の印象をうたっている。大正9年5月同修道院の国語と修辞学講師として赴任し、11年には夫人とともに洗礼を受け、一時ローマ（羅馬）にちなんで羅風と号した。13年6月病気静養のため修道院を去った。露風を敬慕し当別の隣村茂辺地小学校に赴任し親しく交わった詩人支部沈黙によれば、病気は神経衰弱であったという。この間の文学的業績に修道院詩集「信仰の曙」（大11・6）、「神と人」（大15・7）、「トラピスト歌集」（大15・6）、随筆集「修道院雑筆」（大14・8）、「修道院生活」（大15・1）、自伝「我が歩める道」（昭3・8）などがあり、札幌の時計台で文芸講演も行っている。露風のトラピスト修道院生活は宗教的詩人としての足跡を残したが、半面信仰に束縛された概念的詩が多い。昭和46年5月当別トラピスト前広場に詩集「寂しき曙」に収められた「呼吸」の一部を刻んだ詩碑が建立された。（佐々木逸郎）

三国洋子　昭2・1・28～（1927～）〔小説〕函館市生まれ。庁立函館高等女学校卒。昭和21年から34年まで幼稚園教諭。38年に「雨のあと」が第一回文化評論新人賞短編小説部門に入選。その後日本民主主義文学同盟の同盟員に推され、「民主文学」や同盟函館支部会報「どんぐい」で活躍。創作集に「あの川を渡れ」（昭46、北書房）、「いま、海は凪ぎ」（昭53、同）、「雲が来る」（昭59、光和堂）などがある。（神谷忠孝）

三沢坑子　大4・7・15～（1915～）〔俳句〕秋田県生まれ。本名正一郎。旧制滝川中学校卒。住友赤平鉱業所に勤めた。昭和12年より「古潭」「はまなす」「ホトトギス」「氷下魚」に拠り句作。休俳ののち現在「にれ」同人。「杉」所属。（木村敏男）

三島由紀夫　大14・1・14～昭45・11・25（1925～1970）〔小説〕東京生まれ。本名平岡公威。東京大学法学部卒。「仮面の告白」（昭24、河出書房）で作家の地位を確立。昭和25年来道し、鳥類研究家の斎藤春雄の案内で道内を歩き、これをもとに「夏子の冒険」を「週刊朝日」（昭26・8～11）に連載した。北海道取材作はほかに「死の鳥」（昭26・4、「改造」）がある。45年「豊饒の海」最終回を書いて陸上自衛隊市谷駐屯地で自決。（神谷忠孝）

水口幾代　大3・7・8～（1914～）〔短歌〕新潟県生まれ。本名田中寿満子。昭和6年庁立函館高等女学校卒。大正7年12月両親に伴われて渡道し函館市に住み、小学校五年生ころより作歌。昭和10年芥子沢新之介主宰の「吾が嶺」に入会。その後、北原白秋の「多磨」、北見志保子の「月光」、さらに28年宮柊二の「コスモス」創刊に参加。31年夫の芥子沢新之介と「いしかり詩舎」を結成し、歌誌「いしかり」を創刊した。41年芥子沢の死去とともに一三〇号を追悼号として終刊。引き続き大平忠雄と「樹氷帯」を創刊したが、五年後大平と袂を分かち、46年「いしかり」を復刊、今日に至る。歌風は、写生を根底としながら日常性に埋没しない詩性の高さを維持することを目ざしている。歌集には芥子沢との共著である「早春」「雪国の絵本」収載の作品と、その後41年までの作品をあわせた「未完の悲笳」をはじめ、「胡茄」「風汀」、「散華頌」がある。「散華頌」は、長い病苦を克服した勁い生命力、豊かなローマン性と幻想力を評価されて、56年第一五回北海道新聞文学賞を受賞した。「女人短歌」初代北海道支部長も務めた。編著に「芥子沢新之介歌集」（昭42）、新之介の随筆集「赤鉛筆」（同）がある。〈痛む指もつたなごころ秋の陽にひらく散華を受くるかたちに〉（田村哲三）

水島義治　大9・2・27～（1920～）〔国文学〕後志管内余市町生まれ。独学で教員資格をとり、余市高等学校教諭時代に北海道大学大学院国文学専攻博士課程修。現在日本大学教授。「万葉集東歌の研究」（昭59、笠間書院）ほかの三部作、「国語国文学要覧」（昭44）などの労作がある。（小笠原克）

水谷郁夫　昭5・7・22～（1930～）〔俳句〕美唄市生まれ。北海道大学文学部卒。在学中は中国文学専攻のかたわら音楽に堪能でもあった。道立札幌北高校を経て札幌市立新川高校国語教師として、PTAを軸に古典、俳句講座を開き育成。昭和30年代志摩芳次郎と交誼「笹鳴俳句会」に拠ったが、43年石原八束の来道を機に「秋」入会、46年同人。50年現代俳句協会員。（島　恒人）

水谷　準　明37・3・5～（1904～）〔小説〕函館市生まれ。本名納谷三千男。早稲田高等学院を経て早稲田大学仏文科卒。高等学院在学中に「好敵手」（大11）を「新青年」に発表。早大時代に「探偵趣味」の編集者となり、卒業後博文館に入社、その後「新青年」の編集責任者となって一七年間勤めた。この間「空で唄う男の話」（昭2、「新青年」）、「お・それ・みを」（同、同）、「胡桃園の蒼白き番人の話」（昭5、同）などを発表、推理作家としての地位を築いた。独特の趣味と機智を感じさせる作風で、幻想浪漫的なミステリーが多く、またユーモア探偵小説を提唱したりした。編集者としての功績も大きく、推理文壇以外にも人材を求め、モダンでユニークな誌面を作り多くの作家を育てた。戦後「ある決闘」（昭26、「改造」）で第五回探偵作家クラブ賞を受賞。その他「カナカナ姫」（昭22、「新青年」）、「瓢庵先生捕物帳」（昭24、同）、「窓は敲かれず」（昭25、岩谷書店）など。（安東璋一）

水谷多摩江　昭31・3・16～（1956～）〔小説〕札幌市生まれ。北海道大学文学部実験心理学科卒。「朝を追って」（「幽玄」6）が「北海道新鋭小説集」九集に収録された。「泥だらけのクリスマス」（「幽玄」7）、「水谷多摩江小品集」（「幽玄」8）などの作品がある。（神谷忠孝）

水谷光江　大5・3・23～昭35・5・12（1916～1960）〔小説〕東京生まれ。昭和6年名古屋逓信講習所に入所後、長野県の岩村田と名古屋郵便局に勤務。この間文部省の専検に合格。昭和19年函館郵便局に移り創作を書き始める。22年全逓信労組の小説懸賞募集に「闘い」を応募し二席となる。24年より「文芸首都」に作品投稿し、25年11月号に発表の「死と生と」で注目される。その後も「天使の処女」「老嬢健在」等を発表、中堅メンバーの地位を固める。27年「文芸首都」の推薦で「新潮」12月号の全国同人誌推薦作品に「死にゆく母」が載り、強烈な印象を与える。30年乳ガンとなり入退院を繰り返すが、「発病」「外科病室」など自らをみつめた作品を書きつぐ。生涯独身のまま他界。没後、全逓の仲間の手で「水谷光江作品集」（昭40・5）が刊行された。（山下和章）

三栖菜穂子　大9・3・24～（1920～）〔俳句〕旭川市生まれ。本名君子。東京女子専門学校卒。昭和25年帯広市在住時代に早川観谷に師事して「とかち」に入会し、俳句の手ほどきを受ける。28年土岐錬太郎を知り「アカシヤ」に加入。34年同百花集同人。48年同木理

集（無鑑査）同人。43年よりアカシヤ俳句会運営委員として活躍する。俳人協会員。（岡澤康司）

水野春菊（みずのしゅんぎく） 明43～昭52・12・13（1910～1977）〔俳句〕東京生まれ。お茶の水高等女学校卒。渡道して水野波陣洞と札幌に居住。昭和20年ころより水見悠々子の教えを受け「ホトトギス」に投句したが、24年波陣洞が実質上「はまなす」の発行を引き継いでからは専心これを助け、同誌の経営に献身した。波陣洞の編んだ「都わすれ」（昭53）が遺句集となった。（新明紫明）

水野波陣洞（みずのはじんどう） 明30・11・3～昭55・11・20（1897～1980）〔俳句〕名古屋市生まれ。本名繁松。大正12年山下汽船鉱業会社の鉱山技師として渡道。その後、各地で土木測量等の業務に従事したが、昭和15年ころより独立して土木建築木材業を営み、札幌市に居住する。俳句は渡道当時、矢田挿雲の「千鳥」に投句していたが、昭和5年「ホトトギス」に参加、虚子門に入る。昭和21年1月富安風生、伊藤凍魚を選者に迎え、古田一也、小原野花らと共に「はまなす」を創刊。24年富安風生主宰誌「若葉」同人となる。「はまなす」は初め古田一也が編集発行を担当していたが、24年10月号より波陣洞が引き継ぎ、さらに29年には風生、凍魚が選者を辞し、やがて名実共に波陣洞の主宰誌となった。波陣洞は健康の俳句、清潔の俳句を提唱し、「はまなす」も初めのころの若葉的色彩の濃い作風から平明平易に徹するようになった。春菊夫人と共にその発行経営に力を尽くし、道俳壇に多くの俳人を送り出した。はまなす俳句会は昭和51年に札幌市文化奨励賞を受賞。「はまなす」は四一七号で終刊となった。北海道俳句協会顧問。句集に「雷鳥」（昭29）、「蟆篝」（昭45）、「緋桂」（昭54）があり、茨戸公園に〈白鳥の翼の唸りふり被り〉の句碑がある。（新明紫明）

水原秋桜子（みずはらしゅうおうし） 明25・10・9～昭56・7・17（1892～1981）〔俳句〕東京生まれ。本名豊。東京大学医学部卒。大学在学中東大俳句会設立、「破魔矢」選者となったが、昭和6年「馬酔木」創刊主宰。「自然の真と文芸上の真」の指標をかかげた。昭和38年6月来道、道東遊吟六泊七日、「馬酔木」に発表の「砂丘の花園」約一〇〇句はその時の記念作品である。56年〈葛しげる霧のいづこぞ然別〉の句碑を然別湖畔に建立。（島　恒人）

水見悠々子（みずみゆうゆうし） 明40・2・20～昭58・3・13（1907～1983）〔俳句〕後志管内古平町生まれ。本名喜多利。昭和4年服部畊石「高潮」に拠り、俳句文法の指導を受ける。5年高浜虚子「ホトトギス」に入会。15年中支戦線句集「廬山」を上梓。昭和26年11月NHKラジオで「郷土俳句」を放送。27年「ホトトギス」同人。同年「桐の葉」主宰野村泊月句碑〈蝦夷の古都古平浜の盆の月〉を自費建立。28年創元社の「現代俳句全集第1巻ホトトギス作家篇」に魚三〇句収録。30年道俳句協会委員。41年第八回全道ホトトギス大会を、43年開町一〇〇年協賛第一〇回全道ホトトギス大会を、それぞれ古平町で開催。52年後志教育局長より表彰される。昭和41年句文集「鰊百句」を、57年句集「雪」を刊行。58年親子句集「海幸山幸」を長男寿男により刊行。59年5月親子句碑を建立する。〈浜篝たちまち並び鰊群来〉（太田緋吐子）

水本森々（みずもとしんしん） 大3・8・5～（1914～）〔俳句〕香川県生まれ。本名春信。昭和8年より作句を始め、9年「石楠」（臼田亜浪）、「時雨」（牛島滕六）、「暁雲」（青木郭公）に参加、師事する。14年「暁雲」同人。50年「葦牙」（山岸巨狼）、「アカシヤ」（土岐錬太郎）の同人、56年「葦牙」金剛集同人。昭和20年から47年まで美幌俳句会長。55年文芸北見賞を受賞し、同年北見いちい俳句会主幹となる。（太田緋吐子）

水守亀之助（みずもりかめのすけ） 明19・6・22～昭33・12・15（1886～1958）〔小説〕兵庫県生まれ。「帰れる父」（大9、新潮社）で登場、大正文壇に地歩を築いた。長編「我が墓標」（大15・5、大阪屋号書店。「北海道文学全集」5に抄録）には死刑囚の手記に基づくタコ部屋労働描写がある。（小笠原克）

三谷　昭（みたにあきら） 明44・6・5～昭53・12・24（1911～1978）〔俳句〕東京生まれ。昭和5年より俳句に親しみ、「走馬灯」「京大俳句」「天香」に所属して新興俳句運動に挺身中、15年5月京大俳句弾圧事件に連座して検挙投獄。23年「天狼」創刊とともに同人参加。31年現代俳句協会幹事長。次いで42年から48年まで会長。49年8月粕谷草衣句集出版記念会出席のため来札した。句集「獣身」をはじめ著書多数。（園田夢蒼花）

三谷木の実（みたにこのみ） 明43・1・8～（1910～）〔詩〕兵庫県生まれ。本名和子。小学校のころより詩を作り始め、西條八十の「蠟人形」に参加した。昭和23年十勝の更別原野に入植した。帯広の「オメガ」の同人たちと交流し、その後上川管内美深町へ移り、高校教師となる。「青芽」「核」同人。詩集に「雪と霧とランプの詩集」（昭42・5、北書房）、「悲に向く華」（昭56・11、核双書）があり、第一詩集「雪と霧と…」は一〇年間にわたる更別での開拓者としての生活を歌った叙情詩であり、「悲に向く華」は人間存在とその悲しみを深く表現している珠玉の作品集である。札幌市在住。（小松瑛子）

三田朧波（みたろうは） 明25・1・22～昭50・7・28（1892～1975）〔俳句〕富山県生まれ。本名久次郎。大正6年日本製鋼所勤務中、社内鋼友吟社に入り句作を始める。昭和9年「暁雲」、つづいて「石楠」に入会、青木郭公、臼田亜浪に師事したが、戦後「緋衣」の創刊にあたり、幹部同人として参加、かたわら桂信子の指標に共鳴、「草苑」に拠った。室蘭地区の現代俳句普及につとめ、昭和34年句集「南岬」、47年「背荷」を刊行。（島　恒人）

満岡照子（みつおかてるこ） 明25・7・21～昭41・7・13（1892～1966）〔短歌〕胆振管内白老町生まれ。本名テル。「詩歌」「芸林」「新墾」「青空」に所属。観螢、凡平と親交。鉄幹夫妻、牧水、夕暮らの来訪も受けた。東京で没。他の筆名に落葉秋子、白樺秋子がある。歌集に「火の山」、遺歌集「火山灰地」がある。（北川緑雨）

光城健悦（みつじょうけんえつ） 昭11・3・15～（1936～）〔詩〕函館市生まれ。北海道学芸大学函館分校卒。室蘭市小学校教員。昭和38年「ダイアル」、40年「時間」同人となってネオ・リアリズムの洗礼を受ける。40年詩集「蝶と薔薇」を出し、また同人誌「形象」を発行。43年「バターの馬」同人。「形象」終刊となり、44年同人誌「パンと薔薇」（室蘭）を発行。44年詩集「魚の形」「春眠」刊行。46年「核」同人。47年詩集「雪の日」、49年詩集「秋の水」刊行。55年詩集「人名伝」によって昭和56年度北海道詩人協会賞、室蘭文化連盟芸術賞を受賞。56年文芸誌「巡礼」発行、散文でも活躍を始める。57年には室蘭開港一一〇年記念事業のために室蘭文化連盟舞台合同公演の脚本「室蘭屯田兵」を書き下ろした。（瀬戸哲郎）

三ツ谷謐村（みつやよりそん） 明37・12・4～昭53・10・14（1904～1978）〔俳句〕胆振管内追分町生まれ。本名弘郷。昭和3年法政大学卒。北海製紙に入社。同支配人を経て、小樽興織工場長。昭和25年に潮物産社長。41年北海コーキング株式会社を創設。経済人として、成果を挙げたほか、行政への協力や、社会福祉活動に関係した。昭和8年ホトトギスに入選、以後高浜虚子、年尾に師事、ことに年尾とは親交を深め、銀鱗荘に〈遠き家の氷柱落ちたる光りかな〉の年尾句碑を建立す

る。昭和23年より函館で発行していた「緋蕪」を小樽から発行し主宰。24年ホトトギス同人となり、小樽の教育文化の推進に活躍し、49年小樽市教育文化功労賞を受賞。ユネスコ会理事、小樽文学館設立期成会副会長、小樽市社会教育委員会議長、小樽地区保護司会長。48年法務大臣表彰（保護司功労者）、北海道知事表彰（北海道社会福祉貢献者）を受ける。小樽ホトトギス会長、小樽俳句協会長。小樽水天宮境内に〈柳絮とび我が街に夏来りけり〉の句碑がある。句集は「初蝶」「啓蟄」の二冊。（白幡千草）

三戸杜秋（みとゆう）　大15・3・28～昭60・2・4（1926～1985）〔俳句〕稚内市生まれ。本名敏明。電電公社に勤め退職。昭和23年より作句、富安風生の門に入る。「はまなす」「春嶺」「若葉」に投句し、新進作家として注目される。23年稚内市在住当時、東京の「若葉」同人渡辺大年を選者として「海藻」を発刊（昭38終刊）、38年「青女」創刊に参加。「若葉」同人、「青女」同人会長、俳人協会員。旭川市で死去。（新明紫明）

水戸部孝助（みとべこうすけ）　明39・2・5～（1906～）〔短歌〕新潟県生まれ。昭和44年「青空」に入会、47年青空賞を受ける。53年度北海道歌人会競詠で準入選。現在「青空」編集同人、凡平会副会長。（青山ゆき路）

碧川企救男（みどりかわきくお）　明10・4・27～昭9・4・12（1877～1934）〔新聞記者〕福岡県生まれ。東京専門学校卒。網走監獄に勤めたあと、札幌の北海時事、北海タイムス、小樽新聞と歩く。社会主義思想によるその言論は労働運動の指導にもおよんだ。明治末期から革新派記者として北海道の新聞界に多くの実績を残した。七歳のとき生別した詩人三木露風の実母かたを妻としており、のち露風は碧川家と親しむ。（木原直彦）

水上　勉（みなかみつとむ）　大8・3・8～（1919～）〔小説〕福井県生まれ。一家は貧窮をきわめ九歳のとき京都の寺の徒弟となる。代表作「雁の寺」の原体験。以来職を転々とし苦労を重ねる。「雁の寺」は昭和36年に直木賞を受賞したが、私小説的要素をもつ推理小説として反響を呼んだ。「五番町夕霧楼」「越前竹人形」などの代表作を持つが、37年1月から12月まで「週刊朝日」に連載した「飢餓海峡」（昭38・9、朝日新聞社）は、この作家の文学的特質を決定づけている。29年の台風一五号による洞爺丸沈没と岩内大火という大惨事を敗戦直後の22年秋に移しかえ、そこへ孤愁を背負って歩む一人の男を投入して人間の〝飢餓〟を描いており、その着想は秀抜。柴田錬三郎らと講演旅行をした折に想を得たという。39年に映画化されて評判を呼んだ。本道に取材した代表作に数えられる。根室半島を舞台にした社会派小説「海の墓標」（昭53・3、実業之日本社）もある。（木原直彦）

水無川理子（みなかわみちこ）　昭24・6・16～（1949～）〔詩〕桧山管内北桧山町生まれ。本名土岐則子。今金高等学校卒。昭和46年詩誌「パンと薔薇」同人。その後「アンドロメダ」「北海詩人」同人になるが、現在フリー。47年第一詩集「哀海」で道詩人協会賞を受賞する。青年期の痛みをみずみずしい感性でつづり、大型新人として登場した。網走管内西興部村で地方史にかかわり調査、編集を手がけている。道詩人協会員。（光城健悦）

水無瀬白風（みなせはくふう）　明31・10・22～昭44・8・7（1898～1969）〔俳句〕生地不詳。本名繁雄。昭和6年より石田雨圃子の指導を受け、「ホトトギス」に投句。のち高浜虚子、年尾、星野立子に師事し、鮫島交魚子をはじめ伊藤彩雪、久保田一九、高橋渓河らと共に札幌ホトトギス会員の指導に当たる。昭和41年医師として三八年間勤めた北辰病院を退く。ホトトギス同人。句集「秋風」「秋風その二」がある。（白幡千草）

湊　盤雄（みなといわお）　明40・12・26～昭57・12・26（1907～1982）〔短歌〕福島県生まれ。大正年間後志管内倶知安町に移住し、旧制札幌第一中学校卒。文部事務官となり、北海道教育大学附属図書館、同釧路分校事務長で退職。書道塾翠舟書院主宰。「あしかび」「風景」を経て、昭和33年「新墾」に入社、幹部同人、選者。46年7月歌集「風花」を出版。札幌市で没した。（鍋山隆明）

湊　正雄（みなとまさお）　大4・11・10～昭59・4・7（1915～1984）〔地質学、エッセー〕秋田県生まれ。北海道大学理学部卒。北海道大学名誉教授。著作に「地質学」「日本列島」「地球の歴史」（岩波書店）があり、知里真志保との長い交友から「アイヌ民族誌と知里真志保の思い出」の好著がある。（小松宋輔）

南田貞子（みなみだていこ）　昭2・1・21～（1927～）〔短歌〕東京生まれ。高等女学校卒。昭和19年農林省に就職。20年上川管内上富良野町に疎開し上富良野小学校教員。現在旭川市立保育所長。35年「北方短歌」、39年「コスモス」入会。40年に北方短歌酒井先生賞を受け、43年北海道歌人会賞に準入選。現在「北方短歌」編集同人。知性的心象表現で独自の境地を詠む。（江口源四郎）

南　利一（みなみとしかず）　大9・9・7～（1920～）〔俳句〕札幌市生まれ。昭和20年中国で終戦を迎え、翌21年復員。俳句は復員待機中、中隊内で詩、短歌、俳句の会に入ったときから始めた。復員後は豊島博男を通じ富岡木之介の「青炎」入会同人となる。26年細谷源二の「氷原帯」に加入、編集同人となり、49年から数年編集長を務める。昭和30年代北光星らと共に同人誌「礫」を創刊、32年には家業の馬鈴作りから生まれた第一句集「鈴師」をもって一挙に俳人としての声価を高める。この句集には屑屋に転職してからの異色作も含まれている。〈黄金のごとき畳にこぼれかなしき焼酎〉は絶唱。49年第二句集「青い鸚鵡」を上梓、作品はいよいよ童謡風な味を濃くする。50年札幌市民文化奨励賞を受賞。現代俳句協会北海道地区会議の役員をも長く務めた。「氷原帯」のほか「粒」「北群」の同人。（川端麟太）

源　鬼彦（みなもとおにひこ）　昭18・10・9～（1943～）〔俳句〕樺太生まれ。本名進。昭和41年より北光星に師事、54年俳誌「道」の編集部長となる。若手の旗手として張りのある作品を発表、59年道俳句作家賞を受賞。句集に「白鳥」「流韻」がある。俳人協会員。（北　光星）

峰　一（みねはじめ）　昭4・12・4～（1929～）〔小説〕釧路管内厚岸町生まれ。本名山根峯雄。小学校教員を経て北海道新聞記者。道内同人雑誌の秀作に何度か選ばれ、文学界新人賞、太宰治賞の候補予選通過歴を持つ。「海の流れ」「花札」「葬送記」はいずれも「潮想」に掲載して好評。「北海文学」同人。（鳥居省三）

見延典子（みのべのりこ）　昭30・8・2～（1955～）〔小説〕札幌市生まれ。本姓豊田。札幌南高等学校から早稲田大学文学部文芸科卒。昭和48年「指」で第一回有島青少年文芸賞に入選。大学の卒業論文として書いた小説「もう頬づえはつかない」（昭53・5、「早稲田文学」）が53年11月に講談社から刊行されてベストセラーとなり、翌年には映画化（ATG、東陽一演出）もされた。短編集に「いつのまにか晴れた空」（昭56、講談社）ほかがある。（日高昭二）

三村美代子（みむらみよこ）　昭10・5・16～（1935～）〔詩〕函館市生まれ。北海道学芸大学函館分校卒。小学校教員。詩誌「不凍港」「狼火」「さざなみ」から、昭和47年「パンと薔薇」同人。道詩人協会員で51年第一詩集「水のこころ」を刊行し、翌年「核」同人。エロスの世界を追っていたが、近年は形而上の分野に切り込み、世評は高い。室蘭文芸奨励賞受賞。室蘭文芸協会事務局長。（光城健悦）

宮内寒弥（みやうちかんや）　明45・2・28～昭58・3・5（1912～1983）〔小説〕神奈川

県生まれ。本名池上子郎。昭和10年早稲田大学英文科卒。大正12年に中学教師であった父の任地樺太へ渡り少年時代を過ごす。チェーホフが訪れた樺太の流刑監獄の跡が舞台の「中央高地」(昭10・8、「早稲田文学」)が芥川賞候補となる。以後「都会への憧憬と北方の辺境へのノスタルジーを抒情的な文体で描いた作品が好評を博した」(八木義徳)。荒涼たる樺太の自然を背景に野性的なエロチシズムを描いた中編「白い焰」(昭13)などがあり、短編を収めた「からたちの花」(昭17・9、大観堂)にも樺太ものが多い。「七里ヶ浜」(昭53・1、新潮社)は、明治43年の七里ヶ浜ボート遭難事件で責任を負って樺太に渡った父をモデルにした戦後の代表作。宮内文学の全容は「宮内寒弥小説集成」全一巻(昭60・5、作品社)に収められている。昭和15年8月NHK札幌放送局による紀元二千六百年記念ラジオ座談会のため北海道出身の中村武羅夫、岡田三郎、寒川光太郎、伊藤整と共に来道した。

(木原直彦)

宮川　稔　昭9・2・11〜(1934〜)〔短歌〕東京生まれ。北海道教育大学旭川分校卒。戦後北海道に移住。旭川市神居古潭小学校を経て同市青雲小学校教諭。昭和32年「北方短歌」に入会、小林孝虎に師事し編集同人となり、同会の進展に大きな力を注ぐ。54年からは「北方短歌」の選者。旭川歌人会委員。作風は、つねに真摯であり謙虚。「北方短歌」が掲げる〈北方性〉の追求に向かう実践の一人である。〈日暮るるを寂しと言はぬ影とゐて雪の炎の明りを見つむ〉

(小林孝虎)

宮川ゆみの　大9・4・3〜(1920〜)〔小説〕大分県生まれ。本名三河登久。昭和12年庁立函館高等女学校卒。16年から札幌居住。「北方文芸」に「白い街に」「夢の中の風景」「淡雪の海」などを発表。主要作に「魚粕干場の周囲」(「北海道新鋭小説集1983」収)がある。

(小笠原克)

宮口良朔　大12・1・26〜(1923〜)〔短歌〕富良野市生まれ。本名良作。日本大学国文専攻科卒。戦前は樺太庁森林主事であったが、引き揚げ後に教員となり、日高管内と苫小牧市の小、中学校の教壇にたち、苫小牧市糸井小の校長を最後に退職。現職中に教育新潮賞、教育技術賞を受賞したほか苫小牧市社会教育委員、北海道国語教育連盟委員、苫小牧市国語研究部会長として活躍した。戦前は「樺太短歌」に所属。引き揚げ後は「羊蹄」を経て昭和25年「新墾」、27年「潮音」入社、同人。34年より「新墾」選者。28年「日高路」(のち「日高短歌」)を創刊、編集人。34年「勇払短歌会」を結成、43年「ヌプリ短歌会」に合併して現在に至る。ヌプリ短歌会合同歌集として「すそ野」「燎原」「暁天」「湿原」を刊行し、いずれも編集発行人。51年「苫小牧短歌会」発足、現在会長。57年同協会合同歌集「蒼天」を編集発行した。59年「苫小枚短歌事典」を編集刊行。校歌も作詞した。〈うるみゐる千の子の眼が背なを追ふ民話を終へて壇降るとき〉

(椎名義光)

三宅草木　明40・2・28〜(1907〜)〔俳句〕十勝管内池田町生まれ。本名正七。旧制野付牛中学校中退。池田町収入役等地方公務員を勤めた。昭和5年ころより句作に入る。高浜虚子の指導する花鳥諷詠派と、河東碧梧桐の主唱になる新傾向の自由律俳句に対し、臼田亜浪の「石楠」派の主張が、当時の北海道では青木郭公の創刊になる「暁雲」を通じて、多くの人に影響を与えた時代だが、その「暁雲」に拠ると共に、昭和10年から「石楠」にも参加、自由闊達で個性的な作風を学ぶ。15年長谷部虎杖子の「葦牙」、56年角川源義の「河」のち「人」同人。55年から木村敏男の「にれ」同人。昭和21年第一句集「火雲」、52年第二句集「夏銀河」を刊行。風土に立脚した体臭を濃く滲ませた作風である。昭和46年北海道社会貢献賞、54年池田町文化賞等を受賞。〈天平の屋根よりも反り雛の太刀〉

(木村敏男)

三宅知子　昭21・7・17〜(1946〜)〔童謡詩、児童文学〕室蘭市生まれ。中央大学文学部卒。大学在学中から童謡を書き始め、昭和50年「おひさまとかけっこ」(北書房)を、続いて「空のまどをあけよう」(昭57、チャイルド本社)を出版。この詩集で第一一回日本児童文芸家協会新人賞を受賞した。59年フレーベル館から童話集「ママナスの咲く電話ボックス」が出版され、童話にも新境地を開く。そのほか多くの童謡、合唱曲、歌曲の作詞がある。日本童謡協会員、日本児童文芸家協会員、詩と音楽の会員。とくに童謡は早くから高い評価が与えられており、「みずみずしい感覚」(渡辺ひろし)、「感傷とか抒情とか(いう)言葉自体が古く見えるような現代の子供の明るさ、自由さがその作品世界に生きて」おり「思い入れや詠嘆をみごとにとび越えて(いる)」(加藤多一)という。

(笠原　肇)

宮崎郁雨　明18・4・5〜昭37・3・9(1885〜1962)〔短歌〕新潟県生まれ。本名大四郎。庁立函館商業学校卒。在学中から文学に親しんだ。卒業後、一年志願兵として旭川野砲兵第七連隊に入営、砲兵少尉となって除隊。その後家業の味噌醸造業を手伝いながら、明治39年10月「紅苜蓿」が発行されるとその同人に加わる。石川啄木が明治40年5月に来函すると、その文才に尊崇の念を抱くとともに、啄木の経済生活を知り、深い同情を寄せるようになる。啄木の北海道時代はもちろん、上京後も、さらに啄木死後の遺族に対してまで物心両面から熱心に援助した。明治42年10月啄木の妻節子の妹と結婚、啄木の義弟となる。啄木に対しては終生変わらぬ敬慕の情を寄せた。大正12年父の死去により、家業を受け継ぎ、社会事業にも積極的で、不幸な人々の後援に尽力した。大正14年社団法人慈恵院監事、昭和8年常務理事となる。9年の函館大火で家屋倉庫を焼失してからは、家業を廃して慈恵院の事業に専念。21年慈恵院常務理事の職を辞し、市立函館図書館長の事務を取り扱ったが公職追放となった。主な著書に「函館の砂」「郁雨歌集」がある。函館市文化賞受賞者。

(福地順一)

宮崎　衡　大5・4・24〜(1916〜)〔劇作〕朝鮮羅南生まれ。京都絵画専門学校日本画科卒。昭和26年北海道高等学校教職員組合文化部長として全道高校演劇コンクールを企画、発足させ、北海道高校演劇の基礎固めに当たった。以来二六年間、美唄東高校演劇部顧問として高校演劇を指導、49年の全国高校演劇コンクールでは、自身の作「あるHR日誌」で優秀賞、創作脚本賞を受賞した。

(本山節弥)

宮崎正夫　昭15・8・15〜(1940〜)〔短歌〕空知管内新十津川町生まれ。一九歳から作歌を始める。昭和38年「新墾」に入社後その才能を発揮し第一〇回新墾新人賞を受賞。続いて第一四回新墾賞も受賞し、その実存主義的な傾向の作風を属目された。その後「新墾」を離れて「潭」に入会、編集委員をしていたが現在は無所属。北海道歌人会幹事を務めたこともある。

(永平利夫)

宮崎昌子　大7・3・21〜(1918〜)〔短歌〕札幌市生まれ。庁立札幌高等女学校から東京家政学院卒。父が専務であった福山醸造に谷口波人が総務部長として勤めたことから作歌に入る。「ぬはり」に入社、二度にわたって社賞を受けたが、波人の没後に退社。「原始林」「武羅佐岐」に同人として一時所属。現在は、師と仰ぐ上野新之輔が創刊した「由紀坐左」の月例歌会運営責任者。

(横井みつる)

宮崎芳男　明34・9・1〜(1901〜)〔短歌〕空知管内栗沢町生まれ。

少年時代から文学を愛好し、網走管内訓子府町の未墾地開拓の労働をしながら短歌や俳句に熱中。大正9年訓子府小学校代用教員となり、11年検定試験で訓導、13年札幌市立北光小学校に転任、昭和10年文部省の師範学校、中学校、高等女学校地理検定試験合格の後、庁立札幌第一中学校教諭、その後指導主事、札幌市内の高校長を歴任し、37年に定年退職。退職後は札幌市桂台土地区画整理組合理事長を一〇年間務め、その間に北海道教育功績者賞を受賞、52年4月勲四等瑞宝章を受章。昭和5年「新墾」に入社して小田観螢に師事、同年「潮音」にも入社。32年から「新墾」の編集発行人となり、57年同誌の代表となる。なかでも編集担当の間の昭和35年「新墾」を全国短歌雑誌連盟賞受賞へ導き、毎年の地区大会、五〇〇号記念、創刊五〇周年記念等の行事を精力的に指導運営、48年の小田観螢の急逝という重大事を克服して、「新墾」を今日に導いた。56年札幌市民文化奨励賞を受け、さらに58年12月に北海道文化団体協議会より道文団協賞を「新墾社」として受賞した。著書には「冬谺」(昭36)、「無限」(昭42)、「北辰」(昭48)、「地下鉄」(昭52)、「雪天」(昭57)の歌集がある。強靱な精神力と誠直な人柄をもって貫く六〇年の歌の世界は、「骨の芸」と言われるゆえんである。小田観螢が提唱した北方の生命感的抒情を忠実に実践して、北海道の風土を個性的に骨太く形象する。自ら「歌は人なり」との主張と信念に徹し、生え抜きの道産子歌人として昭和5年創刊の「新墾」を今日にあらしめると共に、北海道歌壇の発展に尽くした超結社的指導力は高く評価されている。〈幻想を未だ残せる齢なれば火箭が欲しき山の夕映え〉　(足立敏彦)

宮沢賢治　明29・8・27～昭8・9・21(1896～1933)〔詩、児童文学〕岩手県生まれ。心象スケッチと名付けた独特の構想と手法で数多くの詩を書き、大正13年詩集「春と修羅」(関根書店)、童話集「注文の多い料理店」(光原社)を出版。稗貫農学校(現花巻農業高校)教師辞任後、農業実践に献身し、風雨の中を奔走して病に臥す。その間「オツベルと象」「風の又三郎」「セロ弾きのゴーシュ」等の名作を書いた。多くの作品は幾度もの夥しい手入れと加筆があり、その未完の草稿そのものが次元をこえる文学として評される。北海道には三度訪れ、大正12年樺太までの旅が亡妹トシの幻影を追尋した「オホーツク挽歌」詩群となり、モチーフとなって童話「銀河鉄道の夜」が書かれた。北海道での詩は一〇編、関連作品は数多い。地質学や農芸化学の分野でも優れた先見性をのこし、法華経一〇〇〇部の配布を遺言。死後「雨ニモマケズ」手帳が発見された。　(斉藤征義)

宮田黄李夫　大15・6・8～(1926～)〔俳句〕渡島管内八雲町生まれ。本名哲夫。国鉄職員、57年退職。昭和19年ころより俳人である父陽之介の感化を受け、矢田枯柏に師事、「柏」「径」「草人」同人。枯柏死後は無所属。24年同志と「青年俳句作家サークル」を結成、青年作家の意気を燃やす。46年釧路俳句連盟幹事長となり、地域俳壇の要として活躍。現在ハガキ俳誌「心垢抄」を継続。現代俳句協会員。　(鈴木青光)

宮田新一　明32・12・24～(1899～)〔短歌〕秋田県生まれ。昭和2年東京大学国文科卒。札幌第一中学教諭として一五年間在職、17年留萌中学校長、以後道内高校長を歴任、35年札幌西高校長を定年退職。札幌大学講師。道教育界の重鎮として活躍した。作歌は、昭和4年宇都野研の「勁草」に所属、「短歌月刊」特集の各社推薦新人競詠号に推薦されたこともある。昭和初頭、戦時色の深まるにつれ、作歌を中断、三十数年の空白を経て41年7月「原始林」に入社。51年夫人を失い、切実な挽歌を多く発表している。それらをまとめ、52年歌集「無明混沌」、引きつづき「心の落差」(56年)を刊行。歌は、清朗で平明率直、いささかの渋滞もなく詠まれているものが多い。〈島影は陽がありながら見えわかず海はろばろと潮けぶりして〉　(中山周三)

宮田千恵　大15・9・13～(1926～)〔短歌〕稚内市生まれ。昭和18年「水松」に入会。以後「あさひね」「原始林」「新墾」「凍土」、あるいは「素」「斧」などに所属して活動するが、昭和34年北海道青年歌人会に入会してからは、作品の共同制作に参加して意欲的な作品を発表し注目された。現在は「かぎろひ」所属。昭和56年北の風土とのかかわりの中に生の苦渋を盛った歌集「北の鎖骨」を刊行した。　(永平利夫)

宮田　久　大6・10・30～(1917～)〔新聞記者〕富山県生まれ。庁立札幌第一中学校を経て上智大学卒。昭和21年外地から帰還して北海タイムス社入社。編集局長などを務め、35年から論説委員としてコラム「亜寒帯」を執筆。エッセー集「私の『亜寒帯』」(昭53・11、北海タイムス社)がある。　(木原直彦)

宮田益子　大4・12・18～昭46・10・25(1915～1971)〔短歌〕新潟市生まれ。帯広裁縫女学校卒。昭和2年野原水嶺ら潮音系歌人の影響で作歌を始め、9年「潮音」「新墾」に入社、太田水穂、小田観螢に師事。13年中国へ渡り21年引き揚げ。旭川市近郊の東川町に居住し「潮音」「新墾」に復帰、「女人短歌」にも参加し本格的な作歌活動を展開する。24年「女人短歌」の三〇首競詠で「石」一連が最優秀作品に選ばれ、歌壇に登場した。28年東京の長谷川書房から「新撰六人集」が刊行され、芦田高子、片山恵美子らと共に名を連ねた。この集に収録された「黄砂」七八首は、辛苦のはて引き揚げ、養鶏業を始めるまでの約一年間の記録詠で構成されている。29年山名康郎、中城ふみ子らと短歌同人誌「凍土」を創刊、意欲的に活動を展開したが、次第に歌人の枠を超え、道内の文化運動に熱を入れるようになった。39年札幌の北書房から個人歌集「雪卍」を刊行。浪漫的色彩の豊かな北の風土詠が核をなしているが、なかには傷心を抱いた孤独な生活詠もみられる。「凍土」を発展的に解消して41年「新凍土」を発刊。没後、遺歌集「藻岩嶺」が刊行された。北海道歌人会創立以来の幹事であり、北海道文学館理事も務めた。　(山名康郎)

宮田陽之介　明35・12・20～(1902～)〔俳句〕渡島管内八雲町生まれ。本名勝蔵。実業補習学校卒。表具師。大正10年「高潮」に拠り作句。15年に生雲社創立、「雲」を発行。昭和5年臼田亜浪の「石楠」に拠り開眼。23年矢田枯柏主宰「草人」発行編集同人。35年芦別俳句連盟会長。57年室蘭俳句協会設立、顧問。現在「寒雷」所属、「にれ」同人。56年に第一句集「まつり笛」を「にれ叢書」として刊行した。　(竹田てつを)

宮西頼母　大7・2・11～(1918～)〔短歌〕札幌市生まれ。農業。昭和24年「原始林」入会に始まり、30年同人。40年に歌集「防風林」を、51年に「拓北」を刊行した。このほかに43年度宮中歌会始に〈チモシーの禾積つみ終へし土手のうへ石狩川は波立ちて見ゆ〉が入選し、51年11月札幌市北区拓北会館横に歌碑として建立された。55年には「拓北百年史」を編集責任者として発刊した。北海道歌人会幹事、北海道文学館理事、札幌市文化団体協議会理事、しのろ短歌会代表。歌風は明るく漸進的で、土の素朴を失わず、農村から眺めた社会詠も、明快に事実を衝いて後味がよい。〈レーダーの基地化をめぐり争へる馬追山か静かに今は〉　(土蔵培人)

宮之内一平　大2・10・1～(1913～)〔小説〕空知管内浦臼町生まれ。上川管内東川小学校高等科卒。農業に従事したあと昭和11年上京。13年「選

鉱婦」が「文芸首都」の新人創作佳作となる。この間いくつかの職業を転々とし、東宝有楽座などに勤める。本庄陸男を知る。戦後旭川に戻り、「愛欲図」「銀座の歌」等を書くが、30年「談合」が「サンデー毎日」大衆文芸懸賞の佳作となり、さらに「造材飯場」が同誌百万円懸賞佳作となった。33年それまでの作品一六編を集めて小説集「造材飯場」を北方公論社から刊行。35年より「豊談」の経営にのりだした。44年旭川市民文化奨励賞。46年エッセー集「被写体」、50年「啄木釧路の七十六日」をそれぞれ旭川出版社から刊行。また、青春期に短歌への情熱をもやし、並木凡平らに師事していたこともあり、その集成として53年歌集「野草園」をまとめている。59年「翌桧」を書く。（高野斗志美）

宮之内紫乃（みやのうち しの）　大3・12・12～（1914～）〔短歌〕青森県生まれ。本名みつえ。大正8年渡道、小樽市に居住。昭和19年東京都より旭川市に疎開して現在に至る。一〇代のおわりころから作歌を始め「青空」に入社。昭和29年「かぎろひ」創刊に参加。52年歌集「花晨」を上梓。（木村　隆）

宮野　駿（みやの しゅん）　大12・5・12～（1923～）〔小説〕小樽市生まれ。昭和16年に北原白秋主宰「多磨」に入会。41年5月より同人誌「意識」に拠る。「ネガチブな人」「切る」などの小説のほか「A君への手紙〝多喜二～タキ世界〟の盲点に触れて」（昭42・10、3号）がある。57年4月号「北方文芸」に「田口タキ・逆説的な愛を貫いた誠実―不条理の座から見えてくるもの―」を発表した。（木原直彦）

宮原晃一郎（みやはら こういちろう）　明15・9・2～昭20・6・10（1882～1945）〔児童文学〕鹿児島県生まれ。本名知久。父の勤めに従い幼年期に札幌に移り、のち小樽新聞の記者となる。明治43年ごろより農科大学教授の有島武郎と交わる。のち上京、大正7年「薤露（ラッキョウ）に代へて」が出世作となり、雑誌「赤い鳥」に童話を発表。童話集「竜宮の犬」などのほか、北欧文学の翻訳紹介書多数。有島武郎については「私の有島武郎氏観」などがある。（高山亮二）

宮部金吾（みやべ きんご）　万延1・3・7～昭26・3・16（1860～1951）〔植物学〕東京（江戸御徒町）生まれ。内村鑑三、新渡戸稲造らとともに札幌農学校第二期生として卒業。ハーバード大学に留学後、母校で研究と教育に専念。昭和2年北海道大学名誉教授となった後もすぐれた研究業績をあげた。「千島植物誌」「樺太植物誌」「北海道産昆布科植物」「北海道主要樹木図譜」「北海道アイヌ語植物」など。文化勲章受章。日本学士院会員。（和田謹吾）

宮部鳥巣（みやべ ちょうそう）　大10・9・19～（1921～）〔俳句〕深川市生まれ。本名森本敏次。多度志村役場在職中応召、シベリア抑留を経て復員、京呉服商を営む。昭和12年より句作「暁雲」に投句、13年「石楠」に拠り18年同人、応召中句作を中断、23年「北方俳句人」「氷原帯」に加入、細谷源二に師事、「氷原帯」編集同人。第一回氷原帯賞を受賞。昭和31年から38年まで句作休止。48年斎藤玄の個人誌「丹精」に「蓮の景」三〇句を発表して復帰、「壺」復刊に同人参加、一時編集を担当した。55年同素玄集（無鑑査）同人。59年句集「磐石」出版、昭和12年から58年の作品三二八句を収め、後記に「愚直であることを処生の根本に据え、愚直の故を以て到達し得る俳境を終生の目的とする」と覚悟を述べている。俳人協会員。〈子のつむりぬくくて天にためらふ雪〉（金谷信夫）

宮本顕治（みやもと けんじ）　明41・10・17～（1908～）〔政治、評論〕山口県生まれ。東京大学卒。文芸評論から政治活動に入り、非合法時代・獄中一二年の非転向時代・戦後を通して日本共産党の最高幹部の地位にある。「宮本顕治文芸評論選集」

四巻（新日本出版社）には小林多喜二、今野大力らへの論及がある。（小笠原克）

宮本貞子（みやもと さだこ）　昭7・7・9～（1932～）〔短歌〕樺太生まれ。紋別市を経て昭和34年から根室市に居住。短歌は「新墾」に所属しながら、そのオホーツク体験や国境の海の体験からの制作をしたが、北海道新聞のコラム「朝の食卓」の同人としても活躍。情感や個性を発揮して、53年に歌、随筆集「海ほほづきの歌」を発刊した。（水平利夫）

宮本はるお（みやもと はるお）　大7・9・5～（1918～）〔俳句〕上川管内当麻町生まれ。本名晴男。昭和28年「緋衣」「青炎」により作句を始める。「山脈」「樹氷」「季節」「広軌」「氷原帯」各同人。昭和52年士別市に俳句教室開講。士別市文化功労賞を受賞。現代俳句協会員。（園田夢蒼花）

宮本百合子（みやもと ゆりこ）　明32・2・13～昭26・1・21（1899～1951）〔小説〕東京生まれ。父中条精一郎が札幌農学校建築設計に札幌へ赴任し、幼時を札幌で過ごす。日本女子大学在学時「貧しき人々の群」（大5）ではなばなしく登場。大正7年3月から8月まで来道、バチラー家で養女の八重子を知り、アイヌ悲史に心を動かされて胆振、日高のコタンを八重子と巡り、静内で出会った老爺にヒントを得て「風に乗って来るコロポックル」を書く（生前未発表）。同年秋渡米、荒木茂を知り結婚（大正13年離婚、大作「伸子」に結実）。昭和2年ソビエトへ。帰国後宮本顕治を知り7年2月に結婚。しかしその直後、顕治は非合法に入り検挙され、敗戦まで分断された生活だった（顕治は昭和20年1月から網走刑務所在監、往復書簡「十二年の手紙」がある）。戦後「播州平野」「道標」などを書く。「宮本百合子全集」二五巻、別巻二、補巻二、別冊一（昭56、新日本出版社）がある。（小笠原克）

宮脇俊三（みやわき しゅんぞう）　大15・12・9～（1926～）〔紀行〕埼玉県生まれ。東京大学卒。汽車旅行記が多く、日本ノンフィクション賞の「時刻表2万キロ」や「最長片道切符の旅」「汽車旅12カ月」「終着駅へ行ってきます」「旅の終りは個室寝台車」「終着駅は始発駅」「殺意の風景」などで道内各線を描く。（木原直彦）

宮脇　竜（みやわき りゅう）　昭7・1・1～（1932～）〔俳句〕空知管内北竜町生まれ。本名順治、旧号白童子。昭和26年より作句、北光星に師事。27年「氷原帯」に入会、30年氷原帯新人賞受賞。31年北光星、田中北斗らと「礫」を創刊、以来「扉」「道」と行動を共にし、「道」同人。35年句集「二色の天地」、44年合同句集「北竜」、52年妻宮脇美和子との夫婦句集「虹二重」を上梓。（北　光星）

三好達治（みよし たつじ）　明33・8・23～昭39・4・5（1900～1964）〔詩〕大阪生まれ。昭和5年処女詩集「測量船」を「今日の詩人叢書」の第二巻として第一書房より刊行。百田宗治の「椎の木」で伊藤整と交友をもつ。「詩と詩論」「詩行動」「四季」などに詩を発表。北海道には二度来ているが、最初は大阪陸軍地方幼年学校から士官学校へ入ったころで、一人で美唄の友人の家を訪ねる（大9）。のちエッセー集「月の十日」（昭39・11、新潮社）の旅のため来道した。札幌市の大通逍遙地、北大、狸小路、豊平川、定山渓、豊平峡、さらに進んで摩周湖、阿寒の紀行文がある。三好が旅したのは昭和31年のことであるが、伊藤整にアカシアの花咲く6月が快適といわれながら秋に来道。いささか気落ちのしている文章である。昭和22年12月札幌・青磁社より発行された詩誌「至上律」第二号に四行詩七編を寄稿、36年1月北海道新聞に詩「さざ波」を載せている。（小松瑛子）

三好文夫（みよし ふみお）　昭4・11・23～昭53・7・3（1929～1978）〔小説〕富良野市（山部）生まれ。北海道第一師範学校中退。美瑛、愛別、士別、旭川の各地で

小学校教員。昭和29年「ビルトに纏る譚」が北海日日新聞社の一〇万円懸賞小説に一位入選。同社の木野工にさそわれ「冬涛」同人となり、以後42年まで主として同誌に作品を発表していく。長編「虹の擾乱」のほか、「ペシトレエトの咄」「山に消える」「竪穴十六号」等を書き、38年から「冬涛」を編集。40年同誌二二号に発表した「重い神々の下僕」が直木賞の有力候補作となった。和人（シャモ）のアイヌ差別への告発と贖罪、自立するアイヌへの共感が作品世界をささえた。42年「ラウンクツの女」を「別冊小説現代」に発表。同年高野斗志美と「愚神群」創刊。45年教職を辞す。この年、本郷新を相手に風雪の群像論争をまき起こし、アイヌ差別の問題を強烈にアピールし、全国的な反響を呼び起こした。46年旭川文学学校の校長となる。47年「シャクシャインが哭く」を潮出版から出版。さらに49年同社から小説集「重い神々の下僕」が刊行された。版画にすぐれ、「コタンの芸術」（昭46）のほか、「大雪山粗描」（昭51）、「梟の唄」（昭53）等の豆本がある。この間、古墳発掘に参加。また大雪山脈を愛し、グループ山の村の村長をつとめる。52年ネパールを歩く。53年愛山渓の山の村パーティーで急逝。54年遺稿「人間同志に候えば」が水平社から刊行された。

（高野斗志美）

三吉良太郎　明40・12・11～昭35・5・8（1907～1960）〔詩〕弘前市生まれ。大正8年に海とエキゾチックにあこがれ、津軽海峡を渡って函館に住みついた。「日本詩壇」の同人を経て昭和17年に詩誌「涛」を創刊。19年第二〇号で休刊。終戦の翌年「涛の会」を「道南詩人くらぶ」と改称して「涛」を復刊した。23年第三八号をもって終刊となったが、戦中、戦後の道南における詩の発掘と育成に果たした役割は大きい。「涛」以後は詩誌「だいある」の同人として作品の発表を続けたが、前立腺ガンで没した。函館を第二の故郷としてこよなく愛した詩は、この港町の「奥行きの深さ」と「新しい情緒」をうたいあげ、一方、たくまざるうまさで庶民感情をたかぶらせた生活の詩を書き続けた。戦時中に印刷屋を廃業に追い込まれて北海道新聞函館支社に就職。有名な民謡詩人片平庸人とは同じ職場の仲間だった。詩集には「秩序なき貌」「虹の門標」がある。また詩形式に実験的な西脇順三郎の詩集「旅人帰らず」に刺激を受け、一冊一編、日記形式の詩集「秋風の饗宴」を出した。これはボワロオの「真ならずば美ならず」の思想に立って、時間性や物語性による異なった情景と情緒をからませて生活の側面を展開させたところの叙事詩でもあった。

（堀井利雄）

三輪不撓　明23・7・22～昭28・9・29（1890～1953）〔俳句〕東京生まれ。本名正雄。明治44年独逸協会中学校卒、明治大学予科を経て大正3年千葉医専薬学科卒。日本山岳会員。東京で薬局開設。昭和5年渡道、空知管内長沼町に薬局を開業した。俳句は中学時代志田素琴に学んだが、長沼移住までの間はほとんど休俳。昭和6年牛島滝六の「時雨」が復刊したころから本格的作句生活に入る。「時雨」のほか「暁雲」「緋衣」、さらに道外誌の「草上」「東炎」「雲母」「草蕨」「古志」と幅広く関係を持った。薬学を専攻しただけあって薬草類にはことに詳しく、「葦牙」誌上に長年薬草類をスケッチ入りで執筆したことは貴重な文献といえよう。昭和21年句集「水芭蕉」を葦牙吟社から刊行した。〈初霜の朝の空知野爽かに〉は長沼神社に建立された句碑の一句。

（山岸巨狼）

む

向井夷希微　明14・8・11～昭19・5・29（1881～1944）〔詩〕青森県生まれ。本名永太郎。父は旧会津藩士。生後間もなく母方の祖父母にひきとられて北海道に渡り、別海、根室、網走で育つ。のち母方の伯父の養子となり鹿児島へ。キリスト教の洗礼を受け、鹿児島造士館中学を経て第一高等学校中退。明治35年根室の花咲小学校代用教員となり、この頃から詩作を始め「文庫」「新声」などに投稿。明治36年函館の北海道鉄道会社に転じ、英語の私塾を営む。飯田白圃（房吉）らと同人詩誌「牧笛」発行。宮崎郁雨、石川啄木らの「紅苜蓿」にもかかわる。明治40年北海道庁拓殖部林務係に転じ、札幌、函館に勤務ののち上京。大正6年詩集「よみがへり」（警醒社書店）、「胡馬の嘶き―北海道風物誌」（同）を自費出版。横浜市職員。春秋書院（東京・神田）の服部大漢和字典の編纂に当たった。

（佐々木逸郎）

向井承子　昭14・1・4～（1939～）〔ノンフィクション〕東京生まれ。札幌北高校を経て36年に北海道大学法学部卒。道庁に入り知事室で広報誌「ほっかいどう」の編集を担当、38年退職。四〇歳の折に「女たちの同窓会」を出版してノンフィクション作家生活に入り、「たたかいはいのちの果てる日まで」などがある。東京在住。

（木原直彦）

向井豊昭　昭8・11・14～（1933～）〔小説〕東京生まれ。玉川大学中退。小学校教師。昭和40年より個人誌「手」を発行、一一号に達する。主な作品は「掌の中のつぶて」「祝生の学校」「ハンロウッサム」「寛文蝦夷の島」（「北方文芸」）、「うた詠み」（「手」、「文学界」に転載）。その他単行本に「鳩笛」があり、祖父にあたる詩人向井夷希微（啄木の友人）のことを書いている。

（小松　茂）

武者小路実篤　明18・5・12～昭51・4・9（1885～1976）〔小説〕東京生まれ。明治41年6月有島武郎を札幌に訪問、帰ってからのことを「ペルシャ人」として書く。43年「白樺」の創刊に加わり、翌44年5月再度札幌に有島を訪ね、5月12日の誕生日に初恋の人お貞さん（本名テイ）を小樽に訪問する。お貞さんは香村商店に嫁ぎ二児の母になっていた。大正3年2月「第二の母」（のち「初恋」と改題）を書いた。自分の人生観をかえ、新たな人間として生んでくれたお貞さんは、第二の母だというのである。その経過は「或る男」（大10～12）にもくわしい。大正7年7月「新しき村」を創刊、理想的共同体を求めてこの年から宮崎県に〝新しき村〟を建設、昭和14年には埼玉県にも東の〝新しき村〟をつくった。昭和26年文化勲章を受ける。主な作品に「お目出たき人」「幸福者」「友情」「或る男」「人間万歳」「真理先生」などがある。

（武井静夫）

武藤善友　明33・1・19～昭46・7・23（1900～1971）〔短歌〕秋田県生まれ。浄土宗東京教習所卒。昭和7年渡島管内上磯町慈教寺住職。かたわら浄土宗教区会議員、教育委員、公安委員、保護司等を兼務。36年函館市称名寺二三世住職。さらに函館市仏教会長を務め、41年正僧正となる。「アララギ」には大正8年入会。島木赤彦、斎藤茂吉、土屋文明に師事。大正14年比叡山上宿院のアララギ安居会に出席。帰途、岡麓、茂吉、文明らと熊野方面に遊ぶ。昭和2年船木順之輔編集の「青杉」に参加。5年「竜胆」創刊。11年「はまなす」参加。16年七飯の療養所歌会に出席、指導。19年同上北療短歌会「さわらび」（のちに「からまつ」）選者。21年「羊蹄」参加。26

年「ヒグマ」、続いて31年「北海道アララギ」を創刊、主宰して道内会員の指導に当たる。34年からアララギ北海道歌会を開催。歌集に「たらちね」「忍冬集」「鐘鎛集」、および文明の序を得た「武藤善友遺歌集」があり、明澄で温厚、アララギ先進の歌風を採り入れた上に、さらに独自の円熟した歌境を拓く。44年函館市文化賞受賞。46年函館市豊川町に〈山の手の町に日のくれ鳴りひびくキリストの鐘仏教の鐘〉の歌碑が建てられた。46年12月「北海道アララギ」は武藤善友追悼号を刊行。（小国孝徳）

村井宮風（むらいきゅうふう）　明45・2・8～(1912～)〔短歌〕小樽市生まれ。本名渡。国学院神道部卒。昭和17年4月北見神社宮司。父の作品に共感し俳句に専念、「緋衣」同人であったが、庁立小樽中学校での恩師小田観螢夫妻が北見市を訪れたのを機に「新墾」へ加入（昭27）、短歌に転向。31年従来の新墾北見支部を支社へ昇格させ、41年まで支社長。歌集「夕暮」（昭55）、句集「春の日」（昭55）がある。（前田信一）

村井潮三郎（むらいちょうさぶろう）　明33・12・5～昭21・4・16(1900～1946)〔川柳〕岩手県生まれ。本名省一郎。大正13年二四歳で個人川柳誌「黎明」を発行。昭和10年潮吟社を創立して「うしほ」を発行、多くの川柳家を育成した。12年には函館、小樽、札幌、旭川を結ぶリレー川柳大会を催して、それが道内各社交流の基礎となった。多彩にして豪放な句風は全国でも注目され、川柳界の鬼才といわれた。（越郷默朗）

村井杜子（むらいとし）　昭2・3・30～(1927～)〔俳句〕札幌市生まれ。本名小三郎。昭和22年北海道土木試験所技官（のち北海道開発局所管となる）、54年退職。計測技研社長。俳句は「堤影」発足に参加し、以後横道秀川に師事する。25年「水明」に所属、47年同人となる。54年横道秀川主宰の「雪嶺」創刊に同人として参加し、現在運営常任委員。雪嶺銀杏賞受賞。俳人協会員。北海道俳句協会常任委員。（横道秀川）

村井　宏（むらいひろし）　昭6・7・28～(1931～)〔短歌〕室蘭市生まれ。昭和25年苫小枚工業学校卒業後間もなく、結核のため療養生活。工業学校時代の国語教師の影響で作歌を始め、26、27年ころ、北海道新聞歌壇に投稿、当時の選者小田観螢との機縁で一時「新墾」に所属、のち「かぎろひ」にも短期間所属。第一回かぎろひ賞受賞。30年洞爺湖畔の道立教員保養所に就職。当時入所中の青山明、真野恵生らと交友、その紹介で「原始林」入会。以後、同所内の、みづうみ短歌会の幹事として合同歌集「呼吸」「樹液」の編集に参画。34年道庁転勤。43年から54年まで「鴉族」にも所属。45年鴉族賞、56年原始林賞受賞。現在「原始林」編集委員。生活に根ざした写実を基調としながら、文学的感受性豊かな詠風である。周到な批評面でも定評があり、「北方文芸」にも執筆した。北海道歌人会幹事として短歌年鑑編集に尽力。北海道文学館常任理事。（田村哲三）

村上綾朗（むらかみあやあき）　昭4・2・24～(1929～)〔短歌〕上川管内中川町生まれ。本名綾雄。永山農業学校卒。広尾町立病院勤務。長い結核療養生活中に作歌を始める。昭和27年「原始林」入会、中山周三に師事する。一時「アララギ」「未来」にも籍を置き、29年「アララギ」の地方誌「あかだも」の復刊に参画、また32年には第二未来歌集「河」に参加した。45年度原始林賞を受賞。同誌の主要同人。（猪股　泰）

村上久吉（むらかみきゅうきち）　明23・1・1～昭56・6・19(1890～1981)〔評伝、歴史〕空知管内長沼町生まれ。網走管内瀬戸牛（現西興部）小学校長を辞して東洋大学東洋文学科に入り昭和4年卒業。庁立旭川中学（現旭川東高）で教えながら「いぬ人物伝」（昭17、平凡社）、「盲唖人物伝」（昭18、新潮閣）ほかを刊行。視力衰え退職（昭31）後、「旭川市史」全四巻（昭35、旭川市役所）、「永山町史」（昭37、同）の編述に加わる。ほとんど失明し口述起稿でなったものに「字源を探る」（昭53、叢文閣）ほかがある。旭川市文化賞（昭30）、北海道文化奨励賞（昭44）、旭川市社会貢献者表彰（昭45）を受けた。（佐藤庫之介）

村上元三（むらかみげんぞう）　明43・3・14～(1910～)〔小説〕朝鮮元山府生まれ。母は函館市出身。逓信省技手だった父の転任に伴い京城、大阪、北海道（岩内）、樺太（大正9年から2年ほど）、東京などを転々とした。青山学院中等部卒。昭和5年からは二年ほど岩見沢の姉の家業を手伝っている。やがて作家を志して長谷川伸を終生の師と仰ぎ、昭和14年の「大衆文芸」に「北緯五十度」「蝦夷日誌」を発表したが、後者は直木賞候補にあげられた。処女短編集「先駆者の旗」（昭15・9、春陽堂書店）には一〇編が収められているが、「四百六十人の家族」「千島の嵐」「北海の呼声」「大地の唄」など七編が北方もので、いずれも幕末から明治維新にかけての物語。戦前にはほかに「北海は叫ぶ」「颶風の門」「北海の劫火」「北斗の鐘」「最上徳内」「鰊」などがあって、少、青年のころの生活体験から本道を舞台にした作品が多い。戦後にも「秘聞蝦夷錦」（昭24・1、鷺の宮書房）、「北海伝奇城」（昭24・3、矢貫書店）、「雪騎士」（昭29・1～12、「キング」）などの長編がある。「佐々木小次郎」「加賀騒動」は代表作。（木原直彦）

村上三朗（むらかみさぶろう）　大10・11・11～(1921～)〔俳句〕後志管内喜茂別町生まれ。本名三郎。旧制札幌工業学校卒。三井鉱山勤務を経て新聞店経営。昭和9年より「暁雲」「石楠」等に拠り雪渓の号で句作。「緋衣」「アカシヤ」「壺」等を経て、現在「にれ」同人。（木村敏男）

村上清一（むらかみせいいち）　明43・1・26～(1910～)〔短歌〕渡島管内松前町生まれ。函館師範学校を卒業し旭川市に赴任。酒井広治の指導を受け作歌活動に入る。「香蘭」「多磨」「コスモス」に属す。生活綴方運動に参画したことから治安維持法により執筆停止を命ぜられ、作歌活動を一時中止する。戦後、教師を続けながら作歌を再開「短歌紀元」に参加、萬上義次、安在久太郎らと共に主幹白山友正を助けて後輩の指導に当たる。昭53年主幹死後も、幹部同人と共に主導し、主幹制を廃し同人雑誌と改め、白山夫人を助けて同誌の維持発展に尽力。歌集に「眠る鶯」「岬みち」があり、平易のうちにも象徴性に富んだ世界を志向している。〈端正に着水の姿勢とる鷗乱れ乱れてわれは果てんか〉（萬上義次）

村上利雄（むらかみとしお）　昭10・7・6～(1935～)〔小説〕上川管内美深町生まれ。玉川大学卒。「文芸広場」「りいしり」同人後、個人誌「刻塔」を発刊し、「その日」が文芸広場創作年度賞、「脚を待つ男」が昭和42年新潮全国同人雑誌推薦作となる。作品集に「黒いスポットライト」「一角獣座R星」のほか「雪虫の愛」（昭56、苫小牧民報社）、「猫物語」（昭57）など。恵庭市民文芸の会会長。（斉藤征義）

村上抒子（むらかみのぶこ）　昭19・3・31～(1944～)〔詩〕上川管内下川町生まれ。本姓熊沢。昭和37年名寄高等学校卒。同校の文芸部長時代詩作に開眼。「青芽」をはじめ「北海詩人」「裸族」「アンドロメダ」「ペルシア」「パンと薔薇」同人。北海道詩人協会員。女をうたいあげる個性ある詩が多い。詩集に「花鋏」（昭46・3、北書房）、「その旅立ち」（昭51・3、裸族詩社）がある。（富田正一）

村上白郎（むらかみはくろう）　大14・9・18～(1925～)〔短歌〕夕張市生まれ。本名保。中富良野小学校高等科卒。東京大学北海道演習林勤務。文部事務官。昭和16年「新墾」入社。18年「潮音」入社。昭和43年4月小林孝虎との再会により「北方短歌」に入会。幹部同人、選者。北方短歌

富良野支部長。東大演習林・麓郷地区在住時代には、短歌サークルの活動をさかんにし、「作品集」の発行にも意を注いだ。独自な歌境であり、世情の裏面に鋭い感性を照射させ、「北方短歌」での歌評にも、きびしい理念が見られる。〈当然のやうに裸木は立てりかなしみは低きところをめぐり〉（小林孝虎）

村上　郷（むらかみ）　明39・10・4～昭58・3・24（1906～1983）〔小説〕渡島管内森町生まれ。本名佐野一二三。東京音楽学校（現東京芸術大学）卒。同級に作曲家の山田耕筰がいた。音楽の道に入らず、「サンデー毎日」からデビューし、小説家の道を歩む。作家田辺茂一とも親交があった。代表作に「蝦夷は時雨」「開拓途上」など。渡島信金の理事長を務めた。（木原直彦）

村木雄一（むらき ゆういち）　明40・10・3～（1907～）〔詩〕樺太大泊生まれ。戦前の一時期、春山行夫、村野四郎、近藤東らの編集、発行した詩誌「新領土」の同人。詩集「ダンダラ歌集」「文学症」「エヴの森」「愛のさまざま」など一五冊の詩集がある。戦後詩の大衆化を願って「にじゅうえん詩集」を発行、多くの詩人に詩の発表の場をあたえた業績がある。早川勝美、北浜じゅん、高橋渉二、吉野広、水無川理子らが詩の寄稿をしていた。（小松瑛子）

村瀬　晋（むらせ しん）　昭5・4・27～（1930～）〔俳句〕札幌市生まれ。本名西明英男。庁立札幌第一中学校卒。昭和26年天野宗軒主宰の水声会に入会、「水声」編集同人。粕谷草衣主宰「獅子座」同人を経て現在金崎葭杖主宰「水声句箋」同人。句集に「白い鴉」がある。（金崎葭杖）

村田耕作（むらた こうさく）　昭5・3・27～（1930～）〔詩〕紋別市生まれ。北海道学芸大学札幌分校卒。「潮流詩派」同人、「北海道詩人会議」（昭40・7～51・2）主宰を経て、現在「北海道詩学研究会」主宰。「核の会」同人。詩集は昭和30年に私家版二冊「霧の街より」「刃」、34年に「処刑」（北海道詩人協会版）、続いて私家版二冊、41年「祖国」、42年「愛のデッサン」、49年「面を脱ぐ」（黄土社）がある。（瀬戸哲郎）

村田豊雄（むらた しげお）　明38・6・1～昭55・12・22（1905～1980）〔短歌〕山形県生まれ。大正12年銀行員として渡道。北海道拓殖銀行から13年北海道大学に事務官として就職。昭和22年工学部事務長、同図書館事務部長を経て42年定年退職。昭和4年同僚の岡本高樹と交流、5年「新墾」の創刊に参加し、6年「潮音」にも入社。小田観螢、太田水穂に師事して本格的な作歌に入る。とくに「新墾」では、17年3月編集人の岡本高樹が室蘭工業専門学校に転勤後、編集事務を直接担当。戦中の休刊期には、手刷りの会報を発行して21年の復刊へ尽力した。28年には編集発行人となって32年までの四年間、当時の同人誌運動による結社離れの危機の中で、新墾社の指導体制、運営基盤の確立に努力した。34年から38年まで北海道歌人会の事務局を担当し、同会の発展の基礎を築いた功績も大きい。著書には、歌集「白亜館にて」（昭34）、「修道院の秋」（昭40）、「熔岩流」（昭41）、「楡蔭独白」（昭50）がある。「私は象徴的、心象的作品には大いに興味がある。併し、その根底には真実性を置きたい。要は、私は人まねでない作品を作りたい。そしてその中に独合点でない真実の美を創りたいのである」と「楡蔭独白」の巻末記に述べているように「新墾」の中にあっても、とくに写実を重んじながら独往の境地をひらいた作者である。（足立敏彦）

村田悠水（むらた ゆうすい）　昭和6・1・6～（1931～）〔俳句〕上川管内東神楽町生まれ。本名悠治。昭和24年道立旭川工業高等学校卒。在学中より「ゆく春」の藤田旭山より指導を受け、昭和43年旭山の「俳海」創刊以来参加、主要同人の一人として活躍している。俳人協会員。（後藤軒太郎）

村田緑星子（むらた りょくせいし）　大5・1・1～（1916～）〔俳句〕台湾台北市生まれ。本名振一。東京商科大学専門部卒後日本石炭小樽支店勤務当時、角野良雄と交流。昭和13年「句と評論」（のちの「広場」）に投句。24年から37年まで高梨花人の「花」同人。現在「旅と俳句」「東虹」「あすか」「にれ」の各同人。39年より50年まで「都庁俳句」編集。句集「冬木」（昭27）発行。51年まで東京都庁職員。現代俳句協会員。（山田緑光）

村田和歌子（むらた わかこ）　大正6・2・26～（1917～）〔詩〕夕張市生まれ。西条八十の「蠟人形」を経て「野性」同人、現在「核」同人。北海道詩人協会員。詩集は「くろかみのうた」（昭21・5、青玄社）、「愛と死の哀しみ」（昭31・6、さるるん書房）、「球形の孤独」（昭51・10、白楊社）がある。北海道の女流の中で、戦前、戦中、戦後を通して詩を書きつづけた唯一人の抒情詩人で、精神的な崇高な世界は病弱な故もあって独自のものがある。「くろかみのうた」は、肉親との別れを、短歌的な詠嘆によって結晶させた鎮魂の世界である。「愛と死の哀しみ」は、昭和29年洞爺丸で兄を失った悲哀をうたった詩集であり、「球形の孤独」は、自己の宗教的な世界を確立した詩集である。（小松瑛子）

村野四郎（むらの しろう）　明34・10・7～昭50・3・2（1901～1975）〔詩〕東京生まれ。慶応大学経済学部卒。詩集「畏」（大15、曙光詩社）により詩壇に出る。昭和8年「新即物性文学」創刊。「体操詩集」（昭14、アオイ書房）が有名。昭和24年から26年まで詩誌「詩学」の研究会作品の選に当たり、多くの新人たちを発掘、本道にも発掘された新人が多い。集中講義などで数回来道。詩誌「湾」の同人でもあった。「村野四郎全詩集」がある。（瀬戸哲郎）

村山　出（むらやま いずる）　昭6・4・24～（1931～）〔国文学〕札幌市生まれ。昭和29年北海道大学文学部国文学科卒。高校教師を経て帯広大谷短大助教授から小樽商科大学教授に転任。万葉集の研究にうちこむ。「日本の作家2　憂愁と苦悩―大伴旅人と山上憶良―」（昭58・11、新典社）などがある。（小笠原克）

村山知義（むらやま ともよし）　明34・1・18～昭52・3・22（1901～1977）〔劇作、演出〕東京生まれ。東京大学を中退してドイツに留学、帰国後表現派、構成派の美術、演劇を導入、左傾してプロレタリア演劇運動の旗手となる。「暴力団記」「志村夏江」「白夜」などがある。本庄陸男「石狩川」の脚色演出や、島崎藤村「夜明け前」脚色を久保栄が演出するなどのかかわりもある。伊達市にゆかりが深いことは「演劇的自叙伝」に見える。「村山知義戯曲集」上、下（昭46、新日本出版社）、「演劇的自叙伝」（昭49、東邦出版社）がある。（小笠原克）

室積徂春（むろづみ そしゅん）　明19・12・17～昭31・12・4（1886～1956）〔俳句〕滋賀県生まれ。本名尚。維新前、荒廃していた芭蕉堂を再建した俳人蟻洞は曾祖父に当たる。一二歳より岡野知十に師事、一四歳のとき根岸庵に子規を訪い、一題一〇〇句を課せられたことなどがあった。長じて「ホトトギス」「枯野」の同人、「雲母」「山鳩」の客員として活躍した。昭和2年「ゆく春」を創刊。個性尊奉を指導方針として多くの俳人を育成した。北海道における有力な門下生は故人を含めて、藤田旭山、西山東渓、福田秋谷、小原野花、北村暮畔子、鈴木梟月、高取素城、八木一紅女、鎌倉子桐、西山春宵女、藤田月女ら。前後四回来道し、旭川、札幌、士別等での句会、講演会に臨んだ。稀にみる達吟家、作句は縦横無尽、とは徂春門の高足、旭山の言。〈月あらば乳房にほはめ雪をんな〉は渡道時の作。夫人は故室積波那女。（後藤軒太郎）

め

目黒草水（めぐろそうすい）　明40・4・20～(1907～)〔短歌〕後志管内寿都町生まれ。本名義勝。札幌自治講習所卒。網走管内女満別村役場へ勤務。千島の色丹、網走管内生田原、網走、雄武の町役場へと転じ、定年退職後、雄武町で行政書士の事務所を開設。女満別村役場在職中、「潮音」に属し、長兄の農事を助けるため富良野から女満別に転住し、青春の情熱を短歌にかけていた中田緑雨の作品にひかれ、「潮音」、ついで「新墾」に加入、各同人。ひたすら「潮音」の道を守り抜いてきた。〈海からの暮色と共に寄りきたる妻の笑顔が灯を明るくす〉（前田信二）

も

毛利孝康（もうりたかやす）　昭4・3・31～(1929～)〔詩〕札幌市生まれ。室蘭工業専門学校卒。旺文社主催全国学芸コンクール（昭51、54、詩部門最優秀賞）、日教組文学賞等に投稿。詩集に「父を母を」（昭45）、「ガラスの断口」（昭48）がある。北海道詩人協会員、日本児童文芸家協会員。（萩原　貢）

最上徳内（もがみとくない）　宝暦5～天保7・9・5(1755～1836)〔地理学〕山形県（出羽国村山郡）生まれ。医術、算数、測量を修め、天明5（一七八五）年青嶋俊蔵の僕となり、蝦夷地の調査をする。のち幕府普請役に昇進、文化期には箱館奉行支配調役並として、蝦夷地はもちろん、北蝦夷地、国後、択捉、得撫島（ウルップ）まで調査、開発にあたる。著書に「蝦夷草紙」、「蝦夷草紙後編」、「松前史略」等があり、「降福紅夷」事件は有名である。（永田富智）

最上葩迷（もがみはめい）　明32・4・1～昭46・6・17(1899～1971)〔短歌〕札幌市生まれ。本名清仲。放浪歌人といわれた金崎琢磨の実弟。大正7年岩谷莫哀に師事し「水甕」に作品を発表。昭和21年「やまかい」創刊。22年「原始林」同人、26年「山脈」、29年「鴉族」に参加、同人。31年宗谷管内猿払村鬼志別で「宗谷路」を創刊。猿払村文化賞を受賞。〈流氷に沖よりの風凍みつよく陽の照る昼も硝子こほれり〉（笠井静子）

茂木健太郎（もぎけんたろう）　大4・9・13～(1915～)〔短歌〕小樽市生まれ。小学生のとき受持教師から短歌の指導を受け、以後新聞、雑誌等に投稿。昭和8年「閃光」同人。11年「新墾」「潮音」に入社、両誌の幹部同人。「新墾」選者。北海道潮音会事務局長、北海道歌人会幹事。この間逓信吏員として道内、東京等に在職。定年後は北海道整備会社社長を経て相談役。12年太田水穂、四賀光子を迎えて潮音新墾北海道大会が札幌で開かれた折、道内を水穂夫妻について歩く。16年応召、終戦まで比島で軍務に服した。従軍中は余暇をみつけては紙の切れ端などに歌を書きつけ、毎月小田観螢のもとに詠草を送る。生死のあわいで命をいたわるこれらの歌は、村田豊雄が編集発行した「新墾会報」によってかろうじて日の目をみていた。18年本道からも日本文学報告会編「大東亜戦争歌集」を発行。観螢から出詠要請を受けて投稿し、四首が入集。〈知里真志保博士の墓は小さくて薄の丘に銀の雨降る〉。伝統的な歌の風格を墨守しながら、時代の詩精神と北方的風土を塗り込む作風は堅実。性剛毅にして細心温雅さが作品に反映している。（永平利夫）

本山節弥（もとやませつや）　昭5・3・3～(1930～)〔劇作〕朝鮮京城生まれ。北海道大学工学部卒。札幌静修高等学校演劇部顧問をつとめていた昭和32年創作劇「カムイヌプリ」を発表し、全道大会で総合賞を受賞した。同校上演の主な作品に「あひるっぺ」「移民」「聖者の行進」「OS」がある。41年札幌啓北商業高校定時制によって全国大会で上演された「オホーツクのわらすっ子」で最優秀賞（文部大臣賞）を受賞し、高校演劇創作劇活動の推進力となった。以後の全国大会最優秀賞受賞作品に「おおきな木」（原作シェル・シルヴァスタイン。昭53、札幌開成高上演）、「水仙月の四日」（原作宮沢賢治、昭57、札幌開成高上演）がある。また、41年札幌で劇団「青の会」を結成し、その代表として「オホーツクの女」に続き、「日本刀」「あめりか礁物語」などを発表。札幌市民劇場特別公演「どさんこ花子」がある。共著に「北海道高等学校創作劇集」一～三集、「北海道演劇史稿」。北海道演劇協議会長。札幌開成高等学校教諭。（佐々木逸郎）

本山哲朗（もとやまてつろう）　大6・10・1～(1917～)〔川柳〕滝川市生まれ。本名哲雄。昭和10年函館で村井潮三郎に師事。13年樺太に渡り、21年砂川市に引き揚げる。函館、樺太でも川柳人の育成に尽くしたが、空知地区でも川柳人の芽を育て、砂川、滝川、美唄、深川と相次いで柳社を結成させて、45年合同川柳誌「そらち」を発行、主幹として道内でも有数な川柳誌に育てあげた。47年砂川市文化奨励賞を受賞。作品は全国的にも高く評価されており、40年北海道川柳年度賞を受賞、この年度賞の選考委員にも選ばれている。54年句集「轍」刊行、四十余年の多くの作品から厳選した好著である。〈孫抱いて犬と話をして帰り〉（越郷黙朗）

最乗羊々子（もものようようし）　明31・4・18～(1898～)〔俳句〕網走市生まれ。本名孝顕。大正13年より作句。「暁雲」「時雨」を経て、戦後は「葦牙」「道」「壺」「沖」に参加。「沖」主宰能村登四郎が序文を寄せた句集「未完の雲」（昭51、東京美術）がある。（園田夢蒼花）

百川梢介（ももかわしょうすけ）　大11・1・22～(1922～)〔短歌〕札幌市生まれ。本名孝正。昭和17年「多磨」に入会。以来「新墾」「地平線」を経る。札幌在住中の「新墾」期間は短歌に燃焼した時期で、新墾新人賞を受賞、北海道歌人会賞に準入選するなどの活躍をした。釧路に住居を移してからは釧路歌人会等にかかわっていたが、55年から短歌集団「沌」を主唱結成した。（永平利夫）

百田宗治（ももたそうじ）　明26・1・25～昭30・12・12(1893～1955)〔詩〕大阪生まれ。本名宗次。高等小学校卒。大正4年詩集「最初の一人」を自費出版し、ホイットマン、ロマン・ロランの影響を受け、富田砕花、白鳥省吾らと日本の民衆派詩人といわれた。大正6年詩話会が結成され、新潮社から「日本詩人」が創刊されるとその編集に当たり、中心人物として大正15年「椎の木」を発刊、三好達治、丸山薫、伊藤整、春山行夫、阪本越郎など若々しい執筆陣を加え「椎の木時代」を築いた。綴方教育にも力をそそぎ、昭和初年「何もない庭」などの俳諧的詩風を経て、モダニズムに転向。戦中報道部員として大陸にも渡った。東京空襲で家を焼かれ、終戦直後札幌に転住、円山隆光寺の庫裏に居を構えて道内各地を講演旅行等に過ごし、「標茶市街」「脱獄囚」「北の柱」「安足間」などの作品をのこした。その間「現代詩」（臼井書房）、自選詩集「閲歴」（目黒書店）、大陸の戦場記録「山川草木」（白都書房）、長編散文詩集「辺彊人」（日本未来派発行所）を刊行した。昭和23年北海道を去って千葉県に移り、肺ガンにより逝去。没後、一時永住を夢みた上川管内愛別町安足間に、昭和34年10月〈アンタロマに来よという　大雪山を見に来よという　埋れに来よという〉の詩碑が、地元文化協会の人々の手によって建立された。毎

年10月には宗治忌が行われている。（更科源蔵）

森　一歩　昭3・2・2～（1928～）〔児童文学〕旭川市生まれ。本名和男。名寄中学校、旭川高等学校から慶応大学英文科に進み中退。「三田詩人」「文芸広場」等に詩、小説を書き、「毎日新聞」の児童小説に当選。昭和35年「コロボックルの橋」を理論社から出版。これは当時教職にあった日高管内平取町振内地区を舞台にした作品。のち上京、筆名を一歩と改めた。49年「雪の街の落日」は、戦中戦後の混乱期に真実を求めて悩み、傷ついて倒れた中学生群像を真っ正面から描いた森の代表作。他に幼年童話に「氷原の王者フー」「銀ギツネのなみだ」などがある。また、おびただしい数のジュニア小説があり、「オホツク物語」「北国に燃える」など多くの読者を持っている。小説も書き続け、新鷹会という大衆文芸の会の賞を受賞、雑誌「大衆文芸」に作品を発表し続けている。（笠原　肇）

森内　伝　昭12・6・25～（1937～）〔詩〕樺太元泊村生まれ。昭和28年旭川日赤病院で療養中、江原光太主宰の「緑陰」に誘われたのが詩作への動機。以後「風土」「新文芸」「文芸道場」「嫩葉」「青芽」同人、「ななかまど」主宰を経て、現在「青芽」同人。北海道詩人協会員、旭川詩人クラブ会員。詩集に「ひとり旅」（昭37）がある。（富田正一）

森　鷗外　文久2・1・19～大11・7・9（1862～1922）〔小説〕島根県生まれ。本名林太郎。東京大学医学部卒。明治15年9月来函。大正3年5月軍医総監、医務局長として札幌、旭川の軍の衛生視察のため来道。「北遊記」にその記録がある。（木村真佐幸）

森川木ノ芽　大10・8・31～（1921～）〔俳句〕深川市生まれ。本名久恵。昭和30年「氷原帯」同人、35年氷原帯賞受賞。47年「海程」同人、40年以降「粒」同人。42年句集「帯」を氷原帯社より発行。主婦俳句を超え、前衛志向で、心象の世界を拡大するとともに独自の抽象的表現を形成した。現代俳句協会員。京都市在住。（山田緑光）

森川勇作　大7・1・4～（1918～）〔随筆〕十勝管内陸別町生まれ。少年時更科源蔵に師事し、昭和6年師弟で詩誌「大熊座」を発刊。9年釧路新聞社入社。15年小樽新聞社、17年北海道新聞社、37年日刊スポーツに転入社。現在日刊スポーツ社副社長。新聞記者として活躍するかたわら、北海道新聞社会部次長の34年、王子争議・ルポ「赤い旗の村の中で」（第一世論社）を、49年随想集「北国の椅子」（凍原社）を刊行した。日本ペンクラブ会員。（八重樫実）

森　巌　明40・4・12～（1907～）〔工学〕空知管内新十津川町生まれ。北海道工業大学名誉教授。著書に「北方空間の思想」（新時代社）。北見工業大学、北海道工業大学の教授を歴任。昭和59年に「十津川移民」を著す。現在北方生活科学研究所長。「北凍帯と日本文化」を研究中。（富岡木之介）

盛口　襄　昭3・3・10～（1928～）〔詩〕京都生まれ。日本大学卒業後、空知管内妹背牛町で教鞭をとりながら作品を発表。詩誌「炎」「抒情詩」「日旺詩人」「熔岩塔」「フロンテア」に参加し、昭和34年「核」創刊に参加した。36年「詩学」新鋭詩人特集に選ばれて天沢退二郎、永井浩らと収録された。詩集に32年の処女詩集「光の山稜」のほか、「毛蟹」（昭42）、「仁和寺の桜は足許から咲く」（昭52）などがある。即物的な具象性と存在感に満ちて自身の生きている時代と人に洞察を加えながら意味を形象化する点に特色がある。日本現代詩人会員。昭和36年千葉県館山市に移住。（永井　浩）

森　恵光　大2・9・12～（1913～）〔短歌〕三重県生まれ。本名恵。昭和9年から49年まで後志管内ニセコ町役場に勤務、収入役四期。37年「新墾」入社。ニセコ短歌会を結成。「後志歌壇」二七号から五〇号までを編集発行。「樹氷帯」解散まで同人。（永平利夫）

森　公一　昭22・3・28～（1947～）〔俳句〕後志管内岩内町生まれ。昭和44年北海タイムスの俳壇金子兜太選に出句。現在「粒」「海程」同人。「粒」に前衛俳句論、兜太句集評を連載したほか、前衛志向の一〇〇句をも発表。家具商経営。専門学校講師。現代俳句協会員。（山田緑光）

森下　節　大9・3・5～（1920～）〔小説〕夕張市生まれ。本名裕。戦前に赤間武史の「北海道文学」で活躍。現在は「芸文」主宰。全国同人雑誌作家協会副会長。「町会長物語」「エノケンの生涯」「粛清」「ひとりぼっちの戦い」などがある。（木原直彦）

森　澄雄　大8・2・28～（1919～）〔俳句〕兵庫県生まれ。本名澄夫。九州大学法文学部卒。豊島高等学校等で教員を勤めた。昭和15年「寒雷」の創刊時より参加、加藤楸邨に師事して句作に入り、「寒雷」同人。45年「杉」創刊主宰。47年より「読売俳壇」選者。北海道へは35年、46年、48年、51年、52年、55年、60年の七回来遊。句集に「雪樣」「花眼」「浮鷗」「鯉素」「游方」等がある。読売文学賞を受賞。（木村敏男）

森　善次　明30・10・15～昭44・10・21（1897～1969）〔教育、文化運動〕富山県生まれ。明治35年渡道。45年から教員生活に入る。昭和4年から札幌市教育会に身を置き、戦後いち早く北海道教育文化協会を設立して活動、38年からは北海道文化団体協議会事務局長として全道文化運動に尽くしたが、その折に北海道文学展開催の推進をはかった。「冨貴堂小史」がある。（木原直彦）

森竹竹市　明35・2・23～昭51・8・3（1902～1976）〔詩、短歌〕胆振管内白老町生まれ。筑堂とも号した。大正4年白老第二尋常小学校卒。8年白老駅員となり、12年札幌鉄道局雇員採用試験に合格。昭和2年追分駅勤務、翌年札幌鉄道局教習所専修部駅員車掌科修。5年国有鉄道第一区現業委員会委員となる。のち佐瑠太（現富川）、苫小牧、静内の各駅に転じ、10年退職。白老に戻って結婚し、漁業のあと簡易食堂を営みながら文筆に志す。12年7月「若きアイヌの詩集・原始林」（白老ピリカ詩社）を自費出版。「アイヌ青年の真情を、赤裸々に告白した」（序文）本で、現代アイヌ文学の古典となっている。戦後の21年北海道アイヌ協会常任監事、34年北海道ウタリ協会顧問、36年昭和新山アイヌ記念館長、42年白老民俗資料館長となる。没後の52年6月山川力により「森竹竹市遺稿集・レラコラチ（風のように）」（白老コタン・えぞ屋）が編まれた。（木原直彦）

森田草平　明14・3・19～昭24・12・14（1881～1949）〔小説〕岐阜県生まれ。東京大学英文科卒。漱石門下生。代表作は「煤煙」（明42）。森田たま、素木しづの師匠で、素木しづの短編集「青白き夢」（大7、新潮社）の序文を書いている。また、大正2年に草平の門に入った森田たまの処女出版「もめん随筆」（昭11、中央公論社）は、森田草平が中央公論社の嶋中社長に推薦して刊行された本である。（神谷忠孝）

森田たま　明27・12・19～昭45・10・31（1894～1970）〔随筆、小説〕札幌市生まれ。旧姓村岡タマ。明治34年札幌女子尋常高等小学校に入学。40年には庁立札幌高等女学校に進んだが、素木しづとは両校ともに同期であった。女学校在学中から文学に憧れたが、病弱のため43年に中退。翌年許嫁を婿養子に迎えたが、その秋に上京し、大正2年森田草平の門に入った。偶然にも間をおかず素木しづも入門。小宮豊隆の推薦で処女作「片瀬まで」（大2・9、「新世紀」）が発表された。本道出身女流作家第一号で

ある。5年慶応大学生森田七郎と大恋愛のすえ婿養子と別れて結婚、文筆を断って大阪に住む。夫の実家が没落した昭和7年に草平の推薦で随筆「着物・好色」が「中央公論」に掲載され、これに力を得て上京。11年に「もめん随筆」（中央公論社）を出版して随筆家としての地歩を築いた。鋭敏な感覚と適度な良識をもって〝現代の清少納言〟とまで称される。第二次世界大戦後の29年には国際ペン大会の日本代表としてアムステルダムの会議に出席し、一三カ国を回った。37年には参議院議員に当選し、43年まで務めた。尿毒症のため慶応病院で七六年の生涯を終えたが、著書は七〇点近い。「随筆歳時記」「ふるさと随筆」などの随筆集が多く、故郷のさまざまな風物が繰り返し現れる。ほかに小説集に「花菖蒲」、童話集に「鉛の兵隊」、詩集に「楊柳歌」などがあるが、故郷とをつなぐ代表作として「石狩少女」をあげなくてはならない。

〔石狩少女〕 長編小説。昭和15年7月「実業之日本社」刊。明治末期の札幌高女時代を軸にした自伝的小説で、詩情をたたえた札幌という北国の小都市の風物をロマンチックに染めあげながら、裕福だが孤独な少女である。ヒロイン悠紀子が新しい人生に立ち向かってゆく姿が描かれている。青春を回想再現した作者の自画像であり、冒頭の部分に「北海道の平野に生ひたつ石狩少女の頬は、白い花弁に小指で紅をすりつけた林檎の花のやうに、ほのぼのと染ってゐる」とある。（木原直彦）

森田義胤 明40・10・25～昭52・5・20（1907～1977）〔短歌〕紋別市生まれ。昭和24年紋別商業組合理事長。27年同市議会議員。大正13年より作歌。昭和38年紋別歌人会長。北方短歌紋別支部長。51年紋別市文化連盟文化功労賞を受賞。54年遺歌集「遠霧笛」が出版された。（江口源四郎）

森知新子 大7・1・1～昭51・1・22（1918～1976）〔俳句〕後志管内岩内町生まれ。本名松王。家業は家具仏壇商。昭和17年「氷下魚」に、ついで翌18年「雲母」に投句。戦後は「雲母」「春灯」「鹿火屋」その他道内誌にも投句したが、29年の岩内大火に遭い、一時作句中断のあと、数年にして復活。「アカシヤ」「葦牙」の同人となる。没後五人の遺児によって句集「微笑曼陀羅」が上梓された。（園田夢蒼花）

森 輝子 大13・1・3～（1924～）〔短歌〕根室市生まれ。北海道第一師範学校教員養成所修。教員を経て華道教授。昭和18年鬼川俊蔵に師事。22年「新墾」に入社し、41年第七回新墾賞を受賞した。同誌の編集委員もつとめる。57年から朝日カルチャーの短歌教室を担当し、翌年にその教室の生徒による合同歌集「北の笛」を発刊した。その歌作の原理は、常に無明に漂う世界に身を浸して、果敢なまでに自己の内面としのぎを削るところにある。従って、自らの世界を構築して、生の軌条を刻みこんでゆく自己凝視は、貧血を呼び起こすまでの厳しさを自らに課して熄むことがない。詩的昇華を企てるものとなるその作品は、純一で深い抒情をたたえている。〈若き日よ裸の馬をはしらせて過ぎ去りにけりひとつ夕星〉（永平利夫）

森 みつ 大11・3・20～昭42・7・15（1922～1967）〔詩〕札幌市生まれ。昭和16年札幌市立高等女学校卒業後、謄写版刷り個人詩集「花咲きぬ」を刊行。「雪の哀歌」を更科源蔵の推薦で旧「北方文芸」に掲載。のち阿部某と結婚のため大阪にたつが夫君は出征、まもなく戦死。敗戦まで札幌で逢坂瑞穂（福島）、小島雅代らと同人誌「木雫」を刊行。このころ阿部姓を名乗っていた。戦後「野性」に参加。また本格派女流詩人としてみとめられ「至上律」にも作品を発表する。昭和27年森多賀雄と結婚する。「野性」解体後文学的空白の時期を

家事に専念。夫の任地、日高管内新冠町に移る。35年「北海道讃歌」に応募、主席当選、伊福部昭が作曲。同年河邨文一郎らの詩誌「核」に参加、以後「にいかっぷ」につらなる秀作により旺盛な作品活動を展開。その間、北海道婦連協常任理事、日高婦連協会長ほかの公職も歴任。43年6月詩集「微笑思慕」が刊行される。同年第一回北海道芸術新賞受賞。57年新冠町郷土資料館前に詩碑が建立された。（福島瑞穂）

森村誠一 昭8・1・2～（1933～）〔小説〕埼玉県生まれ。青山学院大学英米文学科卒。昭和44年「高層の死角」で江戸川乱歩賞を受賞。本道取材作に「溯死水系」（昭51・10、「小説現代」）などがある。（木原直彦）

森本儀一郎 大14～（1925～）〔シナリオ〕札幌市生まれ。日本大学芸術学部中退。宗谷管内枝幸町で教員生活のかたわらNHK（札幌）の「ラジオ文芸」常連投稿者として活躍し、昭和27年同局最初の専属作家となった。数多いラジオドラマを執筆し、30年まで専属作家を続けたのちフリーとなり、北海道放送のテレビ「いろはに北海道」の構成に当たった。ラジオドラマの代表作に「ひぐらしの宿」「夢は枯野を」「深ァい霧の向うへ」などがある。（佐々木逸郎）

森本厚吉 明10・3・2～昭25・1・31（1877～1950）〔評論〕京都生まれ。旧姓増山、のち森本家の養子となる（明28）。東京の中学を経て札幌私立北鳴学校に学び、さらに札幌農学校予科第四年級に編入学。明治34年同校卒。36年米国ジョンズ・ホプキンズ大学院に入学。帰国後（明39）札幌農学校講師、同校昇格後の東北帝国大学農科大学、北海道帝国大学教授となり、大正7年法学博士の学位を受ける。10年月刊誌「文化生活」を刊行。昭和3年女子経済専門学校（校長新渡戸稲造、副校長森本）を設立。7年北海道帝国大学教授を辞し、生活文化の改善運動に専念した。有島武郎と親交があり、札幌農学校在学中、有島をキリスト教に入信させ、「リビングストン伝」（明34、警醒社）を共著として刊行。米国留学もともにし、また、有島晩年の農場解放に尽力した。著書は「創造の生活」「消費経済」「家政学通論」等多数。（高山亮二）

森本三郎 明42・11・8～（1909～）〔詩、画家〕帯広市生まれ。昭和の初め画家を志しながら、兵庫三兵のペンネームで詩作にもふける。昭和5年旭川の詩誌「登場」を知り、竹吉新一郎、下村保太郎と交わる。二七歳で意を決し、上京して川端画学校に学び、春陽会入選、国画会に出品受賞後、昭和16年小樽に居住し、道展、全道展などの会員を辞退し、現在無所属。詩作は昭和45年ころより再度ペンをとり、現在は旭川の詩誌「情緒」同人。（下村保太郎）

森本 等 昭22・4・16～（1947～）〔小説〕小樽市生まれ。画家森本三郎、光子は父母。小樽千秋高等学校を卒業して横浜国立大学工学部中退。在学中に「或る回復」（昭49・6、「群像」）によって第一七回群像新人文学賞を受賞した。短編集に「或る回復」（昭52・7、講談社）がある。（木原直彦）

守谷操一 明40・12・9～昭53・6・30（1907～1978）〔短歌〕埼玉県生まれ。司厨士として東京、宮城ほか道内各地に勤務、昭和20年日高管内門別町役場吏員となった。大正10年ころから作歌、「風景」の創刊にも参画したが、昭和25年「原始林」に入社。「日高路」「日高短歌」の選者として後進の育成に努めるかたわら、北海道歌人会地方委員や日高歌人会長も務め、晩年は「日高短歌」の発行人となった。「風景」にも「白樺荘夜話」と題する文学や人生にかかわる文章を寄せていたが、短歌への情熱を滋味のある文章に籠めて、晩年は憑かれたように書きつづけ、日高の風土性をもにじませつつ枯淡な表現で生の哀歓を詠み

つづけた。〈単調のひびきにあれど霧笛音うちなるものを誘ひてやまず〉。生前、歌集をもつことがなかったが、没後昭和56年に静内歌人会が守谷操一追悼集「花群」を刊行した。（村井　宏）

守谷富太郎　明9・10・11～昭25・10・18（1876～1950）〔短歌〕山形県生まれ。斎藤茂吉の次兄。日露戦争に従軍。茂吉が〈本よみて賢くなれと戦場のわが兄は銭を呉れたまひたり〉と詠んだのはこの富太郎である。のち渡道して、僻地の診療所に勤務。晩年は北見市に開業した。岩見沢・志文内当時、北海道を旅行した茂吉と会い、多くの歌を残させたが、自らも昭和12年以来、茂吉の選を受けて「アララギ」に発表していた。（小国孝徳）

森山軍治郎　昭16・12・12～（1941～）〔評論〕美唄市生まれ。北海道大学文学部史学科を経て同大大学院博士課程中退。西洋史第一講座助手を経て、現在専修大学北海道短期大学教授。フランス中世史が専攻で、フランス史の井上幸治と小池喜孝とのかかわりから秩父困民党の生き残り井上伝蔵に関心を抱き、「北海道民衆史へのアプローチ―井上伝蔵を追いながら―」（昭37～40、「北方文芸」）を発表。さらに同題名の連載（昭51～55）で民衆俳句を中心に北海道精神史を探り、「民衆精神史の群像―北の底辺から」（昭49、北大図書刊行会）、「北海道民衆俳句の旅」（昭53、日本放送出版協会）にまとめた。著書はほかに「フランス田舎放浪記」（昭52、青娥書房）、「青春の歴史・幸子の死」（昭53、青娥書房）、「民衆蜂起と祭り―秩父事件と伝統文化」（昭56、筑摩書房）などがある。「北方文芸」編集委員。テレビのレポーターとしても活躍している。（神谷忠孝）

森山　啓　明37・3・10～（1904～）〔小説〕新潟県生まれ。東京大学美学科中退。東大新人会に加わり、プロレタリア詩人、評論家として活躍。昭和10年「文学論」（三笠書房）、「文学論争」（ナウカ社）刊行。11年より「文学界」同人として小説を書く。「島木健作登場の前後」（昭44・9～11、「北方文芸」）で北海道とかかわる。小説集「野菊の露」（昭55・4、創林社、解説神谷忠孝）がある。（神谷忠孝）

森山弘毅　昭12・12・10～（1937～）〔評論〕美唄市生まれ。北海道大学国文科卒。苫小牧工業高等専門学校教授。中世歌謡の専門家であるが、北海道の歌謡にも注目し、「北方文芸」（昭54～55）に「蝦夷歌謡考」を断続連載した。（神谷忠孝）

森　里魚　明27・11・6～昭51・4・16（1894～1976）〔川柳〕島根県生まれ。本名信。若くして上京、苦労して大正4年昭和薬学校を卒業。7年に渡道。11年上川管内東川町に薬局開店。戦後函館市議を二期務める。昭和4年ころより川柳を始め、函館柳界に貢献する。（鈴木青柳）

森　れい　昭26・10・7～（1951～）〔詩〕埼玉県生まれ。札幌短期大学英米科卒。詩誌「炎」を経て、詩誌「迦楼羅」創刊。「地球」「核」同人。詩集「鳥の飛ぶさま」（昭49）がある。（小松瑛子）

諸角和傳　昭7～昭48・3・9（1932～1973）〔児童文学評論〕旭川市生まれ。昭和27年2月日本児童文学者協会北海道支部創立に参加。創立会員は諸角のほか和田徹三、和田義雄、玉川雄介、八森虎太郎。33年10月「児童文学評論」を、独力、旭川で創刊。一五年間に一一号まで刊行した。没後、夫人信子が45年12月に終刊一二号を刊行。創刊号の編集後記に「日本の児童文学が、欧米のそれに比して、ジャンルとしての鞏固な独自性をいまだに持っていないので、この原因の大半は、児童文学評論活動の乏しさから来ていると思うのです。全くその方面の専門雑誌は一冊もなく、評論はかろうじて児童文学雑誌の片隅に呼吸しているこの現状に、小生は大きな不満を覚え、評論を活発化し作品活動を刺激することが、目下の急務と思い、ここに決意させたものであります」と、記している。（渡辺ひろし）

や

八重樫実　大11・11・1～（1922～）〔小説〕札幌市生まれ。大連第一中学卒業後満鉄勤務。復員後北海道庁に勤務。昭和21年道庁職場文芸誌「赤煉瓦」編集。25年「札幌文学」同人。二号掲載の「朗報」が阿部知二に認められる。26年から復刊「凍原」編集（18号で休刊）。38年11月郷土随筆誌「北の話」を創刊編集し現在に至る。代表作に、世界スピードスケート選手権大会（昭29、札幌）での凄絶な対決を描く「冬の燕」（昭45・11～46・4、「日刊スポーツ」。昭49、凍原社）、氷の女王長野富子がヒロインの「銀の宴」（昭47・10～12、昭48、同）、北海道出身の世界的スプリンター内藤晋を描く「氷の旗」（昭46・10～11、「農業北海道」。昭48、同）の〝スケート三部作〟があり、スケートの〝名勝負物語〟の先駆者である。「雑誌と私」（昭60・2～3、北海道新聞）は道内有数の〝編集者物語〟。ほかに中編小説「終南山」（昭34・3、鳳工業辰友会事務所）などがある。日本ペンクラブ会員。（比良信治）

八木一紅女　明30・12・1～昭52・11・6（1897～1977）〔俳句〕室蘭市生まれ。本名敏。華道師範。大正12年から作句。「ゆく春」に所属、札幌ゆく春会を興しその中心として多くの後進の育成に当たった。旭川ゆく春会、士別ゆく春会と密接に連携、師の室積徂春、波那女夫妻を本道に招き、旭川、士別、阿寒と同行することたびたび。晩年は藤田旭山の「俳海」に作品を発表。句集に「花氷」「紅提灯」がある。（園田夢蒼花）

八木栄一郎　明41・12・6～（1908～）〔短歌〕日高管内三石町生まれ。札幌師範学校卒。静内の高静小教諭を振り出しに静内小ほか二校の校長を経て静内町教育長。退職後同町図書館長。昭和28年「日高路」に入会、後編集発行人。30年「新墾」入社。51年「歩道」に入社、同人。静内町文化功労賞受賞。静内短歌会長。歌集に「黄梅」（昭59）がある。（椎名義光）

八木沢不凍　大13・4・19～（1924～）〔俳句〕根室市生まれ。本名煥。国鉄札幌教習所卒。国鉄職員として勤務後会社員。昭和21年兄不折に誘われ俳句入門。伊藤凍魚に師事し「氷下魚」同人。同誌廃刊後長谷川双魚主宰「青樹」同人。（菊地滴翠）

柳沼牧羊　明40・7・6～（1907～）〔俳句〕日高管内三石町生まれ。本名高杉。大正14年一四歳の時、恩師桜田一羊に俳句の指導をうける。〈元旦や松にかかりて古き雪〉が伊波多行史（「石楠」同人）の特選句となる。昭和25年「緋衣」に入会、古田冬草に師事。49年「葦牙」に入会。58年同金剛集同人となる。50年3月エッセー集「素晴らしい借景」を刊行。（太田緋吐子）

八木義徳　明44・10・21～（1911～）〔小説〕室蘭市生まれ。庶子。父田中好治は医師。武揚小学校から庁立室蘭中学校（現栄高）に進んだが、四年生のとき有島武郎「生れ出づる悩み」「カインの末裔」を読んで文学に眼を開かれる。昭和4年北大水産専門部に入学したが、樺太を放浪した6年に左翼学生の弾圧によって退学を命ぜられて上京。間もなく満州に逃亡し、帰郷して〝転向〟。8年早稲田大学第二高等学院に進学し、同時に文学活動をはじめる。横光利一に

師事。10年早大仏文科に進み、長見義三を識る。12年に樺太放浪を描いた「海豹」（芥川賞参考候補作）を発表して横光に賞められた。翌年早大を卒業し、満州理化学工業の社員として渡満。召集を受けて中国大陸を進軍中の19年に満州体験を描いた「劉広福」で芥川賞を受賞する。21年に復員すると妻子は東京大空襲によって焼死しており、妻子への痛恨を描いた「母子鎮魂」（昭23・3、世界社）をはじめつぎつぎに佳作を発表した。24年出版の「私のソーニャ」と「美しき晩年のために」で作家的地位を確立、24年夏に一七年ぶりで帰道したが、「網走刑務所」（昭25、「別冊文芸春秋」）、「脱獄者」（同、「中央公論」）、「摩周湖」（同、「別冊文芸春秋」）、「漁夫画家」（昭27、「文学界」）、「海霧」（同、「小説新潮」）などはその折の諸作。以後たえず〝失われた野性〟の回復を故郷に求めて帰省し、そのたびに佳編〝ふるさと紀行〟を生んでいる。「翳ある墓地」（昭30・7、「新潮」）で、はじめて出生の秘密に取り組み、珠玉の短編集「摩周湖」（昭46・4、土筆社）はそれまでの八木文学の決算書。故郷ものの連作小説集「風祭」（昭51・8、河出書房新社）で読売新聞文学賞を受賞した。長編「海明け」は52年北海道新聞に連載され、翌年4月河出書房新社から単行。文学的自伝「私の文学」（昭46、北苑社）のほか、エッセー集に「男の居場所」（昭53、北海道新聞社）、「北風の言葉」（昭55、北洋社）、「まちがえた誕生日」（昭59、花曜社）がある。私小説作家として光芒をはなち続けているが、55年11月故郷室蘭に八木義徳文学碑が建った。

〔摩周湖〕　短編小説集。生まれ故郷の室蘭をはじめ北海道を舞台とした、「雪の夜の記憶」「網走刑務所」「脱獄者」「漁夫画家」「摩周湖」「倶多楽湖」「海霧の町で」「恵山岬」「漁師の歩く道」の九本が収められている。「彼の故郷である北海道と、そこに生きる北方的人間の原型を描き出そうとしたもので、彼のそういう姿勢と魅力とが、端的に読む者の心に迫ってくる」（船山馨の帯文から）。（木原直彦）

八木隆一郎　明39・4・7～昭40・5・12（1906～1965）〔シナリオ、劇作〕秋田県生まれ。両親の離婚後、母とともに函館に移り庁立函館商業学校卒。青森県五所河原で代用教員時代に文学活動に入り上京。左翼劇場文芸部を経て新築地劇団文芸部に移った。昭和11年戯曲「熊の唄」上演を機に井上正夫演劇道場に参加し、女優水谷八重子、劇作家北條秀司と親しく交わった。戯曲の代表作に「沼津兵学校」「母の絵本」「赤道」「湖の娘」があり、シナリオの代表作に長塚節原作「土」、和田勝一原作「海援隊」がある。戦後はラジオドラマに意欲を示し「流木」「鎖国」などの定評ある作品を発表した。晩年は北条秀司、菊田一夫、宇野信夫とともに「鬼の会」を結成し、戯曲のほか舞踊劇も執筆し商業演劇の世界で活躍した。幼少年時代の母の献身的な愛を描いた手記「わが母は聖母なりき」が没後テレビドラマ化された。青森県五所河原市に詩碑がある。（佐々木逸郎）

矢口以文　昭7・11・1～（1932～）〔詩、英米文学〕宮城県生まれ。東北学院大、国際キリスト教大、米国インディアナ州ゴーシェン大学等に学ぶ。北星学園大教授。再洗礼派系のメノナイト教会シャローム集会責任者。32年釧路の詩誌「燠」に参加、人見和、前田和昭、小林杏介らと交友を深めながら詩作、同時に現代英米詩の翻訳、紹介につとめ多くの詩人に影響を与えた。38年堀越義三らと「詩の村」創刊、また江原光太、大島竜らの詩朗読の組織「詩の隊商」の主要メンバーとして活躍、広く海外、国内詩人と道内詩人との交流につとめた。詩は初期にはT・S・エリオットや、D・トーマスの影響下にあったが、その後、

イエス・キリスト使徒パウロの精神と表現法に傾倒、表現の率直さをめざす。詩集「A Shadow」（英文詩集）、「冬の神話」「復活」「にぐろの大きな女」「夜の木立」、評論集「アメリカ現代詩の一面」、訳詩集「シド・コーマン詩集」ほか多数。（堀越義三）

八雲竜吉　昭13・9・18～（1938～）〔小説〕渡島管内八雲町生まれ。本名広瀬竜太。北海道大学大学院文学研究科卒。昭和49年北海道新聞社第二回日曜版連載懸賞小説に「のこされた人びと」が佳作入選。翌50年に「明日の影」が当選。現在函館工業高専助教授。（稲葉吉正）

八子政信　昭8・8・16～（1933～）〔評論〕樺太生まれ。昭和20年敗戦で渡道札幌市に定住。49年「大島栄三郎年譜」で登場。編「橋崎政創作選集」（昭52・4、北海道新聞社）、個人誌「原資料小熊秀雄研究」（昭56・12～）等がある。（山下和章）

矢沢歌子　大13・3・24～（1924～）〔短歌〕江別市生まれ。口語歌人伊東音次郎の次女。庁立江別高女卒。昭和19年結婚、渡満。21年単身引き揚げ32年まで江別市在住。22年「原始林」入社。28年「原始林十人Ⅱ」参加。同年原始林賞受賞。32年帰還の夫と共に上京。48年歌集「水中輪唱」刊行。師山下秀之助は「敗戦時の満鮮で、悽惨としか言いようのない現実のなかに揉まれた異常な体験を回想して、限りなく心裡に湧きあがる強い感動が生き生きとして、しかもゆたかに充実し切って詠われている」と序文で述べたが、いわばこれを作歌の原点として、後年の広い視野と穏やかな円熟の作風が成ったといえよう。〈ビアフラの子と北鮮に飢ゑ果てし子のおもかげと重なりてなほ〉（鮫島昌子）

矢島京子　大9・4・29～（1920～）〔短歌〕札幌市生まれ。少女時代より作歌、昭和14年歌誌「新墾」に入社、結婚により渡満。一時中断後20年「新墾」再加入。小田観螢に師事し本格的に作歌を始める。24年「潮音」を経て29年歌誌「凍土」創刊に参加。同年「古今」同人。福田栄一に師事、思索的抒情を学び、けれんみのない抒情世界を確立する。34年「暗き活字」で第二回北海道歌人会賞受賞。42年第一歌集「北曲」を上梓。福田栄一の序文は「美しい反美学」と題して一五ページにわたる懇切な美文調である。37年から41年まで「凍土」編集人。47年「新凍土」退会。一党一派に偏らず表現を追及し、文学的な水準を高める研鑽の場として「彩北」を創刊、編集発行人となる。48年女人短歌北海道支部長、50年第二歌集「冬炎」を新星書房より出版、年齢とともに、その境地に深みが増しゆるぎないものとなる。「人」同人。北海道歌人会幹事、札幌市教育委員会文芸部委員、「さっぽろ文芸」選者。茶道裏千家教授。（小島嘉雄）

八嶋祥二　昭5・9・11～（1930～）〔小説〕東京生まれ。昭和20年伊達市に転住。23年室蘭の同人誌「二十世」に参加。27年には伊達で「氷島」を創刊主宰し、のち「室蘭文学」の主要同人として創作活動を行う。衣村宮二の筆名で発表したものも含めた短編集「天の笛」（昭35・7、室蘭文学会）は代表作品群。室蘭、札幌と移り、43年には北海道医療新聞社を創業して医学書の出版を手がけている。（木原直彦）

社　八郎　大2・3・2～（1913～）〔俳句、川柳〕新潟県生まれ。本名向山毅。川柳名は向山乃影子。大正8年小樽市居住。川柳は11年田中五呂八の「氷原」に昭和16年まで。現在は時実新子の「川柳展望」会員。俳句は昭和21年から35年まで、「緋衣」に50年より「氷原帯」、54年より「粒」同人。句集は30年に「坂」、55年に一原九糸と「二人の坂」を刊行。小樽俳句会にも所属。川柳も俳句も短文芸として分けて考えない。（山田緑光）

安英　晶　昭25・8・17～（1950～）〔詩〕北見市生まれ。本名野崎ひとみ。札幌北高校卒。「炎の会」を経て現在「核」「パンと薔薇」「迦楼羅」「地球」同人。詩集に「出棺」（昭52）、「極楽鳥」（昭57、第20回北海道詩人協会賞受賞）がある。（小松瑛子）

安田巌城　生年不詳～昭3・4・25（？～1928）〔短歌〕福岡県生まれ。本名直、字は如矢、巌城と号した。福本日南の弟で、はじめ室蘭、札幌に住み、一時台湾や樺太で官吏となったこともある。明治34年以来帯広に移り、新聞記者として活躍。「十勝史」「十勝地名解」の著もある。その歌は日南ゆずりの雄渾な万葉調で、中にはアイヌ語を採り入れたものもある。妻たつ子も歌を詠んだ。（中山周三）

矢田遺想路　明30・10・20～昭6・3・27（1897～1931）〔短歌〕美唄市生まれ。本名磯治。農業。文語歌から口語歌に進み、伊東音次郎、並木凡平に兄事。昭和3年大窪草果、中川安太らと同人文芸誌「鈴蘭」を創刊。遺歌集「生魂」（昭7）。（横井みつる）

矢田枯柏　明30・8・1～昭44・2・3（1897～1969）〔俳句〕稚内市生まれ。本名栄一。明治大学中退。京都日之出新聞記者、雑誌編集者等を勤めた。初め牛島滕六に句作の手ほどきを受け、大正10年臼田亜浪に師事して「石楠」同人となる。13年亜浪の第一回来道には、道内各地を案内する。同年「あかとき」を小樽から創刊主宰し、久末永霤、比良暮雪、原孤葉、池田六象ら多数の有力俳人を擁した。亜浪第二回の来道した昭和11年には、竹田凍光、新田汀花、堀川牧韻ら「石楠」系俳人と共に「北海道石楠連盟」を結成し、機関誌「北光」を創刊するなど「石楠」の道内隆盛に大きく寄与した。その後芦別、帯広、札幌など各地へ転住し、「あざみ」「柏」「草人」「径」等を創刊したが、一定の拠点を持たぬため永続しなかった。句集に「雪線」「春涛」がある。〈切株や秋の日がさす胸の奥〉（木村敏男）

八森虎太郎　大3・6・12～（1914～）〔詩〕岩手県生まれ。本名古川武雄。宮沢賢治が教鞭をとったことのある稗貫農学校（現花巻農業高校）を経て日本大学拓殖科別科卒。昭和10年与田準一、巽聖歌の童謡誌「チチノキ」（第二次）に同人として参加。翌年童謡誌「童魚」同人。16年前田鉄之助の「詩洋」同人となる。同年中国に渡り、季刊「上海文学」に参加し同人となる。戦後札幌へ引き揚げ、上海時代の詩友池田克己（東京）とともに22年6月「日本未来派」を創刊し、28年まで発行人を担当。同発行所は昭和27年同誌および同人の金子光晴、百田宗治、小野十三郎、高見順らの詩集、詩論集刊行により北海道文化奨励賞受賞。詩集に「コタン遠近」（昭32）があり、宮沢賢治童話集「税務署長の冒険」（昭24）の編集、解説にあたる。「日本未来派と私」（北海道新聞連載）がある。日本現代詩人会、北海道賢治の会会員。（佐々木逸郎）

八剣浩太郎　大14・10・23～（1925～）〔小説〕十勝管内新得町生まれ。本名岡田稔。昭和19年9月明治大学文芸科卒。十勝管内の小、中、高校教員を経て北海タイムス記者。この間「凍原」に「栗鼠の巣」「深山の灯影」などを発表。32年上京。主な著書に「赤穂義士」「銭の歴史」「史実・源義経」「隠密討ち」「時代考証百科」など。（木原直彦）

柳　欣子　大3・3・7～（1914～）〔俳句〕伊達市生まれ。本名鬼柳きん。伊達女子職業学校卒。昭和24年アカシヤ同人であった斎藤伝を識り「アカシヤ」に入会して土岐錬太郎に師事。29年同百花集同人。50年アカシヤ賞受賞を機に同木理集（無鑑査）同人。53年句集「雑木山」を上梓。アカシヤ俳句会運営委員として会務に尽力するほか札幌支部所属会員の育成に努める。俳人協会員。（岡澤康司）

柳田國男　明8・7・31～昭37・8・8（1875～1962）〔民俗学〕兵庫県生まれ。明治33年東京大学卒。農商務省に入り大正8年貴族院書記官長で退官。明治40年ごろから民俗学研究を行い、大正2年に「郷土研究」、14年に「民族」を編集刊行、多数の著書を世に送った。明治39年、昭和8年、22年の三回来道している。北海道について記したものに「アイヌの家の形」（明43）、「アイヌ物語」（大2）、「蝦夷の内地に住すること」（同）、「『アイヌ研究』批評」（大14）、「北海道の方言」（昭8）、「花とイナウ」（昭22）、「北方風物」2回連載）などがある。（小野規矩夫）

柳原ツヤ子　大7・3～（1918～）〔短歌〕札幌市生まれ。昭和10年札幌北星高女卒。昭和44年より作歌をはじめる。当時「藻岩嶺」改題「北土」同人。47年第一回北土新人賞受賞。49年第三回北土賞受賞。新短歌人連盟会員。現在「北土」編集委員。（畑沢草羽）

柳本志津子　昭7・4・1～（1932～）〔短歌〕樺太生まれ。昭和39年同人誌「凍土」に入会。41年「新凍土」発足とともに所属、同誌編集委員。第一回宮田益子賞受賞。56年第一歌集「風の橋」を刊行。58年より北海道歌人会幹事。「潮音」「葦の会」にも所属。豊かな感受性と才気あふれる佳作を多く詠みつづけている。（大久保興子）

柳谷実智博　昭4・5・27～（1929～）〔演劇、作詞〕釧路市生まれ。北海道学芸大学旭川分校卒。帯広三条、遠軽、旭川東高校演劇部顧問として高校演劇を指導。昭和30年代には「お盆の日」など十勝川流域を題材にした戯曲を連作発表。別に木崎博のペンネームで「急行利尻の女」「さよなら知床」「訪ねてみたいもういちど」などの歌謡曲を作詞。「北海道の歌謡曲」（旭川叢書）などの著書がある。（本山節弥）

矢野哲郎　大5・7・26～昭56・11・18（1916～1981）〔俳句〕留萌管内増毛町生まれ。本名慶治。二〇歳より俳句にいそしみ昭和9年松村巨湫に師事。「緋衣」「雲母」「氷下魚」「葦牙」に拠る。昭和57年未亡人により遺句集「望郷」が刊行された。（太田緋吐子）

藪　禎子　昭5・3・29～（1930～）〔近代文学研究〕芦別市生まれ。東北大学大学院修。藤女子大教授。「北村透谷における国民・民衆の問題」（昭44、「日本近代文学」10集）、「『新生』の基本構造」（昭49、「藤女子大国文学雑誌」15号）、「『楚囚之詩』論」（昭57、同29号）などがある。（神谷忠孝）

藪　弘　大3・6～昭59・12・28（1914～1984）〔短歌〕函館市生まれ。小学校高等科卒。昭和11年満州に渡り劇場宣伝部、デパート図案部、新聞社学芸記者。21年引き揚げ後、広告美術業自営。昭和6年頃より新聞その他に短歌、詩、俳句等を投稿。41年北海道新聞歌壇の選者。中山周三に師事し「原始林」入社、44年度の同社田辺賞を受賞。（新蔵利男）

山内栄治　大4・2・8～（1915～）〔詩〕宮城県生まれ。本名栄治。庁立室蘭工業学校修。昭和10年詩の同人誌「小屋」（洞爺湖温泉）に参加して詩作をはじめ、13年小柄沙咬、八条志馬らの「山脈」（栗山）同人となる。「山脈」は15年「石狩平原」と改題、19年終刊した。この間枯木虎夫との共著詩集「陽とともに」（昭14）を刊行。戦後は更科源蔵の「野性」創刊に参加し同人となった。22年第二詩集「愛の記録」を刊行。25年全道労協の結成に参画し初代事務局次長を経て道労働金庫常務ののち、47年北海道労働文化協会を結成し理事長に就任。同協会長更科源蔵とは戦前から交流が深く私淑した。53年詩集「河」を刊行。副題〈私の戦中戦後〉のとおり前二冊の詩集に、以後の作品を加えた全詩集

となっている。（佐々木逸郎）

山内国治（やまうちくにはる）　明40・3・6～昭56・11・22（1907～1981）〔短歌〕東京生まれ。札幌逓信講習所高等科卒。昭和9年「アララギ」に入会。12年函館で機関誌「岩桧葉（いわひば）」創刊に加わり、共著歌集「山襞」を刊行。満州から引き揚げ後は広尾電報電話局長等を歴任。46年から「北海道アララギ」発行人。（杉本晃一）

山英二（やまえいじ）　明44・1～昭58・3・25（1911～1983）〔短歌〕小樽市生まれ。本名山口勝美。昭和初期並木凡平に師事。「新短歌時代」「青空」を経て復刊の「青空」で活躍。また第二次「新短歌時代」「北土」にも参加。その作風は定型口語歌であるが、確かな詩情を織りまぜた独特なものであった。中央バスに勤務。小樽文化団体協議会副会長。小樽凡平会副会長。（吉田秋陽）

山岡鉄雄（やまおかてつお）　大6・6・14～昭34・10・10（1917～1959）〔短歌〕十勝管内士幌町生まれ。昭和15年出征。16年中国で発病し、17年から帯広の傷痍軍人療養所に入る。19年一路北海道支部誌「早蕨」を創刊、後に「林帯」と改題して二八号まで発行した。遺歌集「凍結期」。（船尾　彊）

山形敏男（やまがたとしお）　大14・8・27～昭57・7・6（1925～1982）〔小説〕択捉島生まれ。旧制東京駒込中学校卒。国後島の国民学校で代用教員となり以後教員生活を続けた。「三つの骨壺」「箱の中で」「海の見えない街へ」「故国でなく国後島」（「北方文芸」）の諸作はともに四〇歳を過ぎてからのもので、未還の故郷への存念が主題になっている。単行本「三つの骨壺――山形敏男遺稿集」がある。（小松　茂）

山県汎（やまがたひろし）　明35・12・4～昭34・10・19（1902～1959）〔短歌〕山梨県生まれ。北海道大学医学部卒。在学中より作歌し北大短歌会、札幌短歌会等で活躍。大正13年2月「言霊（ことだま）」、同年4月第一次「原始林」の創刊にあたり、その編集を担当した。その後「草いちご」を経て、昭和4年宇都野研主宰の「勁草」に入り、その主要同人となる。また宇都野の女婿となり東京に転住した。写実を基調とし、清新で温雅な作品が多い。（中山周三）

山川　精（やまかわせい）　昭2・10・25～（1927～）〔詩〕桧山管内上ノ国町生まれ。満州から引き揚げ置戸町、北大、道立図書館司書。青史の号で俳句をつくり「北方俳句人」「氷原帯」に発表。昭和27年「北海文学」創刊に加わり詩を書く。「詩の村」「現地」創刊同人。「ATOM」会員時代に安田博（風山瑕生）と知りあい深い交友をもつ。難民体験を土台にして長編散文詩〝哈爾浜（ハルビン）〟物語を発表しつづける。北海道立文書館設立の計画主幹を務めた。（堀越義三）

山川　力（やまかわつとむ）　大2・1・19～（1913～）〔エッセー、評論〕山形県生まれ。三歳のとき岩見沢に転住。東京大学英文科卒。東亜研究所を経て北海道新聞社に入り学芸部長、論説主幹、監査役、顧問。退社後武蔵女子短大教授。「アイヌ民族文化史への試論」（昭55、未来社）のほか「中国雑記」「山旅記」「新聞の自己規制」、詩集「雲岡石窟幻想」「寒夜に灯が消えた」など。編著に「レラコラチ森竹竹市遺稿集」（昭52）がある。（小笠原克）

山川三木子（やまかわみきこ）　明43・6・30～（1910～）〔短歌〕弘前市生まれ。幼時、父の転勤で札幌に移住。札幌市立高等女学校本科を卒業し、昭和3年補習科を終了。補習科のころから文学に取りつかれ、短歌や詩を作って校友会雑誌に発表、国語教師渡辺滋子の短歌添削を受ける。同年芥子沢新之介主宰の「吾が嶺」に入社。5年に新聞で「新墾」創刊を知り参加、新井野造酒子の名前で作品を発表した。翌6年結婚。「吾が嶺」と「新墾」の両誌に出詠していたが、のち「吾が嶺」を退社した。「新墾」では幹部同

人となり選者としても活躍。やがて「潮音」にも入社。創刊以来の女流歌人として重きをなしている。〈花を買ひ灯の下ひとりの誕生日花首みんなこちら向かせて〉（宮崎芳男）

山川有古（やまかわゆうこ）　昭15・9～（1940～）〔短歌〕十勝管内広尾町生まれ。昭和32年「辛夷」入会以来、自由律の時代を経て一貫して強い抒情をうたい続け、57年発行の第一歌集「罌粟をかざせば」にそれを結集させた。45年第六回中城ふみ子賞を、52年第一九回辛夷賞を受賞。また51年には第五回帯広市民文芸賞を受けている。現在「辛夷」運営委員、選者のほか「黎」同人として活躍。（大塚陽子）

山岸巨狼（やまぎしきょろう）　明43・3・22～（1910～）〔俳句〕後志管内余市町生まれ。本名佐藤次郎。北海道拓殖銀行に勤務。昭和5年小樽新聞俳壇へ投句したのが句作の始めで、句友と「山鳩吟社」を創り古田裸人の指導を受ける。翌6年牛島滕六の「時雨」に加わり、臼田亜浪の「石楠」にも投ずる。滕六の蒼古重厚な作風と、その後を継いで「葦牙」を創刊主宰した長谷部虎杖子の郷土性の濃い句風に、「石楠」の大らかな俳風を摂取したことが、その後の長い俳句生活を支えるバックボーンを形成したものと見られる。昭和8年八雲町へ転じ「八雲吟社」を創り、八雲地方俳句作家連盟を結成する。21年新田汀花らの「緋衣」創刊に参加、また角川源義の「河」同人として源義没まで継続。47年長谷部虎杖子病没により「葦牙」を継承主宰する。40年第一句集「雪鳴」、57年第二句集「夕焼」刊行。俳人協会員、北海道俳句協会代表。〈天より斧凍海ふかく罅はしる〉

〔夕焼〕（ゆうやけ）　句集。昭和57年3月、葦牙俳句会刊。第一句集以後の昭和40年から56年まで一六年間の六百余句を収める。この間に勤務先の定年退職を迎え、また「葦牙」を主宰し、北海道俳句協会の代表となるなど、人生の転機を幾つか体験したが、その心象を滲ませながら随所に余裕のある人生観を濃く揺曳させた句集。（木村敏男）

八巻春悟（やまきしゅんご）　大12・4・6～（1923～）〔短歌〕上川管内比布町生まれ。本名春雄。一七歳から短歌を始める。昭和18年歌誌「香蘭」「あさひね」「鶏苑」同人。池田勝亮に師事。「鶏苑」分裂後、加藤克巳の「近代」に所属。同誌改題「個性」同人となる。53年第一二回個性賞を受賞。一方「凍土」を経て「新凍土」同人。46年10月以降、宮田益子没後の「新凍土」の編集発行人。「個性」北海道支部長、美唄歌人会顧問。常にひかえめでありながら主張は曲げないという人柄が信頼を深め、十有余年にわたって季刊「新凍土」を発刊し続けた。北海道のなかにあっても、いわゆる地方といわれる土地で生きた者の精神の飢えのようなものと共に、風土へ対する愛着がつねにその作品の底を流れ独自の世界を確立している。〈ひもじさのきわみに詩歌あかあかと天衣無縫の空のゆうやけ〉（飯田安子）

山口喜一（やまぐちきいち）　明14・11・22～昭44・5・22（1881～1969）〔短歌〕福島県生まれ。新聞人として北海タイムス（現北海道新聞）支配人、新北海（現北海タイムス）社長等を歴任。昭和34年北海道文化賞受賞。「竹柏会」「蒼穹」「短歌紀元」等に所属。歌集「喜寿の旅」（昭33）。「老新聞人の思い出」（昭32）は貴重な回想記である。（村井　宏）

山口恵子（やまぐちけいこ）　昭和2・12・5～（1927～）〔短歌〕網走管内遠軽町生まれ。昭和19年庁立網走高等女学校卒。32年「辛夷」入社。選者、運営委員を歴任。38年辛夷賞を受ける。現代的な感覚詠を得意とし、系統立った理論家ともいわれる。（渡辺　洪）

山口敬子（やまぐちけいこ）　昭17・12・27～（1942～）〔詩〕上川管内当麻町生まれ。三好達治に魅せられ下村保太郎の影響を受けて詩を書きはじめる。詩誌「青芽」「な

なかまど」「情緒」に発表。詩集「過ぎた扉」「炎える雪」を旭川春秋社から発刊。旭川のPR誌「ほおずき」を編集発行。「情緒」同人。北海道詩人協会員、旭川詩人クラブ会員。（東　延江）

山口誓子（やまぐち せいし）　明34・11・3～（1901～）〔俳句〕京都生まれ。本名新比古（ちかひこ）。大正9年より作句。「京鹿子」「ホトトギス」に投句。高浜虚子に抜群の才を認められ、水原秋桜子、高野素十、阿波野青畝とともに4Sと称された。昭和10年東大俳句会以来の盟友秋桜子の「馬酔木」に招かれ連作俳句「深青集」の選に当たる。23年西東三鬼、平畑静塔、秋元不死男、橋本多佳子ほか多数の第一級俳人に強力に奨められ「天狼」を創刊主宰。32年より朝日俳壇選者。句集は昭和7年刊の「凍港」、10年刊の「黄旗」をはじめ約二〇冊、評論随筆集では四〇冊を超える。これを系統的に編んだのが52年刊行の「山口誓子全集」一〇巻。誓子は小、中学校時代を外祖父とともに樺太で過ごしたことがあり、その後も折々来道し作品を残している。〈雪降らしおのれも白き天狗山〉（園田夢蒼花）

山口青邨（やまぐち せいそん）　明25・5・10～（1892～）〔俳句〕岩手県生まれ。本名吉郎。大正10年東京帝大工学部助教授のとき高浜虚子に師事。秋桜子、風生、誓子らと東大俳句会を興す。昭和3年ホトトギス講演会で「どこか実のある話」を講演、4S（秋桜子、素十、青畝、誓子）時代を提唱した。4年ホトトギス同人。同年「夏草」を創刊主宰。9年処女句集「雑草園」及び第一随筆集「花のある随筆」を刊行。以後多くの句集、随筆集を誕生させたが、清純高潔な文人的作風と「ホトトギス」の山会で虚子が絶讃した写生文の巧さが、俳人協会顧問、ホトトギス同人会長、毎日俳壇選者、東大名誉教授たる卒寿翁青邨の魅力の根源といえよう。札幌市に榛谷美枝子の率いる夏草北海道支部があり来道の機会も多かった。〈たんぽぽの咲きつづきつつ北の国〉を刻んだ句碑が芦別市にある。（園田夢蒼花）

山口　孝（やまぐち たかし）　大10・5・24～昭48・3・18（1921～1973）〔短歌〕札幌市生まれ。本姓館。北海道大学工学部土木科卒。釧路市東邦交通社長。少年時代より短歌を愛好し、昭和15年の北大予科時代に友人の勧めで「アララギ」に入会。土屋文明、樋口賢治に師事。21年「羊蹄」に江別より参加、36年釧路アララギ会を興し会報を発刊。46年「釧路現代文学選集」に参加。写実に徹底した作風。（笹原登喜雄）

山口　隆（やまぐち たかし）　大15・1・25～昭52・10・12（1926～1977）〔俳句〕桧山管内江差町生まれ。東京薬学専門学校卒。自営業。昭和21年八雲羚之助に俳句を学び、22年土岐錬太郎を知り「アカシヤ」に入会。後に「青玄」「青芝」にも参加した。大成町でアカシヤ支部の指導に当たる。47年アカシヤ無鑑査同人。51年青芝特別賞受賞。俳人協会員。遺句集「双眸」上梓。57年大成町に句碑建立。（岡澤康司）

山口沛雨（やまぐち はいう）　大2・9・28～（1913～）〔俳句〕樺太生まれ。本名誉見（たかみ）。豊原中学校卒。樺太庁に就職。昭和11年樺太庁俳句会に入会、恩地樺雪の指導を受け、14年「氷下魚」に入会、伊藤凍魚に師事。「鹿火屋」「若葉」にも学ぶ。敗戦により一時中断、29年「氷下魚」復刊により参加同人、同誌廃刊後は「雲母」に拠る。北海道開発庁を定年。大林道路に勤め50年退職。句集「海霧（うみぎり）」（昭52）がある。（菊地滴翠）

山口昌男（やまぐち まさお）　昭6・8・20～（1931～）〔文化人類学研究〕網走管内美幌町生まれ。東京大学卒。東京外語大教授。岩波書店から「アフリカの神話的世界」「文化と両義性」「知の遠近法」「二十世紀の知的冒険」「文化人類学への招待」などを刊行。学界に新風をおこす。（神谷忠孝）

山口雅子（やまぐち まさこ）　昭10・10・5～（1935～）〔短歌〕札幌市生まれ。詩から移行して昭和30年「新墾」入社。33年同人。現在幹部同人。34年第二回「短歌研究」新人賞、35年第一回新墾賞を受賞した。新人賞の作品は、既成の短歌から脱却した豊かな詞藻とフレッシュな感受性に溢れ、短歌は詩であるという印象を強く感じさせた。孤に徹した深窓の歌人、学究の人というイメージをそのままに、〝創る〟というただ一筋の姿勢をくずさないかたくなさが魅力。〈楓の坂ゆき往けど煉獄はあらずまひる陽しんのくれなゐ〉（水平緑苑）

山崎剛平（やまざき ごうへい）　明34・6・2～（1901～）〔短歌、出版〕兵庫県生まれ。早稲田大学国文科卒。砂子屋書店を創業して長見義三の小説集など多数出版。長編小説「煙霞浪漫」（昭14・11、砂子屋書店）は北海道と九州を舞台にした旅行小説。大正13年ごろ、早稲田高等学院時代の作者なる主人公が室蘭、登別、旭川、稚内、札幌と回る物語。（木原直彦）

山崎豊子（やまざき とよこ）　大13・11・3～（1924～）〔小説〕大阪生まれ。京都女専卒。「花のれん」（昭33・1～6、「中央公論」）で直木賞受賞。生家の昆布商を題材にして大阪商人の典型を描いた「暖簾」（昭34・5、東京創元社）には北海道が描かれている。「ぼんち」（昭34）、「女系家族」（昭37～38）、「白い巨塔」「続白い巨塔」（昭38～43）など、次々に話題作を発表。「二つの祖国」（昭58）はNHK大河ドラマで放映された。（神谷忠孝）

山崎嘉見（やまざき よしてる）　昭21・7・20～（1946～）〔詩〕旭川市生まれ。佐藤喜一の影響を受けて詩を書き出す。昭和40年日本大学在学中高村光太郎の会会員となり、同年「冬涛」同人、詩誌「終戦子」（5号終刊）、44年詩誌「ゲリラ」（3号終刊）を発行した。46年帰旭、詩誌「異類都市」創刊、55年「あうら」に改題主宰し現在に至る。50年詩集「サブ」発刊。同詩集で旭川市新人奨励賞受賞。旭川詩人クラブ会員。（東　延江）

山崎義彦（やまざき よしひこ）　昭2・4・22～（1927～）〔詩〕宮城県生まれ。昭和26年東北大学文学部西洋美学美術史科卒。宮城県涌谷高校教諭を経て41年北大文学部（ドイツ文学）講師、58年同言語文化部教授。終戦後、丸山薫に師事。「花粉」同人を経て、「核」「てんばた」同人。みずからナンセンス詩と呼ぶ軽妙な人生風刺詩を得意とする。リルケ研究家。ドイツの現代版画家クルックの紹介者でもある。（河邨文一郎）

山下和章（やました かずあき）　昭6・1・21～（1931～）〔評論〕札幌市生まれ。札幌工業高校卒。郵政職員となり札幌中央郵便局勤務。戦後の労働組合文学運動のなかで最も持続力のある全逓北海道文学サークルの中心として「全逓北海道文学」編集に携わる。全国誌「全逓文化」の常連寄稿者。道内の勤労者文学の交流にも意を注ぐ。「三浦三郎の周辺」ほかの、全逓道文学運動史の調査執筆の労作がある。（小笠原克）

山下祥介（やました しょうすけ）　明27・3・1～昭29・9・16（1894～1954）〔短歌〕兵庫県生まれ。本名庄之助。日産農林帯広工場長より昭和23年帯広協会病院事務長。患者、職員の合流文芸誌「オアシス」や、病院内回覧互選方式の「銀の壺短歌会」の育成に力を注ぎ、25年9月超流派短歌誌発刊を提唱、大森卓、舟橋精盛ほか数名に協力を要請。26年1月歌誌「山脈」を創刊し編集、発行人に推される。同誌は二八号で休刊になったが戦後十勝歌壇殷賑の源になった。（寺師治人）

山下秀之助（やました ひでのすけ）　明30・11・29～昭49・4・4（1897～1974）〔短歌〕鹿児島県生まれ。東京大学医学部卒。大正11年5月新設の北大医学部助手として来任、同講師、小樽病院を経て大正15年札幌鉄道病院に勤務。昭和20年院長となり、33年定年退職。同年東京に転住し日

通病院、松風荘病院などに勤務。大正2年より作歌。はじめ郷土の先輩若山牧水を慕い第二期「創作」に入り、「潮音」移行にともない、太田水穂に師事。師より「愛欲派」と命名された。来道後の大正13年4月第一次「原始林」を創刊、地方歌人の自主性確立を強調したが、機運まだ熟さず、一年の短命で終わる。また一同人が水穂の添削例を批判、そのため「潮音」の同人を辞退した。この間北原白秋、吉植庄亮、尾山篤二郎、若山牧水らを札幌に迎えている。一時作歌の空白期があったが昭和4年庄亮主宰の「橄欖」に迎えられ作歌を復活し、16年北海道歌人協会を設立、ほかにも北海道文芸協会を結成、理事長に推され「北方文芸」を創刊。また北海道文学報国会長となる。21年5月には第二次「原始林」を再創刊、その代表となり、また29年北海道歌人会の設立や北海道新聞歌壇の選歌を担当、北海道文檀歌壇の指導的役割を果たした。同年北海道文化賞を受賞。32年札幌市円山公園に〈しろがねにかがやく雲の空に満ち無際限なるいのちの流れ〉の歌碑が建立された。東京転住後も日本歌人クラブ、日本短歌雑誌連盟代表や宮中歌会始選者などをつとめた。肝臓ガンのため永眠。歌は南国生まれらしいフレキシブルな感覚で北方風物をうたい、抒情と観照の融和した平明温雅なもの。歌集は「山下秀之助全歌集」ほか七冊、随筆集「市谷通信」(正続)、編著「随筆北海道」などがある。〈あはあはと薄るる空に貼絵なす富士の紫紺もあとしばしの間〉　(中山周三)

山下みや子　大9・10・26～(1920～)〔短歌〕香川県生まれ。昭和4年網走管内女満別町に両親と共に移住。戦後の21年ひとり小樽市に転住し苛酷な生活を始める。冷徹な眼で自己を見る短歌をつくり、52年歌集「春秋」を上梓した。北方風土の厳しさと、短歌の悲傷性が一つになって、作風に甘さはない。〈傷負ふは吾のみならず冬の川おずおずとして地の果を流る〉　(金子徳四郎)

山下緑朗　明42・10・23～昭54・6・3(1909～1979)〔短歌〕徳島県生まれ。本名多喜五郎。昭和5年西川青涛を頼って来道。上川管内富良野町役場書記、教育委員会総務課長、企画室次長、市郷土館次長を歴任。岸本翠月と富良野市史二巻を共同執筆し刊行する。昭和13年「潮音」「新墾」に入社、幹部同人として活躍。21年西川青涛と共に樹氷社を創立、歌集は「鳥沼」「緑蝶」がある。　(西川青涛)

山下りん　安政4・5・25～昭14・1・26(1857～1939)〔美術〕茨城県生まれ。工部美術学校初の女子学生の一人。浅井忠らとフォンタネージに学ぶ。ロシア正教に入信し、ペテルブルグの女子修道院で聖画を修める。明治16年帰国後は神田駿河台教会内に住みニコライ聖堂ほか東北、北海道(函館)のハリストス正教会のために聖画を描き続けた。晩年は白内障を患い、郷里に眠る。　(米坂ヒデノリ)

山科春樹　昭28～(1953～)〔小説〕網走市生まれ。本姓吉村。東京大学教養部在学中に書いた「忍耐の祭」(昭54・12、「群像」)が第二回群像新人長編小説賞を受賞した。　(木原直彦)

山路ひろ子　昭12・10・18～(1937～)〔小説〕恵庭市生まれ。本名小見山弘子。天使女子短大厚生科卒。苫小牧民報に「さようなら水色の街」(昭52)連載。「留萌文学」同人で「砂色の花」(63号)、「もうひとつの沼」(65号)、「鳩くる窓」(66号)を発表。　(神谷忠孝)

山田昭夫　昭3・1・2～(1928～)〔評論〕札幌市生まれ。北海道大学農林専門部から国文科に転じ、東京大学大学院修。小松伸六と従兄弟。藤女子大学教授。昭和25年「札幌文学」同人となり、宍戸淳介の筆名で創作「暗峡」(昭26・5)、山田昭夫の名で「有島武郎ノート」(昭30・7)などを発表。「『悲劇的精神系譜』の探求を」(昭35・6、北海タイムス)はその後の北海道文学研究をリードした記念すべき評論となる。昭和37年創刊の「位置」同人として「晩年の本庄陸男」をはじめ「私の有島武郎体験」(6号)、「広津和郎研究文献目録」(8号)などを発表。北海道新聞および「北方文芸」(昭43～48)の同人雑誌評を担当。著書に「有島武郎」(昭40、明治書院)、「有島武郎の世界」(昭53、北海道新聞社)、「有島武郎(鑑賞現代日本文学)」(昭57、角川書店)などがあり、「素木しづ作品集」(昭45、北書房)を編集して解説を担当した。　(神谷忠孝)

山田邦彦　安政4・12・10～明42・10・12(1857～1909)〔短歌〕長野県生まれ。筆名不老不死舎主人、壮武麿。明治35年北海道庁視学官として来札。38年函館区長に転じ、42年退職後は下諏訪に帰り死去。今井邦子の実父で、邦子も一時函館で同居。「もしほ草」「えぞにしき」(明37)の歌集がある。後者は本道詠四〇首をまとめたもの。歌は旧風であるが、調子はのびやかで清新。国学の造詣も深い。　(中山周三)

山田伍市　昭5・3・17～(1930～)〔詩〕山形県生まれ。北海道立農業講習所卒。農業労務者として北海道に渡り士別市で水田農家。友田多喜雄の影響で詩を書きはじめ、士別市農業問題研究会議の機関誌「ひろがり」に発表。昭和45年詩集「仲間におくる詩」を刊行。農業問題に関するレポートや評論もある。「士別市民文芸」「士別のふだん記」の指導的役割を果たしている。　(佐々木逸郎)

山田滋　昭15・4・17～(1940～)〔俳句〕旭川市生まれ。日本電信電話会社員。昭和42年「氷原帯」入会。43年「粒」同人。「海程」同人。54年細谷源二賞を受賞。「粒」別号(昭54)に「前衛俳句論」執筆。粒企画運営委員。現代俳句協会員。札幌在住。　(山田緑光)

山田順子　明34・6・25～昭36・8・27(1901～1961)〔小説〕秋田県生まれ。本名ユキ。大正9年小樽の弁護士増川才吉に嫁して渡道。小説を出版したくて13年3月、「婦人の友」の選者をしていた徳田秋声を頼り、書き下ろし長編「水は流るゝ」を持ち上京したが一旦帰樽、九月再上京。増川と離婚したのもその頃。大正14年4月「流るゝまゝに」と改題、聚芳閣から出版した。同社社長、同書装幀者竹久夢二と転々とした順子は、一旦帰郷の後、15年1月秋声夫人死去直後上京、秋声宅に止宿するようになり、ジャーナリズムの話題となる。以後、秋声の〈順子もの〉に描かれ、「仮装人物」(昭13)の梢葉子のモデル。秋声とは一年ほどで別れたが、男性遍歴が続いた。晩年は鎌倉に住み、観音文化運営会を主宰。著書に「苦悩を招くもの」(昭9)、「神の火を盗んだ女」(昭12)、「私たちの観音さま」(昭25)、「女弟子」(昭29)など。　(和田謹吾)

山田順三　昭5・5・28～(1930～)〔詩〕札幌市生まれ。北海道学芸大学岩見沢分校卒。昭和25年相神達夫、園生裕一郎、水木奏、長光太と文芸誌「風響」を創刊。詩、演劇の両面で長光太の影響をうける。詩誌「樵人」「先列」「火山帯」の創刊に加わり愛と革命の詩を発表。「詩の村」「現地」同人。一方、北教組の活動家としてアイヌ、身障者の差別反対運動の推進に努める。長女故恵里の作品集「雪ん子」を妻綾子と編集刊行。　(堀越義三)

山田清三郎　明29・6・13～(1896～)〔小説、評論〕京都生まれ。小学六年で中退、各種雑労働を経て上京、投書家、編集者から「文芸戦線」参加。プロレタリア文学運動の生き字引的存在で「プロレタリア文学史」二巻(昭29)ほかの研究書、「五月祭前後」(昭4)ほかの小説、「小説白鳥事件」全四

冊（昭46、東邦出版社）ほかの実録小説など多数。小林多喜二初期作品の掲載誌「新興文学」は山田の編集にかかわる。（小笠原克）

山田青船　大2・2・26～昭45・9・27（1913～1970）〔川柳〕桧山管内江差町生まれ。本名敏夫。樺太豊原中学卒。昭和4年国鉄豊原機関区に就職。8年豊原民報、樺太日日新聞川柳欄に初投句。終戦後樺太を引き揚げ札幌鉄道局運転部勤務。26年9月有珠鉄道病院で療養のかたわら、三四郎の名で有珠川柳会を創り、後年道柳界の中堅となる池田竜歩、松村豊柳子、高田光穂、竹内茶目坊はじめ多くの柳人を育てる。32年10月室蘭在勤中、福田弦五、岩戸迷羊子と室蘭川柳社を創設。33年札幌川柳社創立に同人として参画。38年10月岩見沢で栗原花車、丸山利雄とはかり川柳「いわみさわ」第一号を発刊。その間室蘭民報、岩見沢新聞柳壇選者。函館川柳社同人、川柳きやり吟社社人。昭和44年きやり賞受賞。岩見沢川柳社主幹として活躍中逝く。高田光穂編「山田青船遺句集」がある。（錦　俊坊）

山田大雪槍　明33・1・5～（1900～）〔俳句〕札幌市生まれ。本名義雄。国鉄に勤め、昭和32年七重浜駅長を最後に定年退職。早くより「時雨」に拠り牛島滕六の指導を受け、後「葦牙」に引き続き所属、長谷部虎杖子に師事し、現在「葦牙」麗日集同人。（佐々木子興）

山田太一　昭9・6・6～（1934～）〔シナリオ〕東京生まれ。本名石坂太一。早稲田大学教育学部国語国文科卒。「岸辺のアルバム」（北海道新聞連載、のちテレビドラマ）、「日本の面影」（NHK）ほか数多いテレビ作品によって放送文化賞（昭56）、芸術選奨文部大臣賞（昭57）、テレビ大賞優秀個人賞（昭58）、向田邦子賞（昭59）を受賞して第一線で活躍をつづける。北海道を舞台にした作品に「獅子の時代」（NHK）、「最後の航海」（STV）、「秘密」（HBC）などがある。著書に「岸辺のアルバム」「沿線地図」ほか。日本放送作家協会、シナリオ作家協会、日本文芸家協会会員。川崎市在住。（佐々木逸郎）

山田藤市　大14・2・11～（1925～）〔短歌〕美唄市生まれ。美唄工業学校卒業後、道立高校、養護学校事務長歴任。美唄歌人会、旧洞爺教員保養所みづうみ歌会、沼田歌人会等の設立に力をそそぎ、その指導力が評価されている。昭和18年「新墾」入社、現在選者。19年「潮音」入社と共に同人。寂とした幽玄の深さをもつ。（堀井美鶴）

山田野理夫　大11・7・18～（1922～）〔小説〕宮城県生まれ。東北大学文学部卒。取材作に「函館」（昭43、東出版）があるほか「北方文芸」に「松前」（昭43・11～44・4）を連載した。（小笠原克）

山田秀三　明32・6・30～（1899～）〔アイヌ文化〕東京生まれ。大正13年東京大学卒。農商務省に入り仙台鉱山監督局長、内閣参事官、軍需省化学局長など歴任。後、北海道曹達社長、会長。かたわら金田一京助に師事、アイヌ語地名研究では実証的方法により一家をなし、その業績は「アイヌ語地名の研究」一～四巻（草風館）、「北海道の地名」（北海道新聞社）に所収。昭和54年北海道文化賞、58年度第二回地名研究賞受賞。知里真志保、久保寺逸彦と親交がある。（藤本英夫）

山田　広　大12・3・26～（1923～）〔小説〕砂川市生まれ。空知農業学校中退。国鉄職員を経て会社員。作品に「赭いレール」（昭51、「北人」）、「月蝕」（同、「国鉄北海道文学」）、「夕日と駅長」（昭53、同）、「蚊帳と兵曹」（昭58・8、「北方文芸」）がある。「札幌文学」同人。（神谷忠孝）

山田風太郎　大11・1・4～（1922～）〔小説〕兵庫県生まれ。本名誠也。東京医大卒。「甲賀忍法帖」など、その忍法小説は一世を風靡し昭和30年代に忍法ブームをひきおこした。伝奇的な時代小説も得意とする。「地の果ての獄」（昭52・10、「文芸春秋」）は月形の樺戸監獄を舞台とした痛快譚。（木原直彦）

山田政明　昭9・6・5～（1934～）〔詩〕名寄市生まれ。名寄高等学校卒。昭和29年「青芽」（名寄市）に参加。30年「実験室」を創刊。以後「ポア」を経て「木星」（札幌）、「核」（同）に参加、55年「現在」創刊主宰する。56年「現在」を「北域」に改題現在に至る。詩集に「白夜の影」（昭45、青い芽文芸社）、「冬の樹」（昭55、核の会）がある。（文梨政幸）

山田茂登子　明45・2・18～昭27・5・4（1912～1952）〔短歌〕後志管内倶知安町生まれ。庁立札幌高女、北星高女専攻科卒。カリエスのため二〇年近い闘病生活を送る。「吾が嶺」「勁草」を経て昭和23年「原始林」入会。合同歌集「原始林十人Ⅰ」（昭27）がある。（猪股　泰）

山田洋次　昭6・9・13～（1931～）〔映画〕大阪生まれ。満州で少年期を過ごす。東京大学卒。昭和29年松竹映画に入社し、助監督を経て監督に。北海道を舞台にした映画の主なものに「家族」「幸福の黄色いハンカチ」「はるかなる山の呼び声」のほか「男はつらいよ」の〝寅さんシリーズ〟でしばしば北海道各地にロケーションをしている。北海道放送制作のテレビドラマ「東芝日曜劇場」のシナリオ「初恋」「わが街」「幼なじみ」「乙姫先生」などがあり、庶民の哀歓をとおしてゆたかな人間性を描いた作品で知られる。（佐々木逸郎）

山田緑光　大6・7・25～（1917～）〔俳句〕網走管内斜里町生まれ。本名正之。斜里在住の俳人有坂赤光車に師事、昭和9年「暁雲」（青木郭公主宰）に入会。その後「石鳥」「石楠」に投句。19年東洋高圧砂川工場に入社（設計技師）。戦後同社文化連盟の支援により「こぶし」「東圧俳句」を発行。22年当時十勝管内豊頃町に開拓入植中の細谷源二を知り、源二の同工場入社に尽力。23年「北方俳句人」創刊に参画、同誌休刊後24年「東圧俳句」を改題「氷原帯」創刊同人、以後36年まで発行編集等の責任者として氷原帯草創期を中心となって支えた。40年「粒」を創刊し代表同人、45年氷原帯を離れ「海程」（代表金子兜太）幹事同人。この間一貫して俳句前衛を指向、大胆かつ独自の発想と表現を求め、自我意識の確立を提唱。53年砂川市文化功労賞を受賞。同年から59年まで現代俳句協会北海道地区会議議長、顧問。58年北海道俳句協会年鑑編集長。59年金子兜太の後を受け北海タイムス俳句欄選者となる。著書に句集「忍冬」（昭27・8、忍冬刊行会）、「氷宴」（昭36・8、氷原帯社）、「山田緑光句集」（昭48・7、海程新社、戦後俳句作家シリーズ24）、「オホーツク海」（昭57・2、粒俳句会）等がある。他に多くの作家論や評論を発表している。〈闇にみえる心臓乗馬が立ちどまる〉（辻脇系一）

大和谷慶一　昭4・6・9～（1929～）〔短歌〕函館市生まれ。昭和35年から42年までの千葉県在住中、同人誌「果実」に依って歌作、37年に短歌研究新人賞候補に推される。来道後の44年「新墾」に入社し、47年に新墾賞受賞、51年に北海道歌人会賞に準入選。57年から北海道歌人会幹事、59年から「新墾」編集委員となる。生活の場の彷徨と同時に携えていた根源的な餓えは北限の地に詩的形象物を蘇らせ、豊饒な叙情をしたたらせる。〈駈けゆきし馬もどらねば夕茜もゆる地平の彼方を信ず〉（永平利夫）

山中散生　明38・5・7～昭52・9・11（1905～1977）〔詩〕愛知県生まれ。本名利行。大正15年名古屋高商を卒業し日本放送協会東海支部に勤務。シ

ュールレアリスム詩の研究者として著名。滝口修造と共に画家サルバドール・ダリの芸術を紹介した。詩は前衛主知派の詩誌「VOU」を中心に昭和10年ごろから発表、異彩を放つ。戦後は再び北園克衛らの詩誌「サンドル」に加わる。本道へは昭和21年札幌中央放送局事業部長として赴任し二カ年過ごす。のちに静岡放送局長、松江放送局長を歴任。著作に「シュールレアリスム・資料と回想」があり、詩集に「火串戯」(昭10)、「黄昏の人」(昭29)、「夜の噴水」(昭38)、「砂の楽器」(昭42、国文社)がある。

(新妻 博)

山中 恒 やまなか ひさし 昭6・7・20〜(1937〜)〔児童文学〕小樽市生まれ。早稲田大学卒。在学中、古田足日、鳥越信らと同人誌「小さい仲間」を創刊。これに昭和28年7月から56年6月まで連載された「赤毛のポチ」は、児童文学者協会新人賞を受け「戦後の日本のリアリズム児童文学が到達した記念碑的作品」(松田司郎)と評された。35年「サムライの子」「とべたら本こ」を出版。この二冊は児童文学が少数の良い子の所有物から一気に幅を広げる画期的な作品となった。子どもの興味性をきっちりととらえて離さないところは天性の資質であろう。素材も広く、「その名はオオカミタケル」「火と光の子」「天文子守唄」「三人泣きばやし」などの歴史物から、「クラマはかせのなぜ」「みんなゴリラ」のような童話まである。「児童読物作家」を自称。読売新聞社から山中恒児童よみもの選集として「あばれはっちゃく」を手始めに全一〇巻のシリーズが続く。また、「ボクラ少国民」にはじまる戦時下教育の告発シリーズは、山中恒がただの読物作家ではないことを証明している。

(笠原 肇)

山中峯太郎 やまなか みねたろう 明18・12・15〜昭41・4・28(1885〜1966)〔小説、児童文学〕大阪生まれ。陸軍大学在学中に中国へ渡り、革命戦に参加する。「敵中横断三百里」「亜細亜の曙」など大衆児童文学作品の評判が高い。アイヌ歌人違星北斗をモデルにした長編小説「民族」(昭15・11、同盟出版社)がある。この本は出版してすぐ発禁になったが、戦後になって改訂版の「コタンの娘」(昭22・1、新々社)を出した。

(木原直彦)

山名薫人 やまな くんじん 明31・1・1〜昭48・6・17(1898〜1973)〔短歌〕香川県生まれ。本名林蔵。幼少のころ来道し上川管内南富良野町金山に居住。貧しい生活環境に育ち、多感な少年期より文学書を読み、良寛、一茶に傾倒して歌俳両面を勉強した。たまたま富良野鳥沼小学校に教鞭をとり処女歌集「隠り沼」で注目を浴びた小田観螢を知り、その紹介で太田水穂の主宰する「潮音」に入社、薫都のペンネームで作品を発表。小田観螢と富良野周辺在住の歌人の参加を得て歌誌「霊光」を発刊して潮音派開拓の先鞭をつけた。昭和8年「潮音」同人となり北海タイムス歌壇の選者を務める。村会議員にも当選して政治的手腕を発揮したが、臨戦体制で自営の運送会社の統廃合により、大陸雄飛を決意して14年中国に渡り「大陸新報」歌壇選者となり活躍した。敗戦で故郷金山に引き揚げ推されて教育委員に当選した。丸裸で帰還した薫人は超俗洒脱な芸境に沈潜したが、また撫石庵の名で「金山石」の収集と鑑賞でもその声価を高くした。晩年は、往年の才華きらめく生彩は薄れてひたすら枯淡幽寂の歌境に深く味到しながら「潮音」の正調をつらぬいた。44年東京に転住。死後嗣子山名康郎が編集した遺歌集「山峡の湖」が刊行され、金山湖畔に歌碑が建立された。

(西川青涛)

山名康郎 やまな やすろう 大14・12・15〜(1925〜)〔短歌〕上川管内南富良野町生まれ。「潮音」創成期の歌人山名薫人は父。その影響からか少年期より作歌を始め、戦前から戦後にかけて「新墾」の最年少同人として華々しく活躍した。初期のころは浪漫主義的甘美な詠風であったが、新聞記者という社会性の強い職業についたこともあってか、次第に現実主義的な色合いを深めていった。昭和29年宗匠的な古い体質の結社制度に疑念を抱き「潮音」「新墾」の両誌を脱退、宮田益子、中城ふみ子らと、個性を尊重する短歌同人誌「凍土」を創刊、道内の若い波を糾合して気勢をあげた。しかし30年代になり、反写実を主潮とした前衛短歌運動の衣装性と、一部にみられたセクト的傾向に反発して作歌から遠ざかった。48年同人誌「潭」を創刊して作歌活動を復活。北海道の風土に培われた新しい詩風の形成を目指している。時代感覚と流派にとらわれぬ中立平衡感覚の持ち主としても貴重な存在である。中山周三らと北海道歌人会の設立を提言、その基礎づくりに献身し北海道歌壇の振興に大きな役割を果たしてきた。「潭」の編集発行人、「潮音」幹部同人、現代歌人協会員であり、また北海道新聞編集委員として「北の旅」「短歌時評」のほか、郷土誌、短歌総合誌などを舞台に幅広い活動をみせている。

(時田則雄)

山西秋村 やまにし しゅうそん 明31・8・17〜昭52・4・26(1898〜1977)〔俳句〕栃木県生まれ。本名作太郎。十勝管内音更町然別小四年の後、夜学通学。農業会役員、農協理事、民生委員、同委員長を務める。俳句は一二歳のとき北海タイムスに投句して始め、同志と「十勝野」を創刊。昭和11年ころより「樹海」松村巨湫に師事。幹部となる。また早川観谷を助けて「とかち」を創刊編集、後代表となる。NHKローカル放送の俳句選評を三年間続け、22年より「柏」矢田枯柏に師事し協力。34年早川観谷遺句集を同人らと出版、39年音更町に文化協会創立、会長として町民文芸「おとふけ」の発刊を手がけ、なお月刊「おとふけ」の俳句を指導した。〈さわやかや拭きころがされ病快し〉

(佐々木露舟)

山根対助 やまね たいすけ 昭5・8・16〜(1930〜)〔国文学研究〕網走管内興部町生まれ。北海道大学国文科大学院修。北海学園大学教授。「リラの会」を主宰し「観智院本『世俗諺文』本文と出典」(昭55)を刊行。昭和57年から59年までインドネシア大学日本研究科客員教授として日本文学講義。

(神谷忠孝)

山内壮夫 やまのうち たけお 明40・8・12〜昭50・4・11(1907〜1975)〔彫刻〕岩見沢市生まれ。東京高等工芸学校彫刻科卒。昭和4年国画会に初入選。7年国画会賞受賞。14年本郷新らとともに国画会を脱退、新制作派協会彫刻部の創設に参加した。戦争中札幌に疎開して戦後全道展発足に際し創立会員となった。39年石狩太美に建立された本庄陸男の文学碑「石狩川」の制作者。

(工藤欣弥)

山野康蔵 やまの やすぞう 明44・10〜昭47・4・16(1911〜1972)〔詩〕渡島管内砂原町生まれ。本名隆三。砂原小学校卒業後、建具職見習として函館に住みつき詩作に入る。昭和6年刊行の「北海道詩集」(函館、代表海老名礼太)に作品発表。海老名礼太に誘われ「北海詩戦」「北方の詩」や、木村茂雄主宰「北方詩族」の同人として、戦中、戦後は函館の詩誌「涛」や「だいある」の編集同人として活動。また戦後の一時期は創作に打ち込み、北海道新聞に短編小説を発表したこともあるが、36年ころから詩筆を折る。生活をじっと見つめ、そこから生まれる悲しみや喜びを呟く心には「庶民哲学」のような骨太いものがあった。戦後はそうした生活抒情に風土性をくまどらせた系列と、抵抗感を嚙み込んだ系列の作品を発表し続けた。詩集に「虚日の書」(涛の会)がある。

(堀井利雄)

山部栄子 やまべ えいこ 大14・10・13〜(1925〜)〔俳句〕函館市生まれ。旧制函館実修女学校卒。昭和44年より寺田京子に師事。「寒雷」「杉」等で学び、現在「にれ」「梓」同人。「寒雷」所属。昭和59年第二回梓賞受賞。

(木村敏男)

山村都ね尺（やまむらつねじやく）　明26・8・1～昭55・4・12（1893～1980）〔川柳〕滋賀県生まれ。本名常次郎。履物商の父の跡継ぎとして明治34年来函。函館市立宝小学校を出ると、修業のため上京。大正3年家業を継ぐ。江州商人の血をひく根っからの商人。その頃「近冬歌」と称し文学に親しみ、後、都ね尺と改めた。大正5年3月18日近冬歌、阿仏、六歩酔、洒落らと共に函館川柳会（後函館川柳社）を結成した函館川柳社の生みの親である。大正時代「講談雑誌」募集の川柳に投稿して、井上剣花坊選に天位（賞金五〇円）を獲得した。長い間函館川柳社の顧問として物心両面より支援した功績は大きい。〈御用船死ぬ人間に送る米〉

（鈴木青柳）

山村路子（やまむらみちこ）　大2・1・14～昭40・10・22（1913～1965）〔短歌〕小樽市生まれ。本名前野正代。庁立小樽高女卒。北海教育評論社に勤務。昭和22年「原始林」入会、35年原始林賞を受賞した。合同歌集に「原始林十人Ⅲ」（昭38）がある。

（猪股　泰）

山室　静（やまむろしずか）　明39・12・15～（1906～）〔詩、評論〕鳥取市生まれ。長野県佐久に育つ。東北大学美学科卒。北欧文学者。著書に「山室静著作集」、詩集「時間の外で」等がある。「至上律」にノヴァーリスの「マリア讃歌」、オエーレンシュレーガーの「デンマーク人の祖国の歌」、その他ヨルゲンセン、イプセンの作品など紹介。北海道には数度児童文学関係で来道、昭和24年夏、更科の案内で丸山薫、藤原定と道内を歩く。

（更科源蔵）

山本健吉（やまもとけんきち）　明40・4・26～（1907～）〔評論〕長崎県生まれ。父は石橋忍月。慶応大学国文科卒。早くから北海道の文学活動に注目し、「同人雑誌評」（昭27・1、「文学界」）で「札幌文学」「北海道文学」「朔風」をとりあげ「内地と異った風土に立ち、伝統に重圧を持たぬ土地柄が、ローカル性や新風を齎しそうな予感を我々に与える」と可能性を示唆し、「現代文学風土記・北海道の巻」（昭28・1、「群像」）を書いている。

（神谷忠孝）

山本　丞（やまもとじょう）　昭6・8・12～（1931～）〔詩〕渡島管内八雲町生まれ。駒沢大学卒。八雲高校在学中から詩作を始め、昭和23年「詩潮」（札幌）の道南支部「海炎」（長万部）に参加。「北海詩人」（長万部）、「道南文学」（森）を経て25年「だいある」創刊に加わり、同人として六三号廃刊（昭40）まで作品発表を続けた。一方34年「燠」「情緒」に、41年「詩の村」、43年「核」、46年「現代詩研究」（東京）、49年「帆pan」などに参加。詩集は昭和33年の処女詩集「夜の人」をはじめ「生と死と愛と」（昭33）、「破格の鼻」（昭38）、「家系のいらだち」（昭41、第四回北海道詩人賞）、「朝のいたみ」（昭46）、「生のしたたり」（昭49）、「荒野へ」（昭52）、「海のはなやぎ」（昭58）など八冊があり、それぞれ詩集としての中心主題と豊かな想像力を示す作品傾向を持っているが、詩風はじっくりと現実を凝視するところに特色がある。殊に病を得て初期のネオ・ロマンチシズムを超え生死のはざまを凝視してからの作品傾向は、巨視的に生の肯定への過程を遂げながら旺盛な筆力を見せている。また詩誌その他に発表した随想を集成したエッセー集に「黄昏の風と葬列」（昭54）と「わが隠沼より」（昭55）がある。日本現代詩人会員。北海道詩人協会員。北海道文学館理事。

（永井　浩）

山本千里（やまもとせんり）　昭3・10・10～（1928～）〔俳句〕渡島管内木古内町生まれ。昭和43年「アカシヤ」、44年「風土」入会後同人。46年「丹精」素玄集に投句。48年「壺」入会後同人。木古内に「いさり火俳句会」を結成、会報「いさり火」を発行。59年「葦牙」に投句。

（金谷信夫）

山本武雄（やまもとたけお）　明38・1・29～昭56・4・29（1905～1981）〔評論〕秋田県生まれ。横手中学卒、昭和5年から釧路に住む。戦前に山田仁の筆名でマルキシズムによった評論を多く書いた。代表作に「風流抹殺論」（昭10）。32年から40年まで釧路市長。市政担当時代を回顧した著書「航跡二十年」（昭50）がある。「北海道文学」同人であった。

（鳥居省三）

山本武雄（やまもとたけお）　大2・1・23～昭40・11・19（1913～1965）〔短歌〕深川市生まれ。昭和12年「新墾」入社。翌年「潮音」同人。鬼川俊蔵の歌会にも参加。23年新墾深川支部を創設し後進を指導。叙情豊かな生活詠が新鮮であった。

（水平利夫）

山本太郎（やまもとたろう）　大14・11・8～（1925～）〔詩〕東京生まれ。東京大学独文科卒。法政大学教授。「歴程」同人。昭和29年の処女詩集「歩行者の祈りの唄」、次いで「ゴリラ」（高村光太郎賞）により戦後第二期の旗頭となる。「覇王紀」（読売文学賞）ほか膨大な著作がある。38年道詩人協会詩祭に講演者として招かれて以来しばしば来道、本道の詩人たちと交友を深めた。日本文芸家協会、日本ペンクラブ会員。

（河邨文一郎）

山本友一（やまもともいち）　明43・3・7～（1910～）〔短歌〕福島市生まれ。旧制福島中学在学中に歌誌「虎杖」創刊。昭和4年松村英一に惹かれ「国民文学」入社。28年「地中海」創刊に参画。日中戦争で一五年間を召集兵あるいは現地の鉄道職員として戦乱を体験。歌には放胆闊達な中に東洋の倫理が根を下ろす。来道歌の多数が36年、37年に発表された。歌集は「北窓」「布雲」「黄衣抄」「万春」「九歌」「石牛志」「長謠」などがある。

（村井　宏）

山本洋子（やまもとようこ）　昭21・12・21～（1946～）〔詩〕札幌市生まれ。詩集「山本洋子詩集」「淵」。一九歳まではペンネーム八木ひろ子。高校のころにアポリネール、ヘルダーリンの影響を受ける。「木星」同人。

（鷲谷峰雄）

山本露滴（やまもとろてき）　明17・10・1～大5・12・1（1884～1916）〔短歌、詩、新聞記者〕大分県生まれ。本名喜市郎。明治29年来道し、幾春別の小学校に入った。庁立札幌中学校退学。札幌の電信技術伝習所卒業。34年に上京して落合直文に認められ、岩野泡鳴を識る。36年に帰道して北鳴新報社を皮切りに新聞記者生活に入り、文化、文学人と交渉を深め紙面に新文芸の生気をもたらした。41年7月に処女詩歌集「金盃」（東京、美術評論文社）を上梓、本道の風土の特色をよく捉えたものと注目を浴びた。翌年札幌で「実業之北海」を創刊したが、この時期に来遊中の岩野泡鳴と旧交をあたため、泡鳴の代表作「放浪」に描かれる。明治43年から大正5年までは樺太に渡ってジャーナリストとして活躍した。露滴が提唱した〝冷的文芸〟は南方に対する北方文学の意であり、北海道文学論の嚆矢といえる。東京で没したが泡鳴の編集になる「山本露滴遺稿」（大6・2、山本美喜雄編集発行）があって人と作品を伝えている。

（木原直彦）

山谷三郎（やまさんろう）　明35・8・20～（1902～）〔俳句〕小樽市生まれ。大正12年「時雨」誌友となり、戦前「水声」「広場」「天香」、戦後は「雲母」「秋」「葦牙」「氷下魚」に投句したが、現在は「秋」「葦牙」同人。「秋」小樽支部の指導的立場にもあり、小樽俳句協会の重要なメンバー。昭和58年小樽教育長賞受賞。現代俳句協会員。

（島　恒人）

鑪田研一（やまたけんいち）　明25・8・16～昭44・1・28（1892～1969）〔評論、小説〕山口県生まれ。別号芳花、本名徳座研一。神戸中央神学校卒業。農民文学で活躍したほか「有島武郎」など伝記小説の分野も開拓した。短編小説「酪農」は釧路管内弟子屈町を舞台にしており、主人公の山科源三は詩人の更科源蔵がモデルである。書き下ろし「農民文学十人集」（昭14・7、中央公論社）に収められて

いる。

（木原直彦）

ゆ

結城国足（ゆうきくにたる） 寛政12～明21・11・14（1800～1888）〔短歌〕福島県生まれ。通称は平左衛門。会津藩士で代々百石の家柄。藩校日新館で沢田名垂（さたなたり）に歌を学ぶ。明治3年9月斗南藩の五戸町に移住、和歌教授所を開く。5年5月長男繁治の開拓使出仕に伴い、札幌に転住、札樽の人たちに歌を教えた。札幌八景を詠んだ歌もあり、詠歌は二万余首に及ぶという。札幌歌壇の草分け的な存在である。

（中山周三）

柚木衆三（ゆきしゅうぞう） 昭5・1・5～昭54・10・22（1930～1979）〔詩、評論〕留萌管内増毛町生まれ。本名川浪武男。札幌逓信講習所卒、増毛郵便局に勤務。講習所時代より詩作を行い、昭和26年処女詩集「うたごえは風に燃えて」を出す。27年より滝川の「流域」、旭川の「風土」「朔風」等の同人誌に参加。「朔風」に載せた評論「郷土文学の新しい視点」で注目を受ける。その後「留萌文学」（30号まで「PEN」）、「全逓北海道文学」「北海道文学」、詩誌「未完成」、山岳会誌「未踏」等を中心に詩、創作、評論、エッセーを精力的に発表。54年詩集「暑寒・わが青春の山」と、創作評論集「白い縦走路」を自費出版するが急逝。没後「柚木衆三評論集」刊行される。ほかにライフワークとして「全逓北海道文学運動史覚え書」がある。

（山下和章）

雪田麻紗（ゆきたまさ） 昭4・2・12～（1929～）〔俳句〕札幌市生まれ。本名敏子。昭和38年に札幌へ転居した細谷源二や、川端麟太などと出会い作句。40年「氷原帯」に入会。42年同人。43年氷原帯第六回風鑾賞、48年第二回細谷源二賞、50年氷原帯賞を受賞する。

（辻協系一）

行友政一（ゆきともまさいち） 明33・2・28～昭48・6・18（1900～1973）〔評論〕函館市生まれ。函館商業学校卒。大正9年函館海峡詩社に加わり同人誌「海峡」で短歌活動。戦後宮崎郁雨、阿部たつをらと、あらためて総合文化誌「海峡」としてこれを復刊、以後数次の休復刊をくり返しながら、その発行編集責任者として昭和48年の終刊まで通巻一五五号の発刊に尽力した。また函館啄木会などにも関与し、昭和24年には市議会議員を務め文化活動に寄与した。

（安東璋二）

雪原立樹（ゆきはらたつき） 昭3・3・5～（1928～）〔詩〕富良野市生まれ。本名野崎末隆。詩誌「乱気流」主宰。ペーソスとユーモアで日常を描きながら鋭い風刺で社会悪を切るところに特色がある。「雪原立樹詩集」（昭60・2、芸風書院）がある。

（大広行雄）

譲原昌子（ゆずりはらまさこ） 明44・11・14～昭24・1・12（1911～1949）〔小説〕戸籍上は茨城県の生まれだが、自筆略歴によると〝空知の国〟生まれ。本名船橋きよの。筆名はほかに鷲津ゆき。大正6年に樺太へ渡り、落合小学校、豊原高等女学校を卒業。小学校教員のかたわら雑誌「樺太」などに作品を発表。「朔北の闘ひ」（昭14・2、「文芸首都」）が芥川賞の宇野浩二の候補カードにのる。昭和16年5月に上京し「抒情歌」（昭16・3、「早稲田文学」）と、「故郷の岸」（昭18・2、「新作家」）が芥川賞候補に、また「泉」（昭18・6、同）が樋口一葉賞の候補になる。戦後の21年11月に処女短編集「朔北の闘ひ」（札幌、篁書房）が出版され、「死なない蛸」「朝鮮ヤキ」などを残して清瀬の東京療養所で没した。遺稿集に「故郷の岸」（昭60・3、同成社）があるが、故郷の樺太を舞台にした作品が多い。

（木原直彦）

湯田克衛（ゆだかつえい） 昭10・1・7～（1935～）〔詩〕留萌市生まれ。留萌高校を経て法政大学（通信課程）卒。中学教師のかたわら詩作をはじめ、昭和30年留萌ペンクラブ設立と同時に会員となり「PEN」（のち「留萌文学」と改題）に詩、小説を発表。詩誌「未完成」（留萌）を創刊し編集にあたる。「情緒」（旭川）同人。42年第一詩集「沈黙の層」、54年第二詩集「苦痛の海」を刊行。戯曲「風になりたい鳥のように」（昭54）、「波涛の海」（昭56）を留萌戯曲研究会によって上演した。留萌ペンクラブ事務局長として「留萌文学」の編集、発行にあたる。

（佐々木逸郎）

湯本恵美子（ゆもとえみこ） 昭4・3・3～（1929～）〔短歌〕小樽市生まれ。湯本竜夫人。昭和43年「原始林」に入社、次いで「鴉族」に所属した。50年原始林社田辺賞、鴉族社新田寛賞、55年度原始林賞を受賞。59年6月に第一歌集「忍灯」を出版した。夫妻そろっての原始林賞受賞と、歌集の同時出版は歌壇ではめずらしい。北海道歌人会、日本歌人クラブ会員。

（北川頼子）

湯本　竜（ゆもとりゅう） 大11・10・22～（1922～）〔短歌〕小樽市生まれ。本名竜二。昭和17年応召、終戦後シベリアで抑留生活の辛酸をなめ23年帰還。結核療養の後自営業。43年「原始林」入社。46年原始林田辺賞、55年原始林賞受賞。水害、倒産、火災と会社経営も波乱つづきだったが、常に強靱に立ち直る。小事にこだわらない骨太さが詠風にも及び、なお若々しいロマンがある。夫人恵美子と同時期（昭59）に別個の歌集「海光」を上梓。

（村井　宏）

よ

横井みつる（よこいみつる） 大6・11・25～（1917～）〔短歌〕本名弼。室蘭商業卒。北海道拓殖銀行を定年退職したあと、商社の経理担当。昭和12年1月工藤仙二らと室蘭を中心とした道南地域の口語短歌発展の推進力として、炭かすの街詩社を結成、歌誌「炭かすの街」を創刊。戦後、炭光任、桂一郎らの「平行線」に参加。42年札幌市に転住。44年3月「青空」の札幌支部会員を軸とする口語歌誌「新短歌時代」の創刊に参加したが、6カ月後の同年9月同誌から別れ、吉田秋陽、川村弥生、名島俊子、草路れい、畑沢草羽らと藻岩嶺社を結成して「藻岩嶺」を創刊、編集を担当、七号以降畑沢にバトンタッチし、間もなく口語短歌から遠ざかった。現在「由紀坐左」編集委員。「原始林」「ぬはり」の同人。編著書に、「炭かすの街」編集同人で17年3月二三歳で病死した清水不泣の遺歌集「海鳴り」（昭53）がある。

（田村哲三）

横尾幹男（よこおみきお） 昭13・6・4～（1938～）〔短歌〕札幌市生まれ。昭和33年高校卒業後国鉄に就職。高校時代より作歌をはじめ35年「辛夷」、ついで36年「潮音」入社。39年第六回辛夷賞受賞。57年第一歌集「天をゆく風」（雁書館）発刊。厳寒の地に一途にうたう自然と人間の作が高い評価をうけた。現在「潮音」同人、「潭」同人、「辛夷」旭川支社の代表者、運営委員、選者。旭川刑務所受刑者短歌指導担当。

（大塚陽子）

横田庄八（よこたしょうはち） 明38・2・15～（1905～）〔短歌〕石狩管内石狩町生まれ。昭和5年より徳島中、札幌一中教諭、32年より栗山、釧路、札幌の高校長を歴任。現在「原始林」、「橄欖」同人。札幌刑務所篤志面接委員で短歌を指導。新琴似短歌会長を務める。54年に歌集「はまなすの丘」、57年「遮断緑地」、57年に評伝「思い出の島木健作」がある。少年時代は「文章倶楽部」「明星」等で活躍、長年教職にあったため、教育を通しての眼ざしも温かく深い。

（宮西頼母）

横地妙子 よこち たえこ　昭8・8・6～(1933～)〔俳句〕網走市生まれ。昭和32年「氷下魚」に入会、伊藤凍魚に師事。のち「えぞにう」入会、現在同人幹事。「壺」に所属したあと岸田稚魚の「琅玕」に入会、現在同人。　(鈴木青光)

横道秀川 よこみち しゅうせん　明43・2・22～(1910～)〔俳句〕岩見沢市生まれ。本名英雄。北海道帝国大学工学部卒。北海道庁、北海道開発局等を経て北大工学部教授を務めた。旧制中学時代から「枯野」系俳人であった長兄の影響により句作に興味を覚えて長谷川零餘子来道の歓迎句会に出席。その後学業、公務の余暇に句作断続。昭和22年知友のすすめで「枯野」を継承した「水明」に投じ、零餘子未亡人長谷川かな女に師事し、「俳句は地球の広さでありたい」というかな女の主張に共鳴する。このころ美唄在住の「水明」同人正岡陽炎女を知る。昭和38年同人となる。土木試験所時代に職場の「堤影句会」を創り、また「札幌水明句会」を発足させ句会中心の活動を続ける。54年「雪嶺」創刊主宰。45年第一句集「青き繁殖」、51年第二句集「銀杏並木」、55年第三句集「寒銀河」刊行。昭和19年土木学会賞、38年水明賞、46年北海道新聞文化賞等受賞。俳人協会員。現代俳句協会員。〈吼ゆるものなく落日の流氷原〉〔寒銀河〕　句集。昭和55年7月雪嶺発行所刊。51年から55年まで約五年間の三百余句を収める。上梓の55年は主宰誌「雪嶺」創刊一周年で、また著者の古稀にもあたるので、実作者としての新しい出発を確認する決意で刊行された。題名も、主宰誌名と呼応して北方的な趣があり、その自然観、社会観を交えた哀歓を映している。　(木村敏男)

横光　晃 よこみつ あきら　昭5・7・1～(1930～)〔シナリオ〕札幌市生まれ。本名山根富男。空知農業学校卒。雪印種苗勤務ののち、昭和27年札幌放送劇団一期生として入団。NHK札幌放送局専属脚本家となる。放送劇「サガレンの花」「地底」で文化庁芸術祭奨励賞受賞。上京してフリーとなり主としてテレビドラマに活躍している。著書にドラマを小説化した「オランダおいね」「薩摩おごじょ」ほか。日本放送作家協会常務理事。　(佐々木逸郎)

横光利一 よこみつ りいち　明31・3・17～昭22・12・30(1898～1947)〔小説〕福島県生まれ。早稲田大学中退。大正12年「文芸春秋」同人となる。翌年10月「文芸時代」創刊に参加し、新感覚派文学運動の中心となる。昭和11年2月から半年、ヨーロッパに滞在。13年6月川端康成とともに講演会と座談会に招かれて来道し、北大での講演「ヨーロッパと日本」は「北海道帝国大学新聞」(昭13・6・28)に発表されている。　(神谷忠孝)

横山琴子 よこやま ことこ　大4・4・4～(1915～)〔短歌〕札幌市生まれ。札幌市立高女卒。札幌医大附属病院に勤務し48年退職。昭和22年井戸川美和子の「つどゐ」に加わり指導を受ける。24年「新墾」入社、43年新墾賞を受賞。同誌選者も務める。幹部同人。　(坪川美智子)

横山白虹 よこやま はくこう　明32・11・8～昭58・11・18(1899～1983)〔俳句〕東京生まれ。本名建夫。九州帝大卒の外科医。大正11年「天の川」(吉岡禅寺洞主宰)に参加、のち編集長。昭和12年より「自鳴鐘」を創刊主宰して新興俳句運動の一翼を担う。48年より現代俳句協会長に就任。57年同協会北海道俳句大会出席のため来札。句集に「海堡」(昭13、紗羅書店)のほか「空港」「横山白虹句集」がある。　(辻脇系一)

横山瑞枝 よこやま みずえ　昭6・11・29～(1931～)〔俳句〕十勝管内清水町生まれ。帯広高等女学校中退。家業の農業に従事するかたわら昭和36年より「あきあじ」に依り作句。現在「柏林」「杉」所属、「にれ」同人。43年あきあじ進歩賞受賞。54年第一回にれ賞受賞。

横山芳介 よこやま よしすけ　明24・5・8～昭13・1・30(1891～1938)〔詩〕東京生まれ。明治43年9月北海道大学予科入学。在学中の明治45年恵迪寮歌「都ぞ弥生」を作詞、日本の寮歌のなかで名歌として親しまれ愛唱されている。作曲は赤木顕次(一学年上級、小樽出身)。大正6年卒業後砂川土地調査員を勤めたあと7年静岡県農会技師、静岡県小作官として県下の農業問題のために尽くす。昭和32年9月「都ぞ弥生」歌碑が恵迪寮南側エルム林内に建てられた。　(東　延江)

与謝野晶子 よさの あきこ　明11・12・7～昭17・5・29(1880～1942)〔短歌、詩〕大阪(堺市)生まれ。旧姓鳳。昭和6年5月夫の寛と共に来道。北海道大学に招かれ寛と講演。乞われて一〇回ほど学校、団体で講演し、札幌放送局から「わたくしの歌を作る心持」と題して放送した。また来道記念に函館図書館が主催、棒二森屋デパートで「与謝野寛、晶子全著書展覧会」が一週間開かれた。在道中、天候に恵まれなかったが、北海道の風光を楽しんで作歌、「北遊詠草」一七三首が「冬柏」に発表された。昭和53年洞爺観光協会の手で湖畔に歌碑が建立された。〈山畑にしら雲ほどのかげらふの立ちて洞爺の梅さくら咲く〉　(竹田てつを)

与謝野鉄幹 よさの てつかん　明6・2・26～昭10・3・26(1873～1935)〔短歌、詩〕京都市外岡崎村生まれ。本名寛。昭和6年5月22日妻晶子を伴い、連絡船松前丸で来道、函館、小樽、札幌、定山渓、真駒内、旭川、層雲峡、白老、登別温泉、室蘭、洞爺湖温泉と歴巡し、曽識の友人と数多く逢って6月7日函館から退道した。目的は北海道大学文武会での講演。さらに札幌放送局から「柿本人麿と和泉式部」と題して講演放送をした。滞在中景観と作歌を楽しみ「北遊詠草」一七一首を、主宰する「冬柏」第二巻第七号に発表した。昭和32年函館市立待岬に歌碑が建立された。〈浜菊を郁雨が引きて根に添する立待岬の岩かげの土〉　(西村一平)

吉井　勇 よしい いさむ　明19・10・8～昭35・11・19(1886～1960)〔短歌〕京都生まれ。明治38年与謝野寛主宰の新詩社に入り、木下杢太郎、白秋、啄木、鷗外らと知り「明星」に短歌や新体詩を発表。41年脱退して独自の歌風に終始、遊蕩歌人などといわれた。処女歌集「酒ほがい」(明43)。来道は昭和30年6月で、北海道新聞に短歌を発表、HBCラジオで山下秀之助と対談放送。札幌市大通に、有名な札幌のリラの歌の歌碑が建っている。　(西村一平)

吉井民子 よしい たみこ　大元・12・3～(1912～)〔短歌〕函館市生まれ。本名多美。函館大谷高女卒。阿部たつをに師事。昭和26年「無風帯」に入会する。現在「あけび」「せゝらぎ」同人。歌集「ふたりしづか」のほか著書に昭和初期の函館風俗を描いた随筆集「質屋の蔵」がある。　(宮田千恵)

吉植庄亮 よしうえ しょうりょう　明17・7・3～昭33・12・7(1884～1958)〔短歌〕千葉県生まれ。大正3年東京大学法科卒。中央新聞記者を経て印旛沼開墾事業を達成。代議士当選三回。大正11年に「橄欖」を創刊し「寂光」「くさはら」「開墾」「稲の花粉」等九編の歌集と、「馬の散歩」ほか数冊の随筆集を残す。歌風は薫園に師事し、白秋、夕暮の友情に影響をもつが、つねに人間と生活を追い、その闊達自在な技法は無類である。草創期の本道新聞界を開拓した父庄一郎は和(空知管内北竜町)の開拓者で、庄亮の随筆集「百姓記」にそのことが描かれている。大正14年に北原白秋と共に樺太、北海道を旅し、和にも立ち寄った。北海道詠も多い。　(土蔵培人)

吉岡一郎 よしおか いちろう　明39・3・8～昭60・1・11(1906～1985)〔短歌〕網走市生まれ。大正15年札幌師範学校卒。釧

路、小樽、札幌各市の小学校教員。昭和15年河出書房勤務。21年より札幌で出版業柏葉書院経営。のち東京に居住。歌集出版が多い。大正末期より作歌「創作」に所属。牧水夫妻来道の際案内役をつとめた。（川村涛人）

吉岡　康　昭8・3・8～（1933～）〔小説〕空知管内由仁町生まれ。本名荒川憲男。昭和29年北海道学芸大学岩見沢分校入学。安住誠悦教授に師事。同人誌「遍歴文学」を発刊し処女作を発表したが六号で廃刊。39年留萌ペンクラブ入会、「留萌文学」に「樽の中を駆ける狐」「牛が歩き出す時」を発表。47年「海からの声」で第七回北海道新聞文学賞佳作、51年「遠ざかる夏」で北方ジャーナル同人誌賞をそれぞれ受賞。中学校教員。（東野ひろ子）

吉岡秋帆影　明40・11・21～（1907～）〔俳句〕愛媛県生まれ。本名宗次郎。日本大学専門部中退。酒商。大正8年に渡道、北見市に居住する。昭和4年ころ入院中に名塩吞空より手ほどきを受け句作。「ホトトギス」「木の芽」などに投句。「阿寒」創刊と共に参加。課題句選者。昭和18年北海道で最初のホトトギス巻頭となる。29年ホトトギス同人。現在、北海道ホトトギス会顧問、北見俳協会長、北見ホトトギス会長など。（嶋田一歩）

吉岡牧村　明39・5・6～昭54・5・15（1906～1979）〔短歌〕後志管内島牧村生まれ。本名金十郎。函館逓信講習所卒。函館郵便局を経て古書店を経営。昭和8年岩桧葉短歌会に参加。10年「アララギ」、21年「羊蹄」入会。56年夫人により遺歌集「岩桧葉」刊行。（笹原登喜雄）

吉川英治　明25・8・11～昭37・9・7（1892～1962）〔小説〕神奈川県生まれ。「宮本武蔵」「新・平家物語」「私本太平記」など、大衆文壇の雄として知られる。「函館病院」（昭7・2、「中央公論」）「北海道文学全集」12巻収）は、函館戦争時の、赤十字病院の先駆ともいうべき素材を描く。（小笠原克）

吉川金三　明37・2～昭50・3（1904～1975）〔短歌〕函館市生まれ。本名金蔵。高小卒。菓子舗経営を振り出しに職を転々。昭和43年帰郷まで全道各地で宿痾療養。大正14年「アララギ」入会。茂吉、文明に師事。「青杉」「竜胆」「岩桧葉」「羊蹄」の後「北海道アララギ」会員。合同歌集「春の潮」がある。（小国孝徳）

吉川澄江　明45・3・5～昭59・1・20（1912～1984）〔短歌〕小樽市生まれ。昭和4年小樽市立女学校補習科卒。11年吉川泰夫と結婚。夫の任地に従って標茶、帯広等各地に住む。35年「原始林」に入会した。42年夫の定年により小樽に定住する。小樽聖公会員、小樽友の会会員。58年6月歌集「蠟の灯」を出版。（北川頼子）

吉川東洋　明40・8・28～（1907～）〔詩、作詞〕帯広市生まれ。本名静夫。駒沢大学卒。昭和9年作詞家倶楽部を帯広に設立、十勝毎日新聞に盛んに作品を発表、のち上京、作詞家となる。帯広時代詩誌「詩酋長」を編集、札幌の「牧羊」二六、二九号などにも詩を発表している。（小松瑛子）

吉川泰夫　明39・12・14～（1906～）〔短歌〕長崎県生まれ。北海道大学農学部卒。昭和26年より深川、帯広等の各地農業高校長を歴任。36年作歌をはじめ「原始林」に入社した。公立高校退職の後は、46年私立北星学園余市高校長、51年退職。小樽聖公会員。57年「ルーズバンの研究」により、勲四等旭日小綬章を受章した。（北川頼子）

吉川洋司　大6・3・9～昭49・2・16（1917～1974）〔詩〕帯広市生まれ。昭和35年12月札幌に詩酋長社を設立、詩誌「詩酋長」を発刊。同人は帯広時代の詩友松原良輝と札幌の詩人鷲巣繁

男の三人。帯広時代は兄吉川東洋と詩作を共にしていたものと思われる。昭和45年「日本未来派」に所属、戦争の体験をうたう詩人で、人間存在の哀しみを滅んでいく花や草に託した詩が多い。（小松瑛子）

吉沢進吉　昭15・4・12～（1940～）〔小説〕紋別市生まれ。天塩羽幌砿山事務、利尻高校、美瑛高校を経て、旭川工業高校国語、体育教諭。「冬涛」編集者となり「汐なり」「川鳥」「築別炭砿」「炭砿離職者」「事故者の影」などの作品がある。（佐藤喜一）

吉田一穂　明31・8・15～昭48・3・1（1898～1973）〔詩、文明批評〕渡島管内木古内町生まれ。本名由雄。生家は網元で積丹半島の古平町で少年期を送った。大正7年早稲田大学高等予科に進学。横光利一、佐藤一英らと交遊。「幽暗」創刊号に〈この愁ひ海に死なまし渚辺のたゆたふ波にきづけおくつき〉を発表。浪漫派の歌人として出発。大正9年に生家が没落し学費が絶たれる。早大英文科の講義にも幻滅を抱き、中退。詩人として自立を決意。片山伸の世話で童謡、童話などの売文生活に入った。「楽園」「詩聖」「日本詩人」で活躍。13年童謡集「海の人形」、15年詩集「海の聖母」刊行。昭和2年1月既成詩壇に挑戦して「羅甸区」を創刊。5年「故園の書」（現代の芸術と批評叢書13）刊行。昭和7年10月「新詩論」創刊。ポオ、ランボオ、マラルメ等を特集したが、北原白秋と対立し三号で廃刊。11年「稗子伝」、16年詩論集「黒潮回帰」刊行。戦時中は赤貧に耐え、ミリタリズムの嵐に抵抗。絶対詩の原理を探究。ついに昭和19年10月ロゴ・ピーアの極限を告知する「荒野の夢の彷徨圏から」（「詩研究」）を創造。23年「未来者」、33年詩論集「古代緑地」刊行。精神史的自叙伝「海の思想」で、北海の裔であり、絶対的自由を実存する純粋詩人であることを誇っている。〈磁針は何故に北を指し、候鳥は何故に北に帰るのか？〉を中心に、独自の宇宙論を構築。精神の風土としての北海道の独立を主張、現代詩の方法的制覇を志向。詩神に捧げた孤高の生涯は、北方の詩精神の典型として感化を与えた。日本のマラルメと称され、昭和詩史の北極星に位置し不滅の栄光を放っている。詩誌「Critic」「反世界」主宰。没後、「定本吉田一穂全集」全三巻が刊行された。白鳥古丹と呼んで、積丹の海郷を愛し、古平小唄、古平高校歌を残した。（千葉宣一）

吉田えいじ　大14・3・10～（1925～）〔俳句〕空知管内新十津川町生まれ。本名英治。北海道大学医専卒。開業医。昭和30年「アカシヤ」入会。36年同百花集同人。46年同木理集（無鑑査）同人。句集に「煮凝」あり。俳人協会員。54年滝川市文化功労賞受賞。（岡澤康司）

吉田乙丸　明41・7・29～（1908～）〔短歌〕新潟県生まれ。昭和初年村役場に勤めながら作歌をはじめ、2年から相馬御風に師事。7年兄の住む北海道に移り三菱美唄鉱業所に勤め、8年「国民文学」に入社、半田良平の選を受ける。20年植松寿樹を主宰とする「沃野」に参加。22年美唄鉱業所の文化活動講師に山下秀之助を迎え指導を受けたのを契機として「原始林」に入会。28年激動する労働運動の中で、揺れ動く良識派の苦悩の所産「波動」（100首）をもって「原始林十人Ⅱ」に参加。その後、生活環境に安定を得、生来の柔軟な抒情的資質に深化を加えた。定年退職の38年上京して日新化工幹部社員として勤務するかたわら、東京原始林社の世話人を務めている。現在「原始林」在京選者。

〔奥多摩〕歌集。原始林叢書第五五編。柏葉書院。昭和47年5月刊。昭和2年歌誌「冷光」に作品を発表するかたわら、相馬御風に師事した初期作品から、「国民文学」「沃野」を経て「原始林」に入社し、38年三菱鉱業を定年退職

後上京して府中市武蔵台に定住（46年）するまで、四十数年間の作品を収める著者の第一歌集。一貫して穏和な人間味あふれる平明な詠風で、著者の誠実、真摯な人柄がうかがわれる。序文山下秀之助。（田村哲三）

吉田牡蛎彦（よしだかきひこ）　明41・11・16～昭55・3・30（1908～1980）〔俳句〕釧路管内厚岸町生まれ。本名栄吉。国学院大学中退。役場勤務、商業など波乱の生涯。昭和12年「馬酔木」以来、「野火」「氷下魚」「アカシヤ」同人。21年厚岸アイカップ吟社を興す。俳人協会員。（鈴木青光）

吉田絃二郎（よしだげんじろう）　明19・11・24～昭31・4・21（1886～1956）〔小説、劇作、随筆〕佐賀県生まれ。本名源次郎。早稲田大学英文科卒。代表作に「島の秋」「太陽の涯」「小鳥の来る日」など。旅と人生を愛した作家で幾度か来道している。小説「海峡の夜」や随筆「楡の都」「北海道の旅」などで北海道を語っているが、「静日夜」のなかの〝倶知安のN〟は「監獄部屋」の作者沼田流人のこと。本道を舞台にした長編には少年小説「栗の花の咲くころ」（大15・7、実業之日本社）と「春の逃げ水」（昭9・12、新潮社）とがある。（木原直彦）

吉田秋陽（よしだしゅうよう）　昭4・10・11～（1929～）〔短歌〕後志管内寿都町生まれ。本名秋男。昭和19年札幌逓信講習所卒。32年頃より作歌。歌棄で荒谷七生に師事。「北方」に所属。東京の「現代短歌」、小樽の「青空」を経て、44年第二次「新短歌時代」創刊に参画。その年「新短歌時代」を去り「藻岩嶺」創刊に参加。のち「北土」と改題。伊東音次郎、並木凡平時代の口語歌壇史を執筆、また昭和43年以来北海道歌人会幹事を務めるなど道内口語歌壇の中堅として活躍。「新短歌人連盟」「芸術と自由」「生活ロマン」「札幌歌話会」「葦の会」等広い範囲で活動を続けている。59年畑沢草羽病気入院後「北土」編集責任者となる。歌集に「どんぐい」がある。〈干からびてねじれた尾ひれさかさまに助宗鱈は雪の音きく〉（畑沢草羽）

吉田武三（よしだたけぞう）　明35～昭53・6・1（1902～1978）〔小説、歴史研究〕東京生まれ。正則英語学校卒。松竹映画に入社。昭和30年代までに小説集八冊を刊行。松浦武四郎に関しては「評伝松浦武四郎」（昭38）、「拾遺松浦武四郎」（昭39）、「増補松浦武四郎」（昭41）、「定本松浦武四郎」（昭47）、「松浦武四郎紀行集」（3巻、昭50～52）などがある。その他「北の風土記」（昭50）など。（小野規矩夫）

吉田徳夫（よしだとくお）　昭5・6・15～（1930～）〔詩〕宗谷管内歌登町生まれ。野幌機農学校を経て茨城県の旧制第一高等学校自活農場に勤務。釧路の鶴居中学校代用教員をふりだしに教員生活に入り、宗谷管内で北教組の一員として教育闘争にとりくむ。昭和25年ころから詩作をはじめ友田多喜雄と交わる。「感情以后」（釧路）、「ＡＴＯＭ」（愛別）、「民族詩人」（東京）同人を経て38年堀越義三の「詩の村」（札幌）創刊に参加、同人となる。昭和43年学力テスト反対闘争や反戦ストライキのなかで書いた作品を中心に第一詩集「返信」を刊行。以後の詩集に利尻島での教員体験と、稚内での特殊学級担任体験にもとづいた「歌う季節」（昭45）、同じく稚内での教師生活をみつめた「風の相」（昭46）などがある。（佐々木逸郎）

吉田十四雄（よしだとしお）　明40・2・15～昭57・8・11（1907～1982）〔小説〕三重県生まれ。北海道立十勝農業学校（現帯広農業高校）獣医科卒。大正10年十勝の開墾地に入植していた父のところで一四歳から住む。卒業後は根室の牧場や十勝の開墾地で働き、昭和7年から二年間、岐阜、名古屋の孵卵場に勤め、再び帯広に戻って孵卵事業に従事。昭和12年に北見郡農会に入り、その頃から全国農民文

学作家の組織する雑誌「記録」の同人になり農民ものを書きはじめる。昭和12年12月刊の鍵山博史編「農民小説集収穫」（日本公論社）に収録された「流離」は、農民への同感を示した作品として注目され出世作となった。「百姓記」（昭15・2、牧野書店）は十勝を舞台にした開拓小説で、北海タイムス（現北海道新聞）の第一回文化賞を受賞した。その後「百姓記・続」（昭17・1、牧野書店）を出し、戦後は北海道新聞社に入社、「農業北海道」編集に力を注ぐかたわら、「幾山河」（昭22、白都書房）を刊行。「新・百姓記」（昭38・6～42・12、「農業北海道」55回）は戦前の「百姓記」に手を加えたものだが、さらに徹底的に手を加えて四八〇〇枚に及ぶ大河小説「人間の土地」八巻（昭53～56、農山漁村文化協会）を完結させ、半世紀も持続した農民文学魂の健全ぶりを示した。「人間の土地」は、56年第一五回北海道新聞文学賞と札幌市民芸術賞を受賞している。（神谷忠孝）

吉田典子（よしだのりこ）　昭11・10・11～（1936～）〔小説〕函館市生まれ。北海道学芸大学函館分校卒。七年間小学校教員勤務。作品に「おくりもの」（昭40、「表現」）、「羽織」（昭56、同）。「北海道新鋭集」7収）、「暗い廊下」（昭59、「青の時代」）がある。函館文学学校事務局長。（神谷忠孝）

吉田寿人（よしだひさと）　大5・6・1～（1916～）〔短歌〕石狩管内浜益村生まれ。小樽中学卒。東京都で訓導をし、浜益村農業委員会事務局長などを務める。小樽中学校時代に小田観螢の薫陶を受け、昭和24年「新墾」に入社して本格的な作歌活動に入る。44年に新墾賞を受賞。「新墾」の誌上には欠詠することなく精進を重ね、現在幹部同人。歌風は写実を重んじながらの重層的イメージを技巧としている。（足立敏彦）

吉田秀和（よしだひでかず）　大2・9・23～（1913～）〔音楽〕東京生まれ。東京大学仏文科卒。戦後、精力的に音楽評論活動を続ける。父親の転勤で中学時代を小樽（旧市立中学）で過ごす。自伝抄を収めた「私の時間」など著書多数。「吉田秀和全集」（全10巻）で大仏次郎賞を受賞。（西村　信）

吉田福太郎（よしだふくたろう）　昭3・12・6～（1928～）〔短歌〕芦別市生まれ。札幌鉄道教習所卒。昭和18年国鉄に就職してから蒸気機関車、ディーゼル機関車の運転に従事、組合の活動家でもあった。28年より新聞歌壇投稿を機に作歌。翌年「原始林」に入社、渡辺直吉の指導を受ける。政治にも目を向け、骨っぽく自己の職業への愛着を詠う。機関車人合同歌集「走行粁」にも参加。54年に岩見沢文化連盟賞を受賞。（村井　宏）

吉田正俊（よしだまさとし）　明35・4・30～（1902～）〔短歌〕福井市生まれ。三高を経て東京大学法学部卒。大正14年「アララギ」入会、土屋文明に師事。現在「アララギ」の選者ならびに発行人。昭和16年の処女歌集「天沼」は「アララギ」の中に一時期を作る。ほかに「朱花片」「黄芭集」「くさぐさの歌」（読売文学賞）、「霜ふる土」「淡き靄」の五歌集、自選歌集に「草の露」がある。57、58、59年北海道アララギ大会の指導のために渡道、各地を回る。（小国孝徳）

吉田迪男（よしだみちお）　明34・11・5～昭7・3・5（1901～1932）〔詩〕渡島管内長万部町生まれ。父母は尾張出身の開拓農民。父母と共に天塩を経て新十津川に移住。新十津川の中徳富小学校高等科三年卒。大正8年雨竜郡秩父別村東山に移住し農業に従事。「文章倶楽部」「文章世界」などへの投書はじまる。大正10年1月大石広乗らとともに詩歌誌「北線」を創刊した。「北線」は大正13年11月号に「土と郷土と田園を基調とした純文芸運動の先駆」をスローガンとして掲げ、社内に独立郷土芸術協会を組織して新しい農民芸術の創造をめざした。中央から若

山牧水、生田春月らの寄稿を得、同人による詩歌選集「未開地」、臼井哲夫・小沼緋路の詩集、社報「文芸民報」を刊行するなど、地方文芸運動の推進者として活躍したが、「北線」は大正15年廃刊。宿痾の胃潰瘍で秩父別に没した。代表作に「開墾地の朝」「灯下労働」がある。

（佐々木逸郎）

吉田美千雄 よしだみちお　大7・1・24～（1918～）〔詩〕室蘭市生まれ。旧制中学卒。昭和24年「新日本文学会」中央委員。25年「コスモス」（秋山清主宰）同人。その後「芸術前衛」「レアリテ」「列島」「北方詩人」などを経て、39年「北海道詩人会議」会員となる。42年「北海道文学案内」を創刊して編集発行したが、その後病気のためいっさいの文学関係の団体や同人誌との関係を断っている。

（永井　浩）

吉田　稔 よしだみのる　昭7・9・25～（1932～）〔詩〕樺太豊原生まれ。北海中学（旧制）中退。札幌中央病院で療養中の昭和29年薩川益明らと「雑草園」を創刊し、翌30年全道の詩サークルとの連帯をはかり薩川のほか江原光太、水木奏、森山富雄、谷崎直澄らと「先列」を創刊。在札詩人と画家による最初の詩画展「サロン・ド・ブロ」を企画、開催した。「先列」終刊（9号）後の33年、山田順三らと「火山帯」を創刊したが二号で終わった。北海道詩人協会創立の実行委員および初期の「北海道詩集」編集委員などをつとめた。札幌で編集事務所自営。

（佐々木逸郎）

吉田未六 よしだみろく　明28・11・19～昭26・5・18（1895～1951）〔川柳〕札幌市生まれ。本名広。大正の中ごろ「東京日日」の「寸句抄」に刺戟されて作句し、北海川柳社の同人となり「鏑矢」を編集する。晩年は古川柳研究、川柳鑑賞家として陰で川柳界に助力する。内科医院を開業。

（斎藤大雄）

吉野あづち よしのあずち　昭20・3・18～（1945～）〔詩〕日高管内日高町生まれ。本名新川恵美子。詩誌「炎」に所属し、現在「核」同人。個人誌「雲の木」を発行。独自のメタファによる独創的な詩をつくる。60年長崎に転住。

（小松瑛子）

吉野　広 よしのひろし　昭15・4・20～（1940～）〔詩〕札幌市生まれ。北海学園大学卒。詩誌「あああ」「ねぐんど」「北海詩人」「二十円詩集」等に所属し、現在は「SU BTERANEANS」（諏訪優編集）に所属。詩集「虚しさへの賭」（昭42・8、自家版）ほかがある。

（小松瑛子）

吉増剛造 よしますごうぞう　昭14・2・22～（1939～）〔詩〕東京生まれ。慶応大学文学部卒。詩集「出発」（昭39・4、新芸術社）、「黄金詩篇」（昭45・4、思潮社）、「頭脳の塔」（昭46・1、青地社）ほか。「黄金詩篇」で第一回高見順賞受賞。59年札幌での詩の朗唱会を皮きりに道東の詩人たちと朗唱会を開催。一行に吉原幸子も同道、冬の石狩の海岸でも野外朗読会を開催した。

（小松瑛子）

吉村　昭 よしむらあきら　昭2・5・1～（1927～）〔小説〕東京生まれ。学習院大学を中退した28年に作家の津村節子と結婚。妻と共に行商の旅に出て北海道に渡ったのは洞爺丸が沈没した直後の昭和29年。たびたび芥川賞の候補となり、41年の「星への旅」が太宰治賞を受賞して作家活動が本格化する。「戦艦武蔵」などで記録文学に新機軸をもたらしたが、〝北志向〟の作家として本道取材作が多い。「神々の沈黙」（昭44・12、朝日新聞社）、「海の柩」（昭45・6、「別冊文芸春秋」）、「消えた鼓動」（昭46・4、筑摩書房）、「逃亡」（昭46・8、「文学界」）、「烏の浜」（昭46・9、「別冊文芸春秋」）、「烏と毬藻」（昭49・6「野性時代」）、「北天の星」（昭50・11、講談社）、「羆嵐」（昭52・5、新潮社）、「毬藻」（昭52・8、「文学界」）、「赤い人」（昭52、「文芸展望」）、「熊撃ち」（昭54・9、筑摩書房）、「脱出」（昭55・12、「新潮」）、「間宮林蔵」（昭56・11～57・6、北海道新聞）、「破獄」（昭58・11、岩波書店）などがある。これらの取材作については随筆集「白い遠景」（昭54・2、講談社）と「冬の海―私の北海道取材旅行」（昭55・5、筑摩書房）によって知ることができる。

（木原直彦）

吉村唯行 よしむらいこう　大3・12・30～（1914～）〔俳句〕京都生まれ。木名忠幸。北海道に育つ。昭和8年広島高等師範卒。18年広島文理大卒。余市中学校教諭、広島県立広島高女教諭。山口師範教授から24年道教委指導主事をはじめ同学校教育課長、地方教育局長、道内高校長等を歴任し道立教育研究所長を経て50年退職。昭和13年8月召集入隊し、幹部候補生として教育中病気のため千葉陸軍病院に入院し14年夏、水原秋桜子、久米正雄の俳句慰問によりはじめて句作をする。15年広島へ転任し、皆吉爽雨を知り「雪解」に投句、師事。41年札幌雪解句会を創設し、会員の指導に当たる。雪解同人。俳人協会員。北海道支部監事。北海道俳句協会常任委員。句集「手稲」（雪解選書）がある。〈冬日ざし机の傷をわたり消ゆ〉

（白幡千草）

吉村　博 よしむらひろし　明44・4・1～昭58・4・14（1911～1983）〔政治、俳句〕十勝管内池田町生まれ。庁立帯広中学卒。昭和30年から49年まで帯広市長。吉村冬の俳号で合同句集「碧洋」（昭57、有田書房）、「玄冬」（昭58、同）などに俳句を発表。随筆集「味なき味」（昭58、札幌凍原社）がある。

（神谷忠孝）

吉村博任 よしむらひろとう　大10・7・2～（1921～）〔評論〕福井市生まれ。泉鏡花研究家。旧制弘前高校を経て昭和21年金沢医大卒。網走市で内科医院開業。昭和29年「婦系図縁起」（私家版）を出して文学活動に入り、網走で同人誌「修羅」創刊。32年金沢大学精神医学教室に入局、36年医学博士。札幌平松病院勤務を経て金沢医大に戻り、現在福井県立精神病院長。「泉鏡花」（昭45、金剛出版新社）、「泉鏡花の世界」（昭58、牧野出版）がある。

（和田謹吾）

吉屋信子 よしやのぶこ　明29・1・12～昭48・7・11（1896～1973）〔小説〕新潟県生まれ。栃木高女在学中から少女雑誌に投稿し、卒業後は作家を志して上京。大正5年に発表した「花物語」によって少女小説作家から出発する。8年3月から7月にかけて十勝池田の兄のもとで書いた「地の果まで」が朝日新聞の懸賞小説に当選し、翌年1月から6月まで同紙に連載。この作品は好評をもって迎えられ、続いて「海の極みまで」を発表（大10・7～12）したが、この二作で作家的地位を確立した。ともに十勝を一部分、舞台にしている。ほかに取材作として「暴風雨の薔薇」（昭5・1～6・4、「主婦之友」）と「見合旅行」（昭30・9、「小説新潮」）があり、戦前の紀行記に松前小島を描いた「北海の孤島に灯台守を訪ねて」があるのは珍しい。代表作に「良人の貞操」「鬼火」など。

（木原直彦）

吉行淳之介 よしゆきじゅんのすけ　大13・4・13～（1924～）〔小説〕岡山市生まれ。敗戦の年東京大学入学。同人誌活動をはじめ、22年退学し編集者生活に入る。「驟雨」（昭29）で芥川賞受賞、〝第三の新人〟の中軸とみなされた。取材作に「札幌夫人」（昭37、「北海道文学全集」19巻収）。「吉行淳之介全集」一七巻、別巻三（昭58、講談社）がある。

（小笠原克）

吉原幸子 よしはらさちこ　昭7・6・28～（1932～）〔詩〕東京生まれ。東京大学仏文科卒。詩誌「歴程」同人、新川和江とともに「現代詩・ラ・メール」編集。詩集「幼年連祷」（昭39・5、歴程社）、「オンディーヌ」（昭47・12、思潮社）、「昼顔」（昭48・4、サンリオ出版）ほかがある。第四回高見順賞受賞。59年2月吉増剛造と共に来札、北海道の詩人と共に全道で朗読会を開催し、その折の詩作品「北の詩」を詩学に発表した。

（小松瑛子）

依田明倫　昭3・1・16～(1928～)〔俳句〕空知管内奈井江町生まれ。本名明倫。昭和20年より「秋葭」と号して「ホトトギス」に投句。23年より高浜虚子に直接師事。家業の農牧業に励みながら高野素十、京極杞陽にも学ぶ。27年ホトトギス四月号〈吾妹子の髪に銀河の触るるかに〉の句で巻頭を占める。28年「二七会」を結成し、北海道の若いホトトギス作家の旗手として活躍。虚子没後、年尾に師事しホトトギス同人となり、二七会を「十人会」と改め、会員の嶋田一歩、摩耶子と共に虚子の写生一筋に句作に励む。十人会会員の中からホトトギス同人が輩出しているが、その指導ぶりは非凡であり、虚子を尊敬することが深い。句集「祖父逝くや」「そこより農地」「少年院面接覚書」等がある。

(白幡千草)

四辻一朗　大3・7・14～(1914～)〔児童文学、童画〕小樽市生まれ。二〇歳で上京、東京図案専門学校中退。二五歳頃からアイヌ民族の絵を描き始め、コタンを訪ねて特に山本多助、萱野茂の教えを受ける。アイヌ民族を正しく子供たちに知らせるため「コタンの四季」「アイヌのむかし話」「天にのぼったチプ」等の多くの児童書、絵本を出版。同時に長年のアイヌ研究は、昭和56年刊行の「アイヌの文様」に結実した。

(東海林淳子)

米川正夫　明24・11・25～昭40・12・29(1891～1965)〔露文学〕岡山県生まれ。明治45年東京外語露語部卒。同年11月旭川第七師団将校露西亜語研究会教官嘱託として赴任。月額四〇円で、はじめは独立官舎に住む。在旭中に結婚。授業は将校集会所の偕行社で行った。翻訳もすすみ、万鉄五郎、中原悌二郎、岡田三郎らが官舎を訪れている。尺八の縦書譜を創案したりする。大正5年12月31日に同研究会の廃止により旭川を去る。自伝「鈍・根・才」(昭37、河出書房新社)に詳しい。羊蹄山麓を舞台にした小説「雪の底にて」(大9・9、「新小説」)がある。

(佐藤喜一)

米倉久子　明22・11・6～昭13・2・9(1889～1938)〔短歌〕山梨県生まれ。大正4年「潮音」の創刊に参加、幹部同人。7年に当時富良野在住の小田観螢に嫁ぐ。二児を得た後郷里で十余年療養生活を送り長逝。この間の夫妻の心の交流は主婦之友誌上に「現代の比翼歌人」として喧伝された。著書は観螢と共著の歌集「忍冬」と、遺歌集となった「竹落葉」がある。

(茂木健太郎)

米坂ヒデノリ　昭9・2・13～(1934～)〔彫刻〕釧路市生まれ。本名英範。東京芸大美術学部彫刻科卒。釧路短期大学教授。自由美術協会員。代表彫刻に「開拓者」「凍原」「祖国」「呼ぶ」「北の柩」「漂泊」「間道を行け」などのほか最高裁大ホールのレリーフを制作(昭49)。「海の詩」で昭和56年道立近代美術館賞を受賞した。著書「間道を行け」(昭57、北海道新聞社)は、文学的にみても興味あるすぐれたエッセー集である。

(鳥居省三)

米村晃多郎　昭2・5・23～(1927～)〔小説〕東京生まれ。昭和25年秋に早稲田大学仏文科を中退し友人を頼って来道。その年の11月から28年3月まで十勝の小、中学校で教壇に立ち、32年に再び来道して35年まで帯広渡辺女子高校で教鞭をとった。帰京後に古井由吉、高橋たか子らが同人の「白描」を主宰し、そこに発表した「野づらの果て」が「文学界」に転載される。連作創作集「サイロ物語」(昭55、作品社)は芥川賞候補となった。北海道紀行記も多く、春秋社から上梓した「北の肖像」シリーズ「野のひと―関寛斎」「森のひと―どろ亀さん」がある。

(木原直彦)

米谷祐司　昭9・1・9～(1934～)〔詩〕小樽市生まれ。戦後「荒地」グループの作品に触発されたこともあって詩を書きはじめる。「詩原」(裸像、白

楊、新詩原、詩原と改題。昭和30年12号で廃刊)、「文芸律」(城を改題。36年6号で廃刊)を発行。初期詩集に「裏町」「血みどろの青春」「花と虚無」。詩誌「眼」を経て、昭和35年に「核」(札幌)同人となり編集を担当。詩集に「甘い文明」(昭38)、「海の甘くなるとき」(昭45、第4回北海道芸術新賞受賞)、「北方で果てよ」(昭52)、共著に「小樽みやげ詩集こころ唄」(昭56)等。シャープで独自な言語感覚、加えて卓抜なユーモアがある。ふる里を愛して「小樽詩話会」(昭38)や、小樽潮まつり、小樽市民劇場を発足させた。39年郷土誌「月刊おたる」を発刊。またサンワ企画を興して出版にも力をかし、地元文化発展のために尽力。北海道詩人協会、日本現代詩人会員。

(萩原　貢)

四方万里子　昭7・1・2～(1932～)〔俳句〕函館市生まれ。庁立函館高女卒。昭和33年「氷下魚」(伊藤凍魚主宰)に投句、同誌紋別支部で小嶋甫公子、後に旭川で凍魚、雪女夫妻の影響を受ける。38年「氷下魚」廃刊のため「四季」(松沢昭圭宰)へ参加、45年同人。53年頃から窪田薫の連句会へ参加、連句懇話会員。57年「粒」同人。現代俳句協会員。句集に「環」(昭58、四季書房)がある。

(辻脇系一)

依田公子　大14・9・12～(1925～)〔俳句〕樺太豊原市生まれ。本名喜美子。豊原高等女学校卒、昭和44年札幌市成人学校の俳句講座で句作に入り、寺田京子に師事。45年より「寒雷」「杉」に拠り学ぶ。現在「杉」「にれ」「梓」同人。48年札幌市民芸術祭奨励賞受賞。繊細鋭敏な感性に柔軟な情感を交えて、澄んだ観照の作風を目指す。現代俳句協会員。

(木村敏男)

り

李　恢成　昭10・7・26～(1935～)〔小説〕樺太真岡町生まれ。昭和30年札幌西高校卒。36年早稲田大学露文科卒。母国語よりも、強制されていた日本語圏で育つ。五歳のとき母に連れられ朝鮮慶尚道の父祖の地を踏む。九歳で母が没し継母が来る。昭和22年一家は母国帰還をめざし、兄の知人(ユダヤ系ソ連人)の配慮で離樺、函館を経て九州着、針尾島収容所に入るが、父は北朝鮮への帰国を断念、以後札幌市に定住。大学在学中に留学生運動に加わり、卒業後朝鮮総連の仕事をしたが、やがて組織を離れ日本語による創作を志向。44年「またふたたびの道」で第一二回群像新人賞受賞。「われら青春の途上にて」「伽倻子のために」「青丘の宿」などの長編を経て、亡母追憶と民族問題を累層させた「砧をうつ女」(昭47)で第六六回芥川賞を在日外国人として初めて受賞。分断された祖国の統一と在日朝鮮人としての主体性を追尋する重く困難な主題を担い続ける。政治に深く関与しつつも、おおらかなユーモアと優情を絶やさぬ作風は独自である。主舞台をソウルに設定した六部作長編「見果てぬ夢」(昭52～54、講談社)は、韓国農工業の現況や民衆の苦悩を見据え、自生的社会主義をめざす抵抗者群像を描く。エッセー集「参加する言葉」「北であれ南であれわが祖国」「イムジン河をめざすとき」、講演「青春と祖国」、対論「風よ海をわたれ」、紀行「サハリンへの旅」も重要である。

〔またふたたびの道〕　中編小説。昭和44年6月「群像」。講談社(昭44・6)刊。敗戦後、樺太(サハリン)から引き揚げ、帰国かなわず日本に住みついた朝鮮人の趙家の人々の個人的民族的悲苦の生活を、息子の哲午夫妻、後妻に来た義母、その連れ子らを織り成して描く。分断された祖国への鬱情を抱く正

統的な生き方が人をうつ。（小笠原克）

リンド（セッター）（りんど（せったー））〔詩〕スウェーデンの代表的詩人。スウェーデン王族の出身。昭和34年11月来道、道東地方を旅し美幌町内のアイヌ墓地に降る雪をみて作詩したり、札幌の詩人や民族学者と詩を朗読した。（更科源蔵）

わ

若林　勝（わかばやし　まさる）　昭9・2・25～昭55・10・28（1934～1980）〔児童文学〕函館市生まれ。炭鉱町赤平で教職につき文学教育、児童文学に関心を深める。その後上京し出版社編集部に勤め、昭和45年より文筆生活に入る。同年牧書店より出た「ズリ山」は、作者が小学校教師として赴任した赤平での九年間の生活の中で生まれた作品。「ズリ山」のモデルとなった赤平の赤間炭鉱は昭和13年にひらかれ、48年に閉山。「ズリ山」は炭鉱に住む人々の生活と炭鉱の歴史を、主人公のズリ山が語るという手法を使っている。「炭鉱よいつまでも」（昭48、牧書店）は閉山後の炭鉱夫一家の流転とまた炭鉱に戻るまでを描いた作品。46年に出た「きたぐにの少年」は差別の中で生きるアイヌ少年の物語。他に「明日に向って―アイヌの人々は訴える―」は郷田満との共著で、アイヌの人々によって書かれた手記集である。（柴村紀代）

若山牧水（わかやま　ぼくすい）　明18・8・24～昭3・9・17（1885～1928）〔短歌〕宮崎県生まれ。本名繁。延岡中学を経て早稲田大学英文科卒。中学時代すでに歌文の回覧誌を発行した。大学入学の翌年、尾上柴舟を中心に前田夕暮らと車前草社を結成、折からの自然主義の潮流に乗って歌壇に「牧水・夕暮時代」を現出した。学友の北原白秋、土岐善麿らからも刺戟を受けた。明治43年東雲堂から詩歌総合誌「創作」が刊行され、牧水が編集を担当したが大正2年からは自らが主宰して「創作社」を興す。青春の浪漫性に貫かれた歌集「別離」（明43）は、明星派とは傾向を異にする現実感と清新さで牧水の評価を定めた。生活面の挫折から一時、口語歌や破調の歌に傾いたが生来が抒情詩人であり、育った南方風土にも影響を受け、おおらかで平明、流麗な声調で自然を旅を酒を詠い、底に一脈流れる感傷性と共に世人に愛誦される。夫人喜志子も歌人で牧水没後は「創作」を守った。牧水は文にもすぐれ紀行文や随筆も多い。大正15年の「詩歌時代」創刊時の負債解消のため揮毫頒布旅行を企て同年9月夫人と共に来道、二カ月間全道各地を行脚、講演会、歌会、揮毫頒布会を開き、小田観螢、山下秀之助、酒井広治ら道内有力歌人とも歓談し、精細を極める「行脚日記」も遺した。十勝の幕別温泉に〈幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく〉の歌碑がある。歌集一五冊のほか「若山牧水全集」全一三巻がある。（村井　宏）

若山允男（わかやま　よしお）　大12・2・20～昭25・2・13（1923～1950）〔俳句〕札幌市生まれ。昭和18年結核療養中栗木重光（踏青）に俳句を学ぶ。21年旭川の「水輪」に参加、中山直木・八寿夫妻、藻戸林平、小林とし子、寺田京子ら札幌勢とともに活躍。翌22年これら同志と「土曜」を発刊、自ら発行人となったが程なく固疾再発、二年に及ぶ闘病の果てに没した。鴛鴦俳人と呼ばれた夫人愛子も二年後に同じ病で後を追っている。（園田夢蒼花）

脇　哲（わき　てつ）　大15・9・26～（1926～）〔シナリオ、ノンフィクション〕高知市生まれ。桧山管内江差町に育つ。無線学校卒。新聞記者のかたわら昭和25年安田博（風山瑕生）の詩誌「ＡＴＯＭ」（愛別、のち札幌）同人となり、27年文芸誌「凍原」（帯広）同人となる。北海道放送に勤務し、33年「呆」を創刊、編集にあたる。映画、放送のシナリオのほかノンフィクションライターとして著書に「物語北海道人物史」「物語薄野百年史」「千島と日本人」「正木清伝」「埋もれていた箱館戦争」「北海道民謡物語」「江差追分」「新北海道伝説考」がある。日本放送作家協会、北海道文化財保護協会員。（佐々木逸郎）

鷲巣繁男（わしす　しげお）　大4・1・7～昭57・7・27（1915―1982）〔詩、詩学〕横浜市生まれ。旧制横浜市立商業卒。三代続きのギリシャ正教徒。洗礼名ダニール・ワシリースキー。日中戦争、太平洋戦争に長期従軍。敗戦後、北海道に流亡。空知管内沼田町の開拓地に入植するが挫折。札幌に仮寓。編集者、印刷工、土木作業員と転職を重ねながら、西欧、インド、中国の古典学、聖書学を独習。ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット、パーリー語、英、独、仏、露語を独習。富沢赤黄男に師事、俳誌「薔薇」同人。その後、詩作に転じ「野性」「眼」「湾」「日本未来派」「歴程」で活躍。「悪亂」（昭25、北方詩話会）、「末裔の旗」（昭26、さろるん書房）、「蛮族の眼の下」（昭29、さろるん書房）、「メタモルフォーシス」（昭32、日本未来派）、さらに41年には「夜の果への旅」をと、精力的に詩集を刊行、鮮烈な衝撃を与えた。47年歌集「蝦夷のわかれ」を残して北海道を脱出、大宮市に転住。詩集「記憶の書」（昭50）、「歎きの歌」（昭51）、「霊智の歌」（昭53）、「行為の歌」（昭56）、詩論集「呪法と変容」（昭47）、「戯論」（昭48）、「詩の栄誉」（昭49）、「狂気と竪琴」（昭51）、「記憶の泉」（同）、「聖なるものとその変容」（昭52）、「ポエーシスの途」（同）、宗教評論集「イコンの在る世界」（昭54）、小説集「路傍の石」（昭51）。ほかに句集、漢詩集がある。昭和51年6月高橋睦郎、多田智満子と「饗宴」を創刊、詩「黄金の枝」、精神史的自叙伝「天上縊死」を発表。初期の象徴詩や風刺詩からパステルナークやサン・ジョン・ペルスの詩境を経て、愛と狂気、死と永遠をめぐる人間の原罪や生の不条理、人類史の背理性を根源的に告発し、断罪する壮大華麗な詩的宇宙を構築。日本のダンテと称され昭和史に類例のない形而上的宗教詩人として、不滅の名声を有している。第一〇回歴程賞、第一二回高見順賞を受けた。（千葉宣一）

鷲田小弥太（わしだ　こやた）　昭17・3・13～（1942～）〔文芸評論〕札幌市生まれ。大阪大学文学部博士課程（哲学）了。一九七八年頃から主に書評という形で文芸作品その他を論評する。著書に「書評の同時代史」（昭57、三一書房）、「短形の鏡」（昭58、青弓社）、「何を読んだらいいか」（昭59、三一書房）がある。北方文芸編集委員。札幌大学教養部教授。（西村　信）

鷲谷峰雄（わしや　みねお）　昭18・5・28～（1943～）〔詩〕函館市生まれ。函館商業高校卒。文化学院中退。昭和44年「詩学」研究会に参加。45年詩誌「オブ」を創刊し「核」に参加した。46年「地球」同人となる。詩集は44年の処女詩集「忘れるだけの海」をはじめ「花についての断章」（昭46）、「幼年ノート」（昭49、第12回北海道詩人協会賞）、「果実詩篇」（昭53）など四冊がある。リリシズムを基調に、詩表現として対象への深い認識への到達をその目標としているが、繊細な感受性と知性のバランスによって対象より存在の新しい意味を発見するところに特色がある。日本現代詩人会員。北海道詩人協会員。（永井　浩）

和田謹吾（わだ　きんご）　大11・5・12～（1922～）〔近代文学研究〕東京生まれ。筆名三木愿。昭和19年東京高師卒業と同時に室蘭中学教諭に任ぜられたが、同日飛行専修海軍予備学生として土浦に入隊のため室蘭着任は20年10月。文芸班顧問として「波の穂」創刊。句誌「いぶり」の主

宰者鈴木洋々子に親しむ。名寄の「ピヤシリ」に創作を発表。22年退職して北大法文学部の第一期生として入学。札幌の「限界」に創作を発表。大学院特別研究生を経て26年助手。同年小谷剛の「作家」に加入、北海道支部長となる。29年北海道新聞の同人雑誌月評を担当。以後、同人誌秀作推薦、北海道新聞文学賞の選考委員として三〇年間その任に当たり、59年視力障害のため退く。研究面では「自然主義文学」(昭41、至文堂)、「島崎藤村」(同、明治書院)その他多くの著書、論文があり、一貫して自然主義文学研究に従事。「近代文学における地方性の問題」(昭29、「ふじ」3号)は、以後の北海道文学論に大きな影響を与えた。「風土のなかの文学」(昭40、北書房)は北海道を舞台にした作品を広くとりあげた本である。38年日本近代文学会北海道支部を結成、共同調査「北海道内発行新聞文芸関係記事年表稿」(明治篇・大正篇)を編んだ。「北海道文学全集」の編集にも加わり、還暦を記念してエッセー集「埋み火抄」(昭57、私家版)を刊行。北大教授、北海道文学館副理事長。

和田耕人 わだこうじん　明38・5・15〜(1905〜)〔短歌〕上川管内上富良野町生まれ。本名松ヱ門。小学校卒業後農業に従事、青年時代農民詩人として短歌、短編小説、随想等を書いた。農業のかたわら青年団活動、農民運動に挺身、昭和15年村会議員。翼賛運動に活躍のため戦後六カ年公職追放をうける。20年噴煙短歌会を創設、会長。また戦後再び農民運動に挺身し各種農業団体の役職に就いて、46年から58年町長の要職に就く。51年歌集「噴煙絶えず」、53年随想集「土に生きる」刊行。54年歌碑建立。(青地繁)

和多田進 わだすすむ　昭20・10・5〜(1945〜)〔ノンフィクション〕帯広市生まれ。法政大学社会学部卒。サイマル、現代史出版を経て現在晩声社代表。轍寅次郎の筆名で「追跡・帝銀事件」(昭56、晩聲社)、本名で「編集現場でルポルタージュを考える」(昭60、同)がある。(神谷忠孝)

和田徹三 わだてつぞう　明42・8・4〜(1909〜)〔詩〕後志管内余市町生まれ。昭和6年小樽高等商業卒。7年詩誌「哥」を創刊して詩活動をはじめ、「椎の木」(昭8)、「麺麭」(昭11)、「木星」(昭17)、「日本未来派」(昭21)、「眼」(昭29)などの詩誌に作品を発表したのち、31年西脇順三郎、安西冬衛、村野四郎らの協力を得て詩誌「湾」を創刊し、選りすぐった執筆陣による詩と詩論を掲載し、みずからも「神話的な変奏」「ぱりあしお・みゆーちか拾遺」「ウォーレス・スティーヴンズ詩抄」等の詩、詩論、訳詩を発表して、高水準な詩誌としての全国的な声価を保持している。早くからヨーロッパ詩のモダニズムの正統に深く根をおろし、英国の一七世紀の形而上詩、T・S・エリオット、ハーバート・リード等に触発されたイメージの精妙な美学を駆使してきわめて個性的な詩風を確立し、昭和10年の処女詩集「門」(椎の木社)を皮切りに、「唐草物語」(昭14、昭森社)、「合弁花冠」(昭24、千代田書院)、「白い海藻の街」(昭27、日本未来派)などの詩集を世に問い、35年の「金属の下の時間」(アポロン社)は鋭利な文明批評精神を甘美なレトリックで形象化して注目を浴び、文字通り本道の代表的詩人の一人となった。後、「神話的な変奏・自然回帰」(昭45、求竜堂)でオリエンタリズムとオキシデンタリズムの壮大な融合の世界を構築し、「虚」(昭53、国文社)、「和田徹三全詩集」(同、沖積社。日本詩人クラブ賞受賞)、「浄瑠璃寺幻想・華」(昭58、沖積社)を出すなど、広大な詩的宇宙は日本的な評価をうけている。このほか札幌短大教授、札幌大谷短大主事、道薬科大教授として英文学を講じ、少年詩、児童文学、合唱曲作詩(昭46、芸術祭大賞)、翻訳など多才な文学活動は「和田徹三全集」(昭58〜59、全5巻、沖積舎)に集大成されている。(原子修)

渡辺勇 わたなべいさむ　昭2・3・11〜(1927〜)〔短歌〕美唄市生まれ。昭和19年「新墾」入社。昭和28年標茶町に移住。30年同町で同人誌「自生林」を毎月発行し、その代表。32年「潮音」入社。57年3月第一歌集「春の牛」を刊行。雄大な道東の自然の中に生命を得たように歌い続ける姿勢は、男歌の永遠を思わせる韻きがある。(永平緑苑)

渡辺一雄 わたなべかずお　明39・1・11〜昭44・12・3(1906〜1969)〔新聞史研究〕胆振管内虻田町生まれ。中央大学に学び大正15年から新聞記者生活に入る。戦時中室蘭日報社に勤めたが、新聞統合により北海道新聞社に籍を移し昭和36年定年退社。後年は専ら新聞史を研究し「北海道新聞10年史」「同20年史」を編纂。著書に「新聞風俗帖」「世相いろめがね」「実録号外戦線」、生涯の集大成としての「日本戦争外史・従軍記者」がある。(渡辺健治)

渡辺喜恵子 わたなべきえこ　大3・11・6〜(1914〜)〔小説〕秋田県生まれ。本姓木下。秋田県立能代高女卒。少女時代釧路市に住んだことがある。戦時中岩手県に疎開。戦後上京して「三田文学」同人となる。みちのくの女たちの四代、七〇年にわたる愛と死の歴史を描いた「馬淵川」(昭33、光風社)で第四一回直木賞を受賞。釧路市開基百年記念と銘打った三部作「原生花園」(昭44、文化服装学院出版)は、明治10年代釧路に移住した鳥取県人と、秋田からの移住者三代にわたる開拓女たちの苦闘の物語で、当時の街の様子を細かく描写している。「アンラコロの歌」の題でテレビドラマ化された。ほかに「海の幸」(昭46、新潮社)、「啄木の妻」上中下(昭55、毎日新聞社)、「北国食べもの風土記」(昭56、女子栄養大学出版部)など著書多数。(鳥居省三)

渡辺洪 わたなべこう　大正11・8・15〜(1922〜)〔短歌〕十勝管内音更町生まれ。十勝開拓の祖「晩成社」幹部の渡辺勝、カネの孫。酪農業、兵役、新聞記者を経て十勝日報社長(昭48〜50年)、渡辺住宅社長を務める。昭和17年「潮音・新墾」歌会に出席し、同年「新墾」入社、本格的作歌をはじめる。21年2月野原水嶺、千葉一也、大野千代子、菅野郊路(要)、成田茂らと「潮音・新墾帯広歌会報」を創刊。同年4月からその誌名を「辛夷」とし、編集発行の実務を担当する。25年「辛夷」休刊となり、その間北門新報歌壇選者を務める。29年10月水嶺、塚越博一、森本浅幸らと「辛夷」を復刊、58年代表水嶺逝去に伴い大塚陽子と交代するまで編集発行の任にあたった。46年より「短歌文芸賞」選考委員担当。郷土史、北海道犬研究でも知られている。著書には歌集「迷路の花」「北の流域」のほか「とかち奇談」「続・とかち奇談」「北海道犬の話」があり、編書に「歌人野原水嶺」がある。

〔北の流域〕きたのりゅういき　昭和54年辛夷発行所刊。掲載歌五三四首。第一部「野を帰る」、第二部「北の流域」、第三部「極秘事項」、第四部「印」に分けて編まれ、野原水嶺が序文執筆。北海道に土着した歌、男のドラマなどと評価を得たほか、著者の生前に死亡の祖父渡辺勝を多く詠んだことも話題となった。〈直角に曲がり直角を歩み来ぬ想へばおびひろに育つ頃より〉(大塚陽子)

渡辺恍人 わたなべこうじん　明37・11・15〜(1904〜)〔短歌〕網走管内上湧別町生まれ。本名要。小樽市北海商業卒。帝国電灯小樽支社勤務を経て昭和2年上湧別町役場に入り、渚滑、興部、上斜里、白滝各村長、北海道町村議会議長会事務局長、上湧別町長を歴任。52年任期満了により退職。大正10年文芸誌「アカシヤ」発行。11年口語歌誌に衣替えし「橄欖樹」刊行。14年同誌廃刊を機に「北海道新短歌

選集」を刊行。昭和2年郷土文芸誌「山脈」発行。28年伊東音次郎の「無風」を復刊し「音次郎歌集」刊行。北海道口語歌壇草創期から全盛期において活躍し、口語短歌普及に果たした役割は大きい。著書に昭和32年随筆集「貝殻談義」、53年口語短歌、俳句等の「歪んだ笑顔」「情談下談」あり。自治功労者、社会貢献者として受賞。勲四等瑞宝章受章。〈屯田の古い絆に結ばれて老耄孤独を嚙みしめて住む〉（吉田秋陽）

渡辺左武郎（わたなべさぶろう）　明44・12・6～（1911～）〔医学〕札幌市生まれ。旧制札幌第一中学校を経て北海道大学医学部卒。札幌医大学長を務めて名誉教授。文芸にも趣味が深く、短歌、詩、映画評などを収めた「そのまま」（昭56・12、発行者八島祥二）がある。（木原直彦）

渡辺滋子（わたなべしげこ）　明16・1・3～昭44・4・2（1883～1969）〔短歌〕富山県生まれ。幼時両親と共に渡道、札幌市に居住。日本女子大学卒。札幌市立高女で昭和16年までの三〇年間教鞭を執る。大正11年「潮音」入社、幹部同人。昭和5年「新墾」創刊に参加、選者。長年裏千家茶道師範を務め、門下生も多い。歌集「坦道」がある。〈石すこしぬらして過ぐる初しぐれ爐開きの灰こまかにふるふ〉（茂木健太郎）

渡辺　茂（わたなべしげる）　明40・2・10～昭57・3・10（1907～1982）〔詩、地方史〕宮城県生まれ。東京の高輪中学中退。大正末期釧路に渡り伯父の旅館業を継ぐ。大正14年釧路の詩歌誌「潮霧」に参加し、同年葛西暢吉らと「銅羅」を創刊。昭和2年更科源蔵と「港街」を創刊。以後「至上律」「北緯五十度」と更科と歩みをともにした。15年旅館業経営を兼ねて札幌に出、道議会事務局、民間会社などに勤務。戦後は更科源蔵と「野性」を創刊。24年北海道郷土研究会常務理事となり、日本民族学会員。この頃から主として市町村史編纂にたずさわる。29年私淑する吉田一穂の序文による詩集「泥炭地層」および「北海道方言集」を刊行。30年度の北海道文化賞を受賞した。編著の市町村史に「白糠町史」「石狩町史」「釧路市史」「新稿伊達町史」「平取町史」「恵庭市史」「函館市史」ほかがあり、「北海道の伝説」（和人篇）「北海道歴史事典」など。「新札幌市史」編集委員として在職中肺ガンのため没した。（佐々木逸郎）

渡辺志津子（わたなべしずこ）　昭10・10・12～（1935～）〔短歌〕樺太恵須取町生まれ。昭和19年仁木町に引き揚げる。39年宮田益子に師事して作歌。41年「凍土」入会、宮田没後退会。山名康郎を中心として発刊した同人歌誌「潭」に参加。穏やかで平明な作風。現在、同誌編集委員。（山名康郎）

渡辺秀二（わたなべしゅうじ）　大10・2・4～（1921～）〔俳句〕夕張市生まれ。本名秀治。昭和26年羽幌炭砿勤務中「氷原帯」に入会、細谷源二の指導を受ける。同炭砿文化会俳句部副部長、部長として機関誌「炭華」を創刊から八三号まで刊行。同砿閉山後札幌市に移住。句集「黄の坑帽」は昭和36年羽幌で、「風雪」は52年札幌で刊行。ほかに37年刊の共著句集「発破音」がある。「氷原帯」編集同人。現代俳句協会員。（川端麟太）

渡辺手寒（わたなべしゅかん）　明22・5・1～昭8・6・8（1889～1933）〔俳句〕香川県生まれ。本名禎三郎。空知管内栗山町の日蓮宗の僧侶、住職。一五歳のころより「ホトトギス」に投句。昭和2年3月号で四句、4月号に三句と入選、当時の北海道俳壇で万丈の気を吐く。〈辛うじて凍死の指をくませけり〉など異色作家として活躍する。4年石田雨圃子の「木の芽」発刊に参加し入門俳句欄を担当する。6年5月「ふる井」を発刊主宰し、多くのホトトギス俳人が集まったが惜しくも三号で休刊となり、その後の消息を断ってしまった。8年突如として〈白露に日当りそめぬうまごやし〉の句がホトトギス誌に掲載されたがその年に死去。虚子選名勝俳句狩勝峠第一席入選作に〈天の川瀑布のごとく懸るのみ〉がある。（嶋田一歩）

渡辺淳一（わたなべじゅんいち）　昭8・10・24～（1933～）〔小説〕空知管内上砂川町生まれ。札幌南高校、北大教養から札幌医大卒。学生時代から「北大季刊」「アルテリア」（医大学友会誌）に創作を発表。昭和31年「くりま」入会。同誌に「葡萄」（昭32）ほかを発表したが「華やかなる葬礼」（同8号）が第一二回新潮全国同人雑誌賞受賞（発表時は「死化粧」と改題。昭40・12、「新潮」）。これが第五四回芥川賞候補作となる。「霙」（昭42・6、「文学界」）が第五七回直木賞候補、「訪れ」（昭42・12、「文芸」）が第五八回直木賞候補となり、「光と影」（昭45・3、「別冊文芸春秋」）によって第六三回直木賞を受賞。昭和44年春上京し、以来東京に居をおくが、北海道を舞台にした作品も多く、かかわり深い。「ダブル・ハート」（昭43・9、「オール読物」）、「小説 心臓移植」（昭44・1～2、同）、「無影灯」（昭46・1～12、「サンデー毎日」）等医学の目から人間を追求し文壇に新しい局面を開いたが「神々の夕映え」（昭53、講談社）は安楽死を追求している。第二の系列は男女の愛と性を描き、「リラ冷えの街」（昭45～46、北海道新聞）、「北都物語」（昭48～49、「クォリティ」）等は北海道を舞台にしたが、次第に東京、京都と移して「くれなゐ」（昭50～51、東京新聞）、「まひる野」（昭49～50、サンケイ）、「化粧」（昭54～56、「週刊朝日」）、「ひとひらの雪」（昭56～57、毎日新聞）で独自の性を描く。第三に伝記として「花埋み」（昭45、河出書房）の系列。野口英世の伝記「遠き落日」（昭50～53、「野性時代」）と「長崎ロシヤ遊女館」（昭54、講談社）の二作で第一四回吉川英治文学賞を受賞した。乃木希典夫人静子を描く「静寂の声」（昭57～、文芸春秋）を書き継いでいる。なお自伝ともいえる「白夜」（昭51～、中央公論）も継続中。「渡辺淳一作品集」全二三巻（文芸春秋）には昭和56年までの作品が網羅されている。

「リラ冷えの街」（りらひえのまち）　昭和45年7月5日～46年1月31日北海道新聞日曜版連載。河出書房新社（昭46・5）刊。人工授精で男の子を生んだ佐衣子と、精子の提供者である有津との恋愛。佐衣子は札幌に住み、有津はサロベツ原野の泥炭研究者と、本道を舞台にし医学と情事、虚無と熱情、巧みなストーリーづくりで、後の発展を予測させる初期の代表作。（川辺為三）

渡辺宗子（わたなべそうこ）　昭9・4・21～（1934～）〔詩〕福岡市生まれ。北海道学芸大学札幌分校卒。昭和47年詩誌「ねぐんど」に参加。56年同誌の「複眼系」への改題後も同人として参加している。詩集は「春をめくる」（昭48）と「ああ蛎がいっぱい」（昭55、第18回北海道詩人協会賞）の二冊がある。詩風は日常性を題材とし、対象への感情移入の中から新しい意味の発見と表現を目ざしている。北海道詩人協会員。（永井　浩）

渡辺惣蔵（わたなべそうぞう）　明40・1・15～昭和60・1・25（1907～1985）〔社会運動〕札幌市生まれ。日本大学政治科卒。在学中より無産運動に入り、のち人民戦線事件に連座入獄一年半。全国労農大衆党、社会大衆党中央委員。豊島区会議員等東京中心に活動。戦後北海道文化協会を創立。日本社会党道連執行委員長。衆議院議員（北海道4区）当選五回。昭和51年任期を終える。著書に「労働運動弾圧立法史」「北海道社会運動史」「わが道わが闘い」等がある。（山内栄治）

渡辺千代（わたなべちよ）　大2・11・13～（1913～）〔小説、エッセー〕室蘭市生まれ。本姓伊藤。東京女子高等師範学校文科卒。女高師三年三学期、朝日新聞の懸賞小説に応募、「十日ばかり寝ずに書いたのがもとで不眠症になり、一年休学。後

遺症で長く苦しむ」（「歴」あとがき）。昭和10年庁立室蘭高女（現室蘭清水丘高）を振り出しに札幌北高校（定時制）で終わるまで三十余年教師生活。茨城県で戦災にあい川西村（現帯広市）において帰農生活のとき楡川千代の筆名で小説「菫流れて」（「北海道文学」）、本名で「嫁粧」「嫦娥」（「凍原」）を発表した。36年から43年まで北海道新聞のコラム「朝の食卓」を書き継ぐ。エッセーを集めた「歴」（昭47）、「スコットランドの四季」（昭52）、「玫瑰童女」（昭55、いずれも私家本）がある。（佐藤庫之介）

渡辺照江　昭和3・3・16～（1928～）〔短歌〕十勝管内本別町生まれ。本名昭枝。「辛夷」編集発行人渡辺洪夫人。昭和20年私立静華家政女学校卒。21年「辛夷」入社。一時、土蔵培人から作歌の指導を受ける。「辛夷」選者のほか、運営委員、編集委員を兼務。43年辛夷賞を受賞。55年歌集「抄本」を刊行。女性には珍しい骨太な詠風で注目された。華道池坊、茶道表千家の教授。（大塚陽子）

渡辺直吉　明40・7・10～昭56・3・30（1907～1981）〔短歌〕秋田県生まれ。大正15年東京荏原中学校卒。空知郡三笠山村幌内尋常高等小学校に赴任。庁立岩見沢高等女学校、（現道立岩見沢西高校）に勤め、昭和43年同校教頭で定年退職。大正15年若山牧水夫妻が幌内を訪れたことと、炭鉱病院の田辺杜詩花を識ったことから短歌に関心を持つ。昭和3年小泉苳三主宰「ポトナム」入社。21年5月「原始林」創刊に同人として参加、運営委員、29年より選者。昭和15年から16年口語歌人並木凡平の依頼を受け、室蘭タイムス文芸欄に文章、短歌を掲載。ポトナムのグループ誌「青雪」を編集発行。昭和18年道翼賛芸術連盟短歌部推薦会員。21年から23年岩見沢より詩歌誌「草原」の編集同人。20年から25年第一次岩見沢短歌会、30年から56年まで第二次岩見沢短歌会を指導。48年農村婦人「土筆短歌会」、54年農協婦人部「野菊短歌会」を指導。作風は写実に根ざしつつも美とロマンを追求する詩性派の一人であった。画業として昭和9年第一〇回「道展」に「荷積場風景」、24年二三回「国展」に「空知晩秋」「厩舎」二点入選。43年文化連盟、46年岩見沢教育振興表彰を受けた。岩見沢市文連副会長、文学岩見沢の会代表。57年「渡辺直吉全歌集」刊行。58年11月緑ケ丘に「渡辺直吉歌碑」建立。（吉田福太郎）

渡辺直子　明45・1・14～（1912～）〔俳句〕函館市生まれ。庁立函館高女卒業後看護婦講習所を修了し、昭和5年から47年まで市立函館病院に看護婦として勤務（昭和29年以降総婦長）。俳句は昭和15年頃「さいかち」に投句する。斎藤玄を知り「壺」に入会、21年以後同人。28年から47年までの休刊中は句作中止。49年壺中賞受賞。玄の死去後は同人会副会長として函館壺の会を率い献身しているが句作はしていない。（金谷信夫）

渡辺俳瞳　明38・1・28～（1905～）〔俳句〕根室市生まれ。本名憲治。電電公社に勤務し昭和38年退職する。俳句は大正12年「枯野」に拠り、長谷川零餘子に師事。小樽俳句会「秋草会」を創設し会長となる。昭和5年「水明」創刊に参加、長谷川かな女に師事する。一時作句を中断したが44年復帰。54年横道秀川主宰の「雪嶺」創刊に特別同人として参加。小樽俳句協会副会長を務めた。（横道秀川）

渡辺白泉　大2・3・24～昭44・1・30（1913～1969）〔俳句〕東京生まれ。本名威徳。昭和10年慶応大学卒。昭和8年「馬酔木」に初投句。以後「句と評論」「広場」「京大俳句」「天香」等に拠って評論、作品活動を展開、新興俳壇切っての新鋭と目されたが、15年京大俳句弾圧事件に連座検挙。その後は俳壇の表面に出ずひそかに作句。18年2月札幌を訪れた折、作品五句を残している。「白泉句集」（昭50）がある。（園田夢蒼花）

渡辺ひろし　明45・2・3～（1912～）〔児童文学〕東京生まれ。本名弘。東京目白中学校五年中退。以来童謡に打ち込む。昭和5年「日ぐれ」が「コドモノクニ」特選に入り、これが縁で「チチノ木」同人となる。「赤い鳥」に「ふきん」「水田の空」等発表。25年札幌ロバパンに入社。「日本児童文学」に「ろばよ走れ」発表、子どものうたとしてキングレコードや小学校音楽教科書等に収録。31年肺結核で手術。この年8月「鳩の扇子」を楡書房より出版。36年和田義雄らと「森の仲間」を創刊。その編集を続けている。49年日本童謡協会員。「童謡への回想と私観」「にじのつら」等を自費出版。作品「米屋」は日本童謡集（偕成社）、「ミズバショウ」は小学校教科書国語六年に収録（昭52、日本書籍）。「知里真志保先生」の詩は日本詩歌名作集収録。59年札幌市より社会教育功労者賞を受ける。（坪谷京子）

渡辺睦子　大8・1・20～（1919～）〔俳句〕後志管内岩内町生まれ。旧制札幌高等女学校専攻科卒。小学校教員を経て主婦。昭和48年より「駒草」に拠り句作を始め、のち寺田京子に師事。「寒雷」「杉」所属。「にれ」「梓」同人。（木村敏男）

和田芳恵　明39・4・6～昭52・10・5（1906～1977）〔小説、近代文学研究〕渡島管内長万部町（国縫）生まれ。大正8年訓縫小学校を卒業して庁立函館商船学校に補欠入学。秋に生家は破産し、士別に移る。10年に札幌の私立北海中学二学年に編入学。作家島木健作のあと佐藤正男個人の育英資金を受けたが、この間母校の代用教員を勤めたりした。13年に北海中学を退学して上京し、翌年中央大学法学部に入学。昭和6年に卒業して新潮社に入社し、「日本文学大辞典」編集のほか雑誌「日の出」編集長代理となった。かたわら小説にも筆を染め、新潮社を退社した16年の10月にかねてからの研究成果「樋口一葉」（十字屋書店）を上梓した。翌年には連作短編集「作家達」と長編小説「十和田湖」を、18年には「樋口一葉の日記」と「離愁記」をそれぞれ出版。敗戦直後の22年に「日本小説」の編集に携わったが、いわゆる〝中間小説〟の名称はこの雑誌の小説によって起こった。31年6月の「一葉の日記」（筑摩書房）で日本芸術院賞を受賞し、ついで長編小説「塵の中」（昭38・11、光風社）によって直木賞を受賞した。45年には長い編集者生活の体験による「私の内なる作家たち」（中央大学出版部）を刊行し、49年の短編集「接木の台」（河出書房新社）で読売文学賞を受けた。特筆していいのは、和田文学が晩年に至って〝とつぜん成熟した〟（丸谷才一）ことで、その巧緻きわまる作品群によって〝短編の名手〟の名をほしいままにする。50年には短編集「抱寝」（河出書房新社）を出しており、「接木の台」と共に「幼なじみ」など故郷ものが多く収められている。肺気腫と闘いながら「文芸」に連載した「暗い流れ」は北海道を舞台にさまざまな性の体験を通じて成長してゆく自伝的小説で、日本文学大賞を受けた。死後にも「雪女」によって川端康成文学賞が贈られ、没後あいついで短編集「雀いろの空」「雪女」、随筆集「順番が来るまで」「ひとすじの心」「作家のうしろ姿」が刊行された。「和田芳恵全集」全5巻（昭53～54、河出書房新社）がある。

〔暗い流れ〕　長編小説。昭和50年10月～52年1月「文芸」。河出書房新社（昭52・4）刊。明治43年、主人公の私（吉平）が生まれ故郷の国縫でハレー彗星に出会うところからはじまる。やがて一家が没落するなかで北海中学に進み、上京するが、その成長の過程で父の妾、従妹、友人の母などとの性の体験を重ね

る。主人公の生きざまを〝暗い流れ〟のまま捉えているが、そこには作者のふるさとへの想いも集約されており、晩年の大作である。（木原直彦）

和田義雄（わだよしお）　大3・3・2～昭59・10・10（1914～1984）［児童文学］旭川市生まれ。空知農業学校中退。昭和21年から25年まで雑誌「北の子供」編集長。22年から27年人形劇団「こまどり」主宰。この間ラジオドラマ等執筆。28年から45年喫茶店経営。27年2月日本児童文学者協会北海道支部結成に参加、事務局長の責を果たす。36年4月児童文学同人誌「森の仲間」創刊、主宰として新人育成に努力。41年の「北海道文学展」には加藤多一と共に児童文学コーナーの展示に力をつくし、以後道内児童文学界の関係資料収集、解説、展示の生き字引として活躍した。この延長線上にあるものとして北海道文学館常任理事、「北海道児童文学全集」編集委員等の仕事がある。童話集に「かぜをひいたくま」「白い劇場」「雪の花が咲いた」など。評論集に「北海道の児童文学」（共著）。ほかに昭和35年豆本「ぷやら新書」を企画発刊。（加藤多一）

編集後記

本事典の編集は早くからの懸案であったが、昭和58年度の北海道文学館総会（5月21日）において決定され、翌59年2月27日に「北海道文学大事典編集委員会」の発足をみた。

〈委員長〉更科源蔵。〈副委員長〉園田夢蒼花、中山周三、和田謹吾。〈委員〉小説・評論＝小笠原克、神谷忠孝、沢田誠一、日高昭二。児童文学＝加藤多一、柴村紀代、渡辺ひろし、和田義雄。詩＝東延江、河邨文一郎、小松瑛子、佐々木逸郎、永井浩。短歌＝田村哲三、永平利夫、宮崎芳男、村井宏。俳句＝木村敏男、島恒人、辻脇系一。〈事務局〉木原直彦、西村信。〈事務局員〉東海林淳子、山本よしえ。

以来、何回となく会議を重ねて基本要綱作りにはじまり、リスト作成に取り組んだ。その際に、日本近代文学館編「日本近代文学大事典」（講談社）が大きく参考になったが、しかし府県単位の前例がないため、本道の実情に即して試行錯誤を重ねざるを得なかったのである。

最大の難関は項目の選定とスペースの割り当てであり、これにはどの委員も最初から最後まで苦闘の連続であった。結局のところ、全ジャンルのリストアップを終えたあと、ジャンル別に総枠を定め、ジャンルごとに配分するという方法をとった。ジャンルを横断し、全体を通じて横並びの比重を期すことは不可能だったからである。みんなが納得する基準などないこともおもい知った。最善の努力をはらったつもりであるが、しかし目くばりのまずさを恐れるもので、その点はお叱りを受けながら他意のないことをご了承いただきたいと思っている。

編みながら、時間をかければそれでいい、というものでないことも知った。すでに見えなくなっているものが、いかに大きかったことか。この時期に編まなければ、古い事象はますます見えなくなってしまう、との実感を深めたこともたしかである。

いま本事典が陽の目を見ることになったが、ここまで漕ぎ着けることができたのも、校正にまで忙殺された全委員の熱情によること勿論であるが、なんといっても三四〇人という方々が心よく気持ちをこめてご執筆くださったからにほかならない。幾重にも感謝するものである。

北海道新聞社出版局図書編集部には並々ならぬお世話になった。ことに当方の編集やその手順のまずさを、担当の方々によってどれほど助けられたか知れない。このご尽力がなければ、この段階での完成はおぼつかなかったはずで、心からお礼を申しあげたい。また、出版社側と執筆者の間に立って苦闘された北海道文学館の事務局員にも格別に感謝する。

だが、ここで、満腔の悲しみをこめて、更科源蔵北海道文学館理事長の急逝について述べなければならない。昭和42年の文学館創立以来、今日まで理事長として活躍され北海道の文学に、いや日本の文学界に多大の影響を与え続けてこられた氏は、文学館の歴史の中で最も大きな、画期的な事業として企画された本書の完成を待たず、昭和60年9月25日に永眠された。この一、二年、健康状態が思わしくなかったが、それにもかかわらず、自ら四二項目を執筆し、刊行を心待ちにしておられた。大変残念でならない。本書をご霊前に捧げて、ご冥福を心からお祈りする次第である。

（木原　直彦）

北海道文学大事典

定価　四〇〇〇円

印　刷　昭和六〇年一〇月二一日
発　行　昭和六〇年一〇月三〇日

編　者　北海道文学館
編者代表　更科源蔵

発行者　森田博志
発行所　北海道新聞社
札幌市中央区大通西三丁目
郵便番号　〇六〇
電話　（〇二）二二二一―二一一一
振替　小樽九―二八三九八

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　大日本製本株式会社

ISBN4-89363-454-2 C0590 ¥4000E

北海道文学史略年表

年次	作品と事項	社会の動き
一八八九(明22)	幸田露伴・雪紛々	帝国憲法発布
一八九六(明29)	三遊亭円朝・樗説蝦夷誌	上磯郡当別にトラピスト修道院発足
一九〇二(明35)	有島武郎 札幌農学校入学 国木田独歩・空知川の岸辺	札幌・函館・小樽3区で衆議院議員選挙
一九〇三(明36)	菊池幽芳・乳姉妹	北海道官設鉄道、釧路・帯広間全通
一九〇五(明38)	バチェラー・アイヌ英和辞典	札幌農学校、東北帝国大学農科大学となる／函館大火
一九〇七(明40)	石川啄木・漂泊 石川啄木 来道 小林多喜二 小樽に移住	新夕張炭鉱でガス爆発
一九〇八(明41)	武林夢想庵・洞爺 武者小路実篤 来遊	私立函館図書館開館（岡田健蔵ら設立）
一九〇九(明42)	徳冨蘆花・寄生木 鳴海要吉 増毛に移住 岩野泡鳴 来道	小樽高等商業学校の設置認可
一九一〇(明43)	岩野泡鳴・放浪 啄木・歌集一握の砂 長田幹彦・徳冨蘆花 来道	小樽大火
一九一一(明44)	長田幹彦・澪 武者小路実篤・高村光太郎 来道	夕張炭鉱でガス爆発／五番館札幌、営業開始
一九一二(大元)	里見弴・手紙 里見弴ら来遊	気候不順のため大凶作／不景気続く
一九一三(大2)	徳冨蘆花・みゝずのたはこと	苫前村に大熊出現
一九一五(大4)	有島武郎 農科大学教授辞職	丸井今井百貨店開店
一九一六(大5)	小林多喜二 小樽商業入学 小熊秀雄 樺太転々	
一九一七(大6)	有島武郎・カインの末裔 葛西善蔵・雪をんな 伊藤整 小樽中学校入学	ロシア革命／この頃から、道内各地でストライキ相次ぐ
一九一八(大7)	岡田三郎・涯なき路 有島武郎・生まれ出づる悩み 久保栄 帰道	北海道帝国大学を札幌に設置／北海道博覧会
一九一九(大8)	中戸川吉二・反射する心 島木健作 上京	
一九二〇(大9)	有島武郎 来道 高浜虚子ら来道	第一回国勢調査実施。全道人口二三五万九一八三人
一九二一(大10)	有島武郎 農場視察に来道	函館大火
一九二二(大11)	本庄陸男 上京 有島武郎 有島農場解放宣言 鶴田知也 来遊	札幌・函館・小樽・旭川・室蘭・釧路、区制を廃し市制を施行
一九二三(大12)	宮沢賢治・詩オホーツク挽歌 島木健作 上京	戸長役場を全廃し、町村制を施行
一九二四(大13)	宮沢賢治 来遊 佐藤春夫・北海道へ	
一九二五(大14)	宮沢賢治・佐藤春夫ら来遊 北原白秋ら来遊	札幌などで憲政擁護演説会開催
一九二六(昭元)	葉山嘉樹・海に生くる人々 吉田一穂・詩集海の聖母	治安維持法公布 青森・函館間電話線開通／十勝岳大爆発、泥流で死者・不明者多数
一九二七(昭2)	伊藤整・詩集雪明りの路 若山牧水ら来遊	
一九二八(昭3)	芥川龍之介・里見弴 来道 小熊秀雄 上京	小樽港湾労働争議
一九二九(昭4)	小林多喜二・蟹工船	全国で共産党関係者を一斉検挙
一九三一(昭6)	バチェラー八重子・若き同族（ククリ）に	駒ヶ岳大爆発
一九三二(昭7)	斎藤茂吉ら来道	満州事変／冷害凶作
一九三三(昭8)	林芙美子 来遊	札幌に三越支店開業 旭川国防婦人会発足

年次	作品と事項	社会の動き
一九三五(昭10)	正宗白鳥・尾上柴舟 来遊	国勢調査、全道人口三〇六万八二八三人
一九三六(昭11)	鶴田知也・コシャマイン記 北海道詩人協会（旭川）結成	陸軍特別大演習／昭和天皇、道内各地を巡幸
一九三七(昭12)	伊藤整・幽鬼の街 久保栄・火山灰地第一部 岡本かの子・鶴田知也 来道	札幌・東京間の定期航空路開設
一九三八(昭13)	本庄陸男・船山馨・吉田十四雄 帰道 森田たま・石狩少女	
一九四一(昭16)	本庄陸男・石狩川 伊藤整・小熊秀雄・島木健作・横光利一・川端康成・阿部知二 来道	国策パルプ工業創立
一九三九(昭14)	板東三百・兵村 寒川光太郎・密猟者 高浜虚子・佐佐木信綱 来遊	朝鮮人労務者の道内強制連行始まる
一九四〇(昭15)	吉田十四雄・百姓記 島木健作 帰道	北海道女子師範学校設置／北部軍司令部を札幌に設置
一九四一(昭16)	船山馨・北国物語 北海道文芸協会（札幌）結成 北海道歌人協会（札幌）結成	北海道綴方聯盟事件／太平洋戦争開戦
一九四二(昭17)	辻村もと子・馬追原野 早川三代治・処女地 北海道俳句作家協会（札幌）結成	
一九四六(昭21)	島木健作・土地	「北海タイムス」「小樽新聞」など十一紙が合併し「北海道新聞」を創刊
一九四七(昭22)	北海道出版文化祭（札幌）	
一九四八(昭23)	武田泰淳・サイロのほとりにて	宮部金吾、文化勲章を受賞
一九五〇(昭25)	八木義徳・摩周湖 草野心平ら来遊	北大に法文学部設置 新制高等学校発足
一九五一(昭26)	志賀直哉・岸田国士 来道	第一回札幌雪まつり／レッドパージ／朝鮮戦争（～五三年）
一九五三(昭28)	畔柳二美・姉妹	対日平和条約・日米安保条約調印
一九五四(昭29)	武田泰淳・ひかりごけ 北海道詩人協会（札幌）設立	街頭・店頭テレビに人気殺到 青函トンネル工事起工式（八八年完成）／台風15号（洞爺丸台風）で大惨事／岩内大火
一九五五(昭30)	原田康子・挽歌 北海道文学者懇話会設立（札幌）	鰊凶漁、以後回復せず
一九五六(昭31)	伊藤整・若い詩人の肖像 北海道文学代表作選集（道文懇）	NHK札幌中央放送局のテレビ開局／冷害凶作
一九五七(昭32)	石森延男・コタンの口笛 原田康子第8回女流文学者賞	ソ連、人工衛星打ち上げに成功
一九五九(昭34)	中沢茂・助命歎願	皇太子の成婚パレード
一九六一(昭36)	子母沢寛・厚田日記 日本近代文学会北海道大会（札幌）	札幌・東京間航空路にジェット機登場
一九六二(昭37)	水上勉・飢餓海峡 日本近代文学会北海道支部結成	東京でスモッグ、深刻化
一九六四(昭39)	安部公房・榎本武揚 津村節子・さい果て	NHK、札幌圏内でカラーテレビ放送を開始
一九六五(昭40)	三浦綾子・氷点 船山馨・石狩平野	消費者物価七・四%上昇
一九六六(昭41)	物語北海道文学盛衰史 北海道文学展（札幌）	ビートルズ来日
一九六七(昭42)	佐藤喜一・小熊秀雄論考 中野重治・北海道の作家たち	ベトナム反戦国際統一行動の全道中央集会、札幌で開催
一九六八(昭43)	北海道文学館発足 北海道新聞文学賞設立 澤田誠一・斧と楡のひつぎ	十勝沖地震

年次	作品と事項	社会の動き
一九六九(昭44)	李恢成・またふたたびの道 亀井秀雄・伊藤整の世界	北大など道内大学でも学園紛争
一九七〇(昭45)	渡辺淳一・花埋み 渡辺淳一第63回直木賞 伊藤整・亀井勝一郎文学展開催	全道市長会で北海道旧土人保護法廃止を決議
一九七一(昭46)	李恢成第66回芥川賞	札幌市営地下鉄南北線開業
一九七二(昭47)	木野工・襤褸 夏堀正元・幻の北海道共和国	第11回冬季オリンピック札幌大会開催／札幌市、政令指定都市となる
一九七三(昭48)	小笠原克・近代北海道の文学 高橋揆一郎第37回文学界新人賞	第一次石油ショック
一九七四(昭49)	和田芳恵第26回読売文学賞	佐藤栄作、ノーベル平和賞受賞
一九七五(昭50)	西野辰吉・石狩川紀行 萱野茂・ウエペケレ集大成	堂垣内知事、交通事故非常事態宣言を出す
一九七六(昭51)	萱野茂第23回菊池寛賞 小檜山博・出刃	道庁ロビーで時限爆弾爆発／ソ連の戦闘機、函館空港に強制着陸
一九七七(昭52)	八木義徳第28回読売文学賞 吉村昭・羆嵐	北海道立近代美術館開館
一九七八(昭53)	和田芳恵第9回日本文学大賞 高野斗志美・現代文学と北海道の作家群像	英で世界初の試験管ベビー誕生
一九七九(昭54)	新・有島記念館開館（ニセコ） 小樽文学館開館 高橋揆一郎第79回芥川賞 和田芳恵第5回川端康成文学賞 上西晴治・コシャマインの末裔 小松伸六第27回菊池寛賞 重兼芳子第81回芥川賞	札幌豊平川にサケ遡上を25年ぶりに確認

年次	作品と事項	社会の動き
一九八〇(昭55)	更科源蔵・原野 渡辺淳一第14回吉川英治文学賞	北電苫東厚真火力発電所で火入れ式挙行
一九八一(昭56)	倉本聰・北の国から 船山馨第15回吉川英治文学賞	2月7日を北方領土の日と決定
一九八二(昭57)	吉村昭・間宮林蔵 小松伸六第32回芸術選奨文部大臣賞	石狩湾新港開港
一九八三(昭58)	吉田十四雄農民文学特別賞 加藤幸子第14回新潮新人賞 鳥居省三・異端の系譜 高橋揆一郎・地ぶき花ゆら	大韓航空機、撃墜される
一九八七(昭62)	加藤幸子第88回芥川賞 小檜山博第11回泉鏡花文学賞 萱野茂・アイヌの里二風谷に生きて	国鉄、百七年の歴史をとじる
一九八八(昭63)	神谷忠孝・日本のダダ 三浦清宏・長男の出家 池澤夏樹・スティルライフ 掛川源一郎・バチラー八重子の生涯 沖藤典子・薄命の作家素木しづの生涯	青函トンネル開通
一九九五(平7)	三浦清宏・池澤夏樹第98回芥川賞 室蘭港の文学館開館 北海道文学館財団法人化 北海道立文学館開館	

■収録人物(物故者)没年月日一覧

※ デジタル版『北海道文学大事典』の「人名編」記事本文は刊行時(1985年)のかたたちををほぼそのまま残してアップしました。
掲載した人々の中には、すでに故人となった方々も含まれています。

※ 以下は、上記の「すでに故人となった方々」の没年月日について調査し、それが判明した人々について一覧化したものです。
また、「備考」欄は受賞歴など現在調査中の事柄のうち確定した内容を後日定期的に加え、情報としてご提供するための欄です。

※ 「人名編」記事本文には、下表とは別に、すでに物故されたと推定できる人々がまだ多く含まれています。
これらの方々については、調査を続行いたしますが、なおこの『大事典』をご利用くださる皆様で、
没年月日などの情報をお持ちの方は、随時当文学館まで当該情報をお届けください。

※ 没年一覧の該当人物については本文見出し人名部分に一覧へのリンク設定をしております。

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
あ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
青木　政雄	あおき　まさお	短歌	1906年（明39）8月14日～1988年（昭63）7月15日	
青山　ゆき路	あおやま　ゆきじ	短歌	1907年（明40）8月11日～1993年（平5）3月1日	
秋山　清	あきやま　きよし	詩、評論	1904年（明37）4月20日～1988年（昭63）11月14日	
秋山　しぐれ	あきやま　しぐれ	俳句	1925年（大14）11月15日～没年不詳	
朝谷　耿三	あさたに　こうぞう	小説	1909年（明42）2月17日～2007年（平19）3月	
浅野　晃	あさの　あきら	詩、評論	1901年（明34）8月15日～1990年（平2）1月29日	
浅野　太市	あさの　たいち	小説	1930年（昭5）7月10日～2008年（平20）9月	
浅野　明信	あさの　めいしん	詩	1933年（昭8）8月5日～2005年（平17）10月1日	
安住　尚志	あずみ　たかし	短歌	1919年（大8）1月20日～2000年（平12）2月19日	
阿部　慧月	あべ　けいげつ	俳句	1905年（明38）12月25日～2005年（平17）12月31日	
安部　公房	あべ　こうぼう	小説、劇作	1924年（大13）3月7日～1993年（平5）1月22日	
阿部　信一	あべ　しんいち	俳句	1932年（昭7）8月15日～2005年（平17）12月31日	
阿部　保	あべ　たもつ	英文学、詩	1910年（明43）5月30日～2007年（平19）1月10日	
荒川　楓谷	あらかわ　ふうこく	俳句	1908年（明41）2月25日～2005年（平17）4月15日	
荒澤　勝太郎	あらさわ　かつたろう	小説	1913年（大2）4月15日～1994年（平6）4月2日	
荒谷　七生	あらや　なおえ	短歌	1911年（明44）8月24日～1997年（平9）8月	
阿波野　青畝	あわの　せいほ	俳句	1899年（明32）2月10日～1992年（平成4）12月22日	
安藤　美紀夫	あんどう　みきお	児童文学	1930年（昭5）1月12日～1990年（平2）3月17日	
い				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
飯塚　朗	いいづか　あきら	中国文学研究、小説	1907年（明40）9月2日～1989年（平元）2月23日	
飯田　龍太	いいだ　りゅうた	俳句	1920年（大9）7月1日～2007年（平19）2月25日	
生田　直親	いくた　なおちか	シナリオ、小説	1929年（昭4）12月31日～1993年（平5）3月18日	
池波　正太郎	いけなみ　しょうたろう	小説、劇作	1923年（大12）1月25日～1990年（平2）5月3日	
石　一郎	いし　いちろう	小説、アメリカ文学研究	1911年（明44）8月1日～2007年（平19）1月	
石井　昌光	いしい　まさみつ	詩	1911年（明44）5月24日～1987年（昭62）4月12日	
石岡　草次郎	いしおか　そうじろう	短歌	1916年（大5）3月20日～1995年（平7）4月	
石垣　福雄	いしがき　ふくお	国語学	1914年（大3）7月23日～2004年（平16）2月21日	
石上　玄一郎	いしがみ　げんいちろう	小説	1910年（明43）3月27日～2009年（平21）10月5日	
石上　慎	いしがみ　しん	劇作	1935年（昭10）1月1日～2010年（平22）5月10日	
石川　桔梗	いしかわ　ききょう	短歌	1906年（明39）2月23日～2000年（平12）8月	
石川　澄水	いしかわ　ちょうすい	短歌	1905年（明38）5月1日～1986年（昭61）1月	
石川　昌男	いしかわ　まさお	短歌	1911年（明44）10月10日～2005年（平17）	
石坂　由紀子	いしざか　ゆきこ	詩	1936年（昭11）6月6日～1991年（平3）3月14日	
石坂　洋次郎	いしざか　ようじろう	小説	1900年（明33）1月25日～1986年（昭61）10月7日	
石塚　喜久三	いしづか　きくぞう	小説	1904年（明37）9月5日～1987年（昭62）10月1日	
石塚　友二	いしづか　ともじ	俳句	1906年（明39）9月20日～1986年（昭61）2月8日	
石橋　豊次郎	いしばし　とよじろう	短歌	1906年（明39）9月13日～1992年（平4）10月	
石原　八束	いしはら　やつか	俳句	1919年（大8）11月20日～1998年（平10）7月16日	
石森　延男	いしもり　のぶお	児童文学、国語学者	1897年（明30）6月16日～1987年（昭62）8月14日	

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
石山　透	いしやま　とおる	シナリオ	1927年（昭2）5月15日～1985年（昭60）12月3日	
石山　正雄	いしやま　まさお	短歌	1914年（大3）2月5日～2005年（平17）9月	
泉　孝	いずみ　たかし	短歌	1916年（大5）8月1日～2007年（平19）7月13日	
市瀬　見	いちのせ　けん	新聞記者	1918年（大7）6月5日～2002年（平14）3月28日	
井手　賁夫	いで　あやお	独文学研究	1910年（明43）10月18日～1995年（平7）5月19日	
伊藤　信吉	いとう　しんきち	詩、評論	1906年（明39）11月30日～2002年（平14）8月3日	
伊藤　俊夫	いとう　としお	詩	1907年（明40）10月30日～1998年（平10）5月25日	
伊藤　兎志郎	いとう　としろう	小説	1925年（大14）3月11日～2002年（平14）3月18日	
伊藤　雪女	いとう　ゆきじょ	俳句	1898年（明31）2月12日～1988年（昭63）5月1日	
伊藤　蘭水	いとう　らんすい	俳句	1918年（大7）11月11日～1992年（平4）7月31日	
伊東　廉	いとう　れん	詩	1922年（大11）2月15日～2004年（平16）5月1日	
稲月　蛍介	いなづき　けいすけ	俳句	1931年（昭6）12月5日～2004年（平16）	
犬飼　哲夫	いぬかい　てつお	動物学	1897年（明30）10月31日～1989年（平元）7月31日	
井上　蛙宙	いのうえ　あちゅう	俳句	1927年（昭2）3月30日～1997年（平9）9月	
いのうえ　ひょう	いのうえ　ひょう	詩、小説	1938年（昭13）7月9日～2002年（平15）12月13日	
井上　二美	いのうえ　ふみ	児童文学	1922年（大11）11月12日～2012年（平24）3月31日	
井上　光晴	いのうえ　みつはる	小説	1926年（大15）5月15日～1992年（平4）5月30日	
井上　靖	いのうえ　やすし	小説	1907年（明40）5月6日～1991年（平3）1月29日	
猪股　泰	いのまた　ゆたか	短歌	1931年（昭6）11月22日～1994年（平6）2月	
今井　鴻象	いまい　こうしょう	詩、児童文学	1904年（明37）9月5日～1988年（昭63）11月15日	
今井　泰子	いまい　やすこ	評論、近代文学研究	1933年（昭8）4月25日～2009年（平21）	
入江　好之	いりえ　よしゆき	詩、児童文学	1907年（明40）9月4日～1989年（平元）8月8日	
岩城　三郎	いわき　さぶろう	短歌	1927年（昭2）4月2日～2005年（平17）8月	
岩城　之徳	いわき　ゆきのり	近代文学研究	1923年（大12）11月3日～1995年（平7）8月3日	
		う		追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
上西　晴治	うえにし　はるじ	小説	1925年（大14）1月7日～2009年（平21）11月10日	
上野　新之輔	うえの　しんのすけ	短歌	1908年（明41）1月24日～1988年（昭63）5月9日	
魚住　あらた	うおずみ　あらた	短歌	1909年（明42）1月24日～2007年（平19）1月	
氏家　夕方	うじいえ　ゆうかた	俳句	1907年（明40）12月12日～1993年（平5）12月12日	
薄井　うめ	うすい　うめ	短歌	1919年（大8）8月10日～2009年（平21）9月	
打木　村治	うちき　むらじ	小説	1904年（明37）4月21日～1990年（平2）5月29日	
内村　剛介	うちむら　ごうすけ	評論、ロシア文学研究	1920年（大9）3月12日～2009年（平21）1月30日	
内村　直也	うちむら　なおや	劇作	1909年（明42）8月15日～1989年（平元）7月27日	
内山　筏杖	うちやま　ばつじょう	俳句	1906年（明39）9月4日～1988年（昭63）7月14日	
宇野　渭水	うの　いすい	俳句	1918年（大7）11月9日～1991年（平3）10月19日	
宇野　千代	うの　ちよ	小説	1897年（明30）11月28日～1996年（平8）6月10日	
生方　たつゑ	うぶかた　たつえ	短歌	1905年（明38）2月23日～2000年（平12）1月18日	
		え		追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
江口　源四郎	えぐち　げんしろう	短歌	1917年（大6）10月7日～没年月日不詳	
遠藤　勝一	えんどう　しょういち	短歌	1895年（明28）2月13日～1991年（平3）5月5日	
		お		追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
扇畑　忠雄	おうぎばた　ただお	短歌	1911年（明44）2月15日～2005年（平17）7月16日	
大磯　ひろし	おおいそ　ひろし	俳句	1918年（大7）1月15日～1988年（昭63）2月28日	
大江　賢次	おおえ　けんじ	小説	1905年（明38）9月20日～1987年（昭62）2月1日	
大江　満雄	おおえ　みつお	詩	1906年（明39）7月23日～1991年（平3）10月12日	
大久保　テイ子	おおくぼ　ていこ	詩	1930年（昭5）2月2日～2002年（平14）4月10日	
大熊　信行	おおくま　のぶゆき	短歌、評論、経済学	1893年（明26）2月18日～1977年（昭52）6月20日	
大籠　蘆雪	おおごもり　ろせつ	俳句	1904年（明37）4月10日～1991年（平3）11月27日	
大沢　重夫	おおさわ　しげお	詩	1901年（明34）6月18日～1994年（平6）2月3日	
大柴　甲子郎	おおしば　こうしろう	俳句	1924年（大13）3月17日～2007年（平19）6月12日	

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
大治　柳哉	おおじ　りゅうや	短歌	1909年（明42）11月19日～1997年（平9）	
太田　絢子	おおた　あやこ	短歌	1916年（大5）3月17日～2009年（平21）10月31日	
太田　比古象	おおた　ひこぞう	短歌	1904年（明37）12月7日～1996年（平8）1月28日	
太田　緋吐子	おおた　ひとし	俳句	1910年（明43）6月29日～1998年（平10）6月12日	
太田　光夫	おおた　みつお	短歌	1926年（大15）10月1日～ 2004年（平16）6月	
大塚　陽子	おおつか　ようこ	短歌	1930年（昭5）7月12日～2007年（平19）8月18日	
大津　禅良	おおつ　ぜんりょう	俳句	1896年（明29）7月22日～1988年（昭63）3月3日	
大沼　スミ	おおぬま　すみ	短歌	1917年（大6）5月9日～1991年（平3）4月2日	
大野　利子	おおの　としこ	短歌	1914年（大3）9月2日～1988年（昭63）3月16日	
大野　黙然人	おおの　もくねひと	短歌、版画	1914年（大3）7月4日～2008年（平20）5月	
大場　豊吉	おおば　とよきち	詩	1923年（大12）1月27日～没年月日不明	
おおば　比呂司	おおば　ひろし	漫画	1921年（大10）12月17日～1988年（昭63）8月18日	
大広　行雄	おおひろ　ゆきお	詩	1925年（大14）5月17日～2005年（平17）4月	
岡澤　康司	おかざわ　こうし	俳句	1922年（大11）5月31日～2006年（平18）7月15日	
小笠原　賢二	おがさわら　けんじ	編集者、批評家	1946年（昭21）4月15日～2004年（平16）10月4日	
小笠原　克	おがさわら　まさる	評論、近代文学研究	1931年（昭6）9月3日～1999年（平11）12月9日	
緒方　厚子	おがた　あつこ	俳句	1908年（明41）11月18日～1993年（平5）4月	
岡山　去風	おかやま　きょふう	短歌	1923年（大12）4月10日～1991年（平3）6月	
沖口　遼々子	おきぐち　りょうりょうし	俳句	1909年（明42）8月8日～1990年（平2）9月14日	
小国　孝徳	おぐに　たかのり	短歌	1917年（大6）5月～2010年（平22）3月3日	
奥野　健男	おくの　たけお	評論	1926年（大15）7月25日～1997年（平9）11月26日	
尾崎　道子	おざき　みちこ	詩	1933年（昭8）3月2日～1999年（平11）10月26日	
長見　義三	おさみ　ぎぞう	小説	1908年（明41）5月13日～1994年（平6）4月21日	
小田切　進	おだぎり　すすむ	評論	1924年（大13）9月13日～1992年（平4）12月20日	
小田切　秀雄	おだぎり　ひでお	評論	1916年（大5）9月10日～2000年（平12）5月24日	
小田　重子	おだ　しげこ	短歌	1894年（明27）1月15日～1989年（平元）3月22日	
小田島　思遠	おだじま　しおん	短歌	1915年（大4）7月～1989年（平元）4月	
小田　節子	おだ　せつこ	詩	1929年（昭4）4月29日～2008年（平20）8月16日	
小田　哲夫	おだ　てつお	短歌	1913年（大2）12月15日～1990年（平2）2月	
小田　基	おだ　もとい	小説	1931年（昭6）6月7日～2000年（平12）11月	
折原　きゑ女	おりはら　きえじょ	俳句	1902年（明35）5月18日～1990年（平2）4月9日	
か				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
開高　健	かいこう　たけし	小説	1930年（昭5）12月30日～1989年（平元）12月9日	
鍵谷　幸信	かぎや　ゆきのぶ	英文学、詩、評論	1930年（昭5）7月26日～1989年（平元）1月16日	
笠井　清	かさい　きよし	小説	1911年（明44）3月20日～1990年（平2）12月20日	
笠松　久子	かさまつ　ひさこ	俳句	1920年（大9）1月28日～1993年（平5）8月17日	
笠谷　紅青紫	かさや　こうせいし	俳句	1907年（明40）9月8日～1992年（平4）1月27日	
柏倉　俊三	かしわくら　しゅんぞう	英文学研究、エッセー	1898年（明31）10月21日～1996年（平8）	
片山　栄志	かたやま　えいじ	短歌	1916年（大5）11月10日～2007年（平19）8月24日	
勝又　木風雨	かつまた　もくふうう	俳句	1914年（大3）11月8日～1997年（平9）1月23日	
加藤　愛夫	かとう　あいお	詩	1902年（明35）4月19日～1979年（昭54）10月23日	
加藤　楸邨	かとう　しゅうそん	俳句	1905年（明38）5月26日～1993年（平5）7月3日	
かなまる　よしあき	かなまる　よしあき	小説	1928年（昭3）8月21日～2007年（平19）11月13日	
金谷　信夫	かなや　のぶお	俳句	1914年（大3）1月2日～1991年（平3）5月25日	
金子　きみ	かねこ　きみ	小説	1916年（大5）2月12日～2009年（平21）6月23日	
金子　静光	かねこ　せいこう	短歌	1903年（明36）9月23日～1999年（平11）4月	
金崎　葭杖	かねさき　かじょう	俳句	1912年（大元）10月15日～1996年（平8）	
鎌田　純一	かまだ　じゅんいち	小説	1934年（昭9）11月8日～2000年（平12）10月4日	
鎌田　薄氷	かまだ　はくひょう	俳句	1910年（明43）2月5日～1985年（昭60）10月	

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
亀山　正治	かめやま　しょうじ	短歌	1913年（大2）1月29日～1987年（昭62）3月9日	
菅野　茂	かやの　しげる	アイヌ文化研究	1926年（大15）6月15日～2006年（平18）5月6日	
川内　康範	かわうち　こうはん	小説	1920年（大9）2月26日～2008年（平20）4月6日	
川喜多　二郎	かわきた　じろう	民族学	1920年（大9）5月11日～2009年（平21）7月8日	
川崎　彰彦	かわさき　あきひこ	小説	1933年（昭8）9月27日～2010年（平22）2月4日	
川嶋　至	かわしま　いたる	評論	1935年（昭10）2月24日～2001年（平13）7月2日	
河　草之介	かわ　そうのすけ	俳句	1933年（昭8）1月17日～2005年（平17）1月3日	
川端　何洗	かわばた　かせん	俳句	1905年（明38）6月1日～1994年（平6）7月20日	
川端　麟太	かわばた　りんた	俳句	1919年（大8）1月16日～1987年（昭62）6月	
川辺　為三	かわべ　ためぞう	小説	1928年（昭3）11月29日～1999年（平11）4月16日	
川村　淳一	かわむら　じゅんいち	小説、短歌	1922年（大11）1月27日～1996年（平8）4月6日	
川村　清吉	かわむら　せいきち	短歌	1914年（大3）3月29日～1988年（昭63）	
川村　濤人	かわむら　とうじん	短歌	1904年（明37）11月27日～1990年（平2）11月6日	
河邨　文一郎	かわむら　ぶんいちろう	詩	1917年（大6）4月15日～2004年（平16）3月30日	
川村　弥生	かわむら　やよい	短歌	1915年（大4）3月24日～2010年（平22）7月29日	
上林　猷夫	かんばやし　みちお	詩	1914年（大3）2月21日～2001年（平13）9月10日	
き				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
木内　綾	きうち　あや	工芸	1924年（大13）7月7日～2006年（平18）11月5日	
木内　進	きうち　すすむ	詩	1908年（明41）12月20日～1990年（平2）1月9日	
菊地　京路	きくち　きょうろ	俳句	1901年（明34）10月15日～1993年（平5）2月22日	
菊地　滴翠	きくち　てきすい	俳句	1916年（大5）7月15日～2005年（平17）3月3日	
菊地　徹子	きくち　てつこ	詩	1925年（大14）5月1日～2004年（平16）2月23日	
菊村　到	きくむら　いたる	小説	1925年（大14）5月15日～1999年（平11）4月3日	
木島　始	きじま　はじめ	詩	1928年（昭3）2月4日～2004年（平16）8月14日	
北川　緑雨	きたがわ　りょくう	短歌	1912年（明45）3月1日～1994年（平6）2月11日	
北　光星	きた　こうせい	俳句	1923年（大12）3月5日～2001年（平13）3月17日	
北嶋　虚石	きたじま　きょせき	俳句	1923年（大12）3月20日～1990年（平2）9月13日	
北野　洸	きたの　こう	小説	1921年（大10）7月30日～2010年（平22）5月8日	
北見　恂吉	きたみ　じゅんきち	短歌	1902年（明35）2月7日～1990年（平2）11月13日	
北　杜夫	きた　もりお	小説	1927年（昭2）5月1日～2011年（平23）10月24日	
木下　順一	きのした　じゅんいち	小説	1929年（昭4）4月10日～2005年（平17）10月27日	
木下　春影	きのした　しゅんえい	俳句	1897年（明30）12月15日～1993年（平5）7月21日	
木下　路石	きのした　ろせき	俳句	1926年（大15）8月20日～1991年（平3）2月1日	
木野　工	きの　たくみ	小説	1920年（大9）6月15日～2008年（平20）8月3日	
木村　久邇典	きむら　くにのり	評論	1923年（大12）7月11日～2000年（平12）4月12日	
木村　哲郎	きむら　てつろう	詩	1936年（昭11）9月12日～2000（平12）8月11日	
曲線　立歩	きょくせん　りっぽ	川柳	1910年（明43）1月23日～2003年（平15）5月	
く				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
九鬼　伍平	くき　ごへい	小説	1932年（昭7）5月3日～2002年（平14）3月17日	
草路　れい	くさじ　れい	短歌	1911年（明44）10月13日～1994年（平6）2月	
草野　心平	くさの　しんぺい	詩	1903年（明36）5月12日～1988年（昭63）11月12日	
草森　紳一	くさもり　しんいち	評論	1938年（昭13）2月23日～2008年（平20）3月20日	
串田　孫一	くしだ　まごいち	哲学、詩、随筆	1915年（大4）11月12日～2005年（平17）7月8日	
九島　勝太郎	くしま　かつたろう	文化運動	1906年（明39）9月20日～1993年（平5）9月26日	
九津見　房子	くづみ　ふさこ	社会主義運動	1890年（明23）10月18日～1980年（昭55）7月15日	
國松　登	くにまつ　のぼる	絵画、俳句	1907年（明40）5月6日～1994年（平6）4月18日	
窪田　薫	くぼた　かおる	俳句	1924年（大13）3月7日～1999年（平11）10月4日	
窪田　精	くぼた　せい	小説	1921年（大10）4月15日～2004年（平16）2月29日	
久保　吉春	くぼ　よしはる	郷土史	1924年（大13）3月8日～1989年（平元）8月14日	
倉島　齊	くらしま　せい	小説・シナリオ	1932年（昭7）1月22日～2011年（平23）10月27日	

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
蔵原　惟人	くらはら　これひと	評論	1902年（明35）1月26日～1991年（平3）1月25日	
郡司　正勝	ぐんじ　まさかつ	演劇評論	1913年（大2）7月7日～1998年（平10）4月15日	
こ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
小池　嘉四郎	こいけ　かしろう	俳句	1913年（大2）2月16日～1994年（平6）4月25日	
小池　喜孝	こいけ　きこう	民衆史研究	1916年（大5）9月11日～2003年（平15）11月28日	
小池　次陶	こいけ　じとう	俳句	1910年（明43）11月10日～1996年（平8）5月19日	
越郷　黙朗	こしごう　もくろう	川柳	1912年（明45）7月18日～1996年（平8）5月20日	
後藤　軒太郎	ごとう　けんたろう	俳句	1919年（大8）2月8日～2008年（平20）3月11日	
後藤　竜二	ごとう　りゅうじ	児童文学	1943年（昭18）6月24日～2010年（平22）7月3日	
小林　金三	こばやし　きんぞう	評論	1923年（大12）7月4日～2010年（平22）7月18日	
小林　孝虎	こばやし　たかとら	短歌	1923年（大12）5月3日～2004年（平16）12月19日	
小林　とし子	こばやし　としこ	俳句	1926年（大15）6月17日～1991年（平3）5月9日	
小松　瑛子	こまつ　えいこ	詩	1929年（昭4）5月26日～2000年（平12）5月30日	
小松　茂	こまつ　しげる	小説	1923年（大12）6月27日～2007年（平19）6月15日	
小松　伸六	こまつ　しんろく	抽文学研究、評論	1914年（大3）9月28日～2006年（平18）4月20日	
小森　利夫	こもり　としお	短歌	1908年（明41）6月1日～1994年（平6）6月5日	
小森　汎	こもり　ひろし	短歌	1915年（大4）7月5日～1994年（平6）7月	
近藤　潤一	こんどう　じゅんいち	俳句	1931年（昭6）2月1日～1994年（平6）9月16日	
近藤　芳美	こんどう　よしみ	短歌	1913年（大2）5月5日～2006年（平18）6月21日	
金野　知足	こんの　ちそく	俳句	1898年（明31）12月28日～1990年（平2）6月25日	
さ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
犀川　野火男	さいかわ　のびお	俳句	1928年（昭3）9月20日～2002年（平15）12月22日	
斎藤　邦男	さいとう　くにお	詩	1921年（大10）2月21日～2006年（平18）2月13日	
斎藤　大雄	さいとう　だいゆう	川柳	1933年（昭8）2月18日～2008年（平20）6月29日	
斎藤　史	さいとう　ふみ	短歌	1909年（明42）2月14日～2002年（平14）5月26日	
坂井　一郎	さかい　いちろう	詩	1915年（大4）1月27日～1990年（平11）3月20日	
坂井　まつば女	さかい　まつばじょ	俳句	1892年（明25）4月24日～1986年（昭61）7月28日	
榊原　雪毬子	さかきばら　せつきゅうし	俳句	1913年（大2）4月1日～1993年（平5）9月21日	
坂口　波路	さかぐち　はろ	俳句	1917年（大6）8月2日～2006年（平18）5月1日	
坂田　文子	さかた　ふみこ	短歌、俳句	1916年（大5）7月24日～1999年（平11）8月	
坂本　一亀	さかもと　かずき	編集	1921年（大10）12月8日～2002年（平14）9月28日	
坂本　幸四郎	さかもと　こうしろう	評論	1924年（大13）9月19日～1999年（平11）5月10日	
桜井　勝美	さくらい　かつみ	詩、評論	1908年（明41）2月20日～1995年（平7）7月24日	
笹尾　礼三	ささお　れいぞう	俳句	1928年（昭3）12月15日～1991年（平3）4月26日	
佐々木　あきら	ささき　あきら	俳句	1897年（明30）6月6日～1996年（平8）	
佐々木　逸郎	ささき　いつろう	詩、シナリオ	1927年（昭2）11月28日～1992年（平4）1月17日	
佐々木　子興	ささき　しこう	俳句	1910年（明43）3月1日～1995年（平7）4月10日	
佐々木　孝丸	ささき　たかまる	劇作、俳優	1898年（明31）1月30日～1986年（昭61）12月28日	
佐々木　武観	ささき　たけみ	劇作	1923年（大12）12月28日～2000年（平12）7月22日	
佐々木　丸美	ささき　まるみ	小説	1949年（昭24）1月23日～2005年（平17）12月25日	
佐々木　露舟	ささき　ろしゅう	俳句	1912年（大元）10月23日～2007年（平19）3月10日	
笹沢　左保	ささざわ　さほ	小説	1930年（昭5）11月15日～2002年（平14）10月21日	
佐多　稲子	さた　いねこ	小説	1904年（明37）6月1日～1998年（平10）10月12日	
颯手　達治	さつて　たつじ	小説	1924年（大13）6月13日～2009年（平21）4月11日	
佐藤　鴬渓	さとう　おうけい	川柳	1906年（明39）1月10日～2002年（平14）4月	
佐藤　喜一	さとう　きいち	小説、評論	1911年（明44）12月10日～1992年（平4）3月2日	
佐藤　洸世	さとう　こうせい	俳句	1911年（明44）2月28日～1986年（昭61）7月20日	
佐藤　佐太郎	さとう　さたろう	短歌	1909年（明42）11月13日～1987年（昭62）8月8日	
佐藤　しげ	さとう　しげ	詩	1916年（大5）7月17日～1993年（平5）8月9日	
佐藤　たすく	さとう　たすく	俳句	1903年（明36）10月4日～1994年（平6）10月9日	
佐藤　忠良	さとう　ちゅうりょう	彫刻	1912年（明45）7月4日～2011年（平23）3月30日	

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
佐藤　初夫	さとう　はつお	詩、短歌	1910年（明43）6月12日～1992年（平4）12月17日	
佐藤　晴生	さとう　はるお	俳句	1918年（大7）6月20日～2006年（平18）10月19日	
佐藤　泰志	さとう　やすし	小説	1949年（昭24）4月26日～1990年（平2）10月10日	
里見　純世	さとみ　じゅんせい	短歌	1919年（大8）12月～2010年（平22）6月20日	
澤田　誠一	さわだ　せいいち	小説	1920年（大9）9月18日～2007年（平19）6月5日	
澤野　久雄	さわの　ひさお	小説	1912年（大元）12月30日～1992年（平4)12月17日	
し				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
塩野谷　秋風	しおのや　しゅうふう	俳句	1909年（明42）10月10日～1986年（昭61）2月27日	
志賀　磯子	しが　いそこ	短歌	1915年（大4）12月2日～1991年（平3）	
重兼　芳子	しげかね　よしこ	小説	1927年（昭2）3月7日～1993年（平5）8月22日	
滋野　透子	しげの　すみこ	児童文学	1921年（大10）5月4日～2000年（平12）11月14日	
重森　直樹	しげもり　なおき	小説	1926年（大15）3月15日～2003年（平15）5月16日	
志田　白雨	しだ　はくう	俳句	1907年（明40）1月22日～2005年（平17）3月29日	
柴生田　稔	しぼうた　みのる	短歌、国文学	1904年（明37）6月26日～1991年（平3）8月20日	
島　恒人	しま　こうじん	俳句	1924年（大13）2月13日～2000年（平12）3月16日	
清水　堅一	しみず　けんいち	短歌	1917年（大6）2月8日～2005年（平17）11月	
志水　汎	しみず　はん	短歌	1910年（明43）5月1日～2001年（平13）	
清水　康雄	しみず　やすお	詩、出版	1932年（昭7）2月4日～1999年（平11）2月21日	
下村　保太郎	しもむら　やすたろう	詩	1909年（明42）8月15日～1985年（昭60）12月4日	
白井　長流水	しらい　ちょうりゅうすい	俳句	1894年（明27）1月29日～1986年（昭61）10月13日	
城山　三郎	しろやま　さぶろう	小説	1927年（昭2）8月12日～2007年（平19）3月22日	
神保　光太郎	じんぼ　こうたろう	詩	1905年（明38）11月29日～1990年（平2）10月24日	
新間　進一	しんま　しんいち	国文学研究	1917年（大6）9月3日～2005年（平17）12月11日	
新明　紫明	しんみょう　しめい	俳句	1928年（昭3）8月13日～2006年（平18）4月3日	
新明　セツ子	しんみょう　せつこ	俳句	1930年（昭5）10月14日～2011年（平23）8月22日	
す				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
杉浦　明平	すぎうら　みんぺい	評論、小説	1913年（大2）6月9日～2001年（平13）3月14日	
杉本　春生	すぎもと　はるお	詩	1926年（大15）3月21日～1990年（平2）7月6日	
鈴木　恭三	すずき　きょうぞう	俳句	1934年（昭9）10月30日～1992年（平4）5月5日	
鈴木　重吉	すずき　じゅうきち	米文学	1916年（大5）9月14日～2002年（平14）11月30日	
鈴木　青光	すずき　せいこう	俳句	1927年（昭2）1月3日～1994年（平6）6月1日	
鈴木　青柳	すずき　せいりゅう	川柳	1908年（明41）8月13日～1999年（平11）4月	
鈴木　杜世春	すずき　とよはる	短歌	1925年（大14）5月15日～1996年（平8）	
せ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
青野　麦秋	せいの　ばくしゅう	俳句	1925年（大14）3月20日～1988年（昭63）8月16日	
瀬戸　哲郎	せと　てつろう	詩	1919年（大8）1月21日～1985年（昭60）10月22日	
瀬沼　茂樹	せぬま　しげき	評論	1904年（明37）10月6日～1988年（昭63）8月14日	
そ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
園田　夢蒼花	そのだ　むそうか	俳句	1913年（大2）12月15日～2001年（平13）6月1日	
た				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
高木　彬光	たかぎ　あきみつ	小説	1920年（大9）9月25日～1995年（平7）9月9日	
高木　牛花	たかぎ　ぎゅうか	俳句	1913年（大2）1月27日～1991年（平3）6月5日	
高倉　新一郎	たかくら　しんいちろう	農学、郷土史	1902年（明35）11月23日～1990年（平2）6月7日	
高瀬　白洋	たかせ　はくよう	俳句	1908年（明41）12月8日～2003年（平15）1月15日	
高田　敏子	たかだ　としこ	詩	1914年（大3）9月16日～1989年（平元）5月28日	
高田　光穂	たかだ　みつぼ	川柳	1922年（大11）3月18日～1993年（平5）3月	
高野　斗志美	たかの　としみ	評論	1929年（昭4）7月7日～2002年（平14）7月9日	
高橋　揆一郎	たかはし　きいちろう	小説	1928年（昭3）4月10日～2007年（平19）1月31日	
高橋　貞俊	たかはし　さだとし	俳句	1913年（大2）5月15日～1999年（平11）3月16日	
高橋　英衛	たかはし　ひでえい	短歌	1908年（明41）3月8日～1993年（平5）12月	

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
高橋　笛美	たかはし　ふえみ	俳句	1928年（昭3）3月10日～2010年（平22）4月19日	
高橋　義孝	たかはし　よしたか	独文学研究・評論	1913年（大2）3月27日～1995年（平7）7月21日	
高橋　和光	たかはし　わこう	短歌	1911年（明44）12月2日～2003年（平15）9月23日	
高山　亮二	たかやま　りょうじ	近代文学研究	1916年（大5）9月27日～2001年（平13）10月17日	
滝川　句楽	たきかわ　くらく	川柳	1909年（明42）3月1日～1987年（昭62）1月	
琢磨　緑泉	たくま　りょくせん	俳句	1923年（大12）3月31日～1993年（平5）6月23日	
匠　秀夫	たくみ　ひでお	美術評論	1924年（大13）11月28日～1994年（平6）9月14日	
竹内　てるよ	たけうち　てるよ	詩	1904年（明37）12月21日～2001年（平13）2月4日	
竹岡　和田男	たけおか　わだお	美術、映画評論	1928年（昭3）10月21日～2000年（平12）9月4日	
武田　繁太郎	たけだ　しげたろう	小説	1919年（大8）8月20日～1986年（昭61）6月8日	
武田　隆子	たけだ　たかこ	詩	1909年（明42）1月14日～2008年（平20）5月25日	
武田　友寿	たけだ　ともじゅ	評論	1931年（昭6）1月16日～1991年（平3）2月1日	
竹中　雨閣	たけなか　うかく	俳句	1913年（大2）1月13日～1988年（昭63）3月29日	
立野　正之	たての　まさゆき	短歌	1902年（明35）8月9日～1999年（平11）5月	
館　美保子	たて　みほこ	詩	1893年（明26）3月11日～1990年（平2）12月8日	
田中　小実昌	たなか　こみまさ	小説	1925年（大14）4月29日～2000年（平12）2月27日	
田中　北斗	たなか　ほくと	俳句	1922年（大11）3月15日～2005年（平17）2月27日	
棚川　音一	たなかわ　おといち	短歌	1922年（大11）6月20日～1994年（平6）11月	
谷口　広志	たにぐち　ひろし	文化運動	1917年（大6）8月23日～1990年（平2）	
田上　義也	たのうえ　よしや	建築	1899年（明32）5月5日～1991年（平3）8月17日	
玉川　雄介	たまがわ　ゆうすけ	児童文学	1910年（明43）2月10日～2009年（平21）12月18日	
玉手　北肇	たまて　ほくちょう	俳句	1920年（大9）11月6日～1988年（昭63）8月30日	
田宮　慧子	たみや　けいこ	小説	1927年（昭2）1月16日～1992年（平4）10月9日	
田宮　虎彦	たみや　とらひこ	小説	1911年（明44）8月5日～1988年（昭63）4月9日	
田村　哲三	たむら　てつみ	短歌	1930年（昭5）4月10日～2000年（平12）7月26日	
田村　昌由	たむら　まさよし	詩	1913年（大2）5月17日～1994年（平6）5月29日	
田元　北史	たもと　ほくし	俳句	1910年（明43）9月20日～1994年（平6）5月23日	
ち				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
千田　三四郎	ちだ　さんしろう	小説	1922年（大11）5月18日～2005年（平17）8月2日	
長　光太	ちょう　こうた	詩	1907年（明40）4月8日～1999年（平11）7月10日	
つ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
塚本　邦雄	つかもと　くにお	短歌	1920年（大09）8月7日～2005年（平17）6月9日	
辻岡　一羊	つじおか　いちよう	俳句	1906年（明39）6月23日～1995年（平7）1月2日	
辻　邦生	つじ　くにお	小説	1925年（大14）9月24日～1999年（平11）7月29日	
津田　露木	つだ　ろぼく	俳句	1912年（明45）2月1日～1991年（平3）5月1日	
土谷　重朗	つちや　じゅうろう	短歌	1904年（明37）3月10日～1994年（平6）1月	
土屋　文明	つちや　ぶんめい	短歌	1890年（明23）9月18日～1990年（平2）12月8日	
綱淵　謙錠	つなぶち　けんじょう	小説	1924年（大13）9月21日～1996年（平8）4月14日	
鶴田　知也	つるた　ともや	小説	1902年（明35）2月19日～1988年（昭63）4月1日	
て				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
手塚　義隆	てづか　よしたか	短歌	1924年（大13）4月19日～1999年（平11）7月1日	
寺久保　友哉	てらくぼ　ともや	小説	1937年（昭12）6月4日～1999年（平11）1月22日	
寺師　治人	てらし　はるひと	短歌	1916年（大5）9月14日～2003年（平15）5月21日	
寺島　露月	てらしま　ろげつ	俳句	1924年（大13）12月1日～1985年（昭60）10月	
と				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
塔崎　健二	とうざき　けんじ	評論	1944年（昭19）2月14日～1995年（平7）	
百目鬼　恭三郎	どうめき　きょうざぶろう	評論	1926年（大15）2月8日～1991年（平3）3月31日	
堂本　茂	どうもと　しげる	小説	1924年（大13）8月2日～1997年（平9）11月22日	
戸川　幸夫	とがわ　ゆきお	小説	1912年（明45）4月19日～2004年（平16）5月1日	
所　雅彦	ところ　まさひこ	小説	1935年（昭10）7月5日～2011年（平23）	

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
戸田　正彦	とだ　まさひこ	新聞記者	1924年（大13）1月22日～1994年（平6）7月23日	
富岡　木之介	とみおか　きのすけ	俳句	1919年（大8）4月5日～1995年（平7）1月28日	
富原　孝	とみはら　たかし	詩	1920年（大9）7月15日～2006年（平18）3月8日	
鳥居　省三	とりい　しょうぞう	評論	1925年（大14）8月1日～2006年（平18）5月4日	
な				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
中紙　輝一	なかがみ　きいち	小説	1922年（大11）11月18日～1992年（平4）8月19日	
中越　華章	なかごし　かしょう	俳句	1908年（明41）2月16日～1988年（昭63）6月4日	
中沢　茂	なかざわ　しげる	小説	1909年（明42）1月4日～1997年（平9）9月1日	
長沢　としを	ながさわ　としお	川柳	1920年（大9）9月8日～2000年（平12）12月	
長沢　美津	ながさわ　みつ	短歌	1905年（明38）11月4日～2005年（平17）4月26日	
中嶋　立	なかじま　りつ	俳句	1933年（昭8）3月28日～2002年（平15）6月26日	
中台　泰史	なかだい　たいし	俳句	1923年（大12）5月26日～1994年（平6）6月27日	
永田　耕一郎	ながた　こういちろう	俳句	1918年（大7）9月20日～2006年（平18）8月20日	
永田　秀郎	ながた　ひでろう	劇作	1934年（昭9）7月16日～2009年（平21）8月5日	
中田　稔	なかた　みのる	俳句	1921年（大10）11月2日～1986年（昭61）7月	
永田　洋平	ながた　ようへい	動物文学、詩	1917年（大6）10月10日～2002年（平14）1月19日	
長野　京子	ながの　きょうこ	児童文学	1914年（大3）1月1日～2008年（平20）2月18日	
中村　光夫	なかむら　みつお	評論	1911年（明44）2月5日～1988年（昭63）7月12日	
中山　周三	なかやま　しゅうぞう	短歌	1916年（大5）8月13日～1999年（平11）9月22日	
中山　照華	なかやま　しょうか	俳句	1883年（明26）1月15日～1986年（昭61）12月17日	
中山　信	なかやま　のぶ	短歌	1920年（大9）6月9日～2004年（平16）10月2日	
中山　勝	なかやま　まさる	短歌	1906年（明39）3月24日～1989年（平元）8月19日	
名島　俊子	なじま　としこ	短歌	1912年（明45）8月3日～1995年（平7）6月11日	
夏堀　正元	なつぼり　まさもと	小説	1925年（大14）1月30日～1999年（平11）1月4日	
浪花　剛	なにわ　つよし	出版	1924年（大13）2月9日～2010年（平22）11月19日	
鍋山　隆明	なべやま　りゅうめい	短歌	1917年（大6）6月20日～1988年（昭63）4月26日	
並川　公	なみかわ　こう	詩	1915年（大4）4月18日～1992年（平2）7月1日	
成田　昭男	なりた　あきお	俳句	1927年（昭2）10月10日～2007年（平19）3月16日	
成田　智世子	なりた　ちせこ	俳句	1929年（昭4）11月22日～1988年（昭63）12月30日	
に				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
新妻　博	にいづま　ひろし	詩、俳句	1917年（大6）9月30日～2012年（平24）2月3日	
西川　青濤	にしかわ　せいとう	短歌	1905年（明38）3月22日～1994年（平6）2月	
錦　俊坊	にしき　としぼう	川柳	1923年（大12）5月28日～1997年（平9）3月	
西谷　能雄	にしたに　よしお	出版	1913年（大2）9月8日～1995年（平7）4月29日	
西野　辰吉	にしの　たつきち	小説	1916年（大5）2月12日～1999年（平11）10月21日	
西村　一平	にしむら　いっぺい	短歌	1911年（明44）12月10日～2001年（平13）9月21日	
西村　寿行	にしむら　じゅこう	小説	1930年（昭5）11月3日～2007年（平19）8月23日	
西村　信	にしむら　まこと	文化運動	1935年（昭10）10月20日～2000年（平12）11月3日	
庭田　竹堂	にわた　ちくどう	俳句	1903年（明36）2月1日～1988年（昭63）12月30日	
丹羽　文雄	にわ　ふみお	小説	1904年（明37）11月22日～2005年（平17）4月20日	
ぬ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
沼田　寿枝女	ぬまた　すえじょ	俳句	1918年（大7）3月28日～2007年（平19）3月9日	
の				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
野口　冨士男	のぐち　ふじお	小説	1911年（明44）7月4日～1993年（平5）11月22日	
野田　寿雄	のだ　ひさお	国文学研究	1913年（大2）2月23日～2004年（平16）4月8日	
野間　宏	のま　ひろし	小説	1915年（大4）2月23日～1991年（平3）1月2日	
野村　良雄	のむら　ながお	詩	1931年（昭6）2月20日～2012年（平24）1月	
は				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
博田　草樹	はかた　そうじゅ	短歌	1912年（大元）12月1日～1999年（平11）1月	
萩原　葉子	はぎわら　ようこ	小説	1920年（大9）9月4日～2005年（平17）7月1日	

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
橋本　佳代女	はしもと　かよじょ	俳句	1905年（明38）9月3日～1989年（平元）1月15日	
橋本　徳寿	はしもと　とくじゅ	短歌	1894年（明27）9月10日～1989年（平元）	
長谷川　四郎	はせがわ　しろう	小説	1909年（明42）6月7日～1987年（昭62）4月19日	
長谷川　正治	はせがわ　まさはる	短歌、書道	1913年（大2）1月27日～1992年（平4）2月	
長谷川　みさを	はせがわ　みさお	詩	1928年（昭3）2月26日～2004年（平16）3月	
畑沢　草羽	はたざわ　そうう	短歌	1913年（大2）7月9日～1988年（昭63）12月	
羽田野　幸子	はたの　ゆきこ	詩	1914年（大3）9月17日～1995年（平7）8月13日	
秦　保二郎	はた　やすじろう	詩	1913年（大2）12月14日～1997年（平9）8月19日	
畑山　博	はたやま　ひろし	小説	1935年（昭10）5月18日～2001年（平13）9月2日	
八匠　衆一	はっしょう　しゅういち	小説	1917年（大6）3月30日～2004年（平16）6月21日	
浜　一郎	はま　いちろう	短歌	1915年（大4）2月6日～1990年（平2）1月	
林　直樹	はやし　なおき	詩	1934年（昭9）11月23日～2006年（平18）9月9日	
林　白言	はやし　はくげん	エッセー	1923年（大12）6月23日～1995年（平7）1月26日	
原子　公平	はらこ　こうへい	俳句	1919年（大8）9月14日～2004年（平16）7月18日	
原田　康子	はらだ　やすこ	小説	1928年（昭3）1月12日～2009年（平21）10月20日	
針山　和美	はりやま　かずみ	小説	1930年（昭5）7月12日～2003年（平15）7月11日	
春山　行夫	はるやま　ゆきお	詩、評論、文化史	1902年（明35）7月1日～1994年（平6）10月10日	
萬上　義次	ばんじょう　よしつぐ	短歌	1911年（明44）3月19日～1988年（昭63）8月	
半村　良	はんむら　りょう	小説	1933年（昭8）10月27日～2002年（平14）3月4日	
ひ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
菱川　善夫	ひしかわ　よしお	短歌、評論	1929年（昭4）6月3日～2007年（平19）12月15日	
氷室　冴子	ひむろ　さえこ	小説	1957年（昭32）1月11日～2008年（平20）6月6日	
平野　直	ひらの　ただし	小説	1902年（明35）3月28日～1986年（昭61）4月23日	
平松　勤	ひらまつ　つとむ	短歌	1913年（大2）3月5日～2001年（平13）8月22日	
平山　広	ひらやま　ひろし	近代文学研究	1926年（大15）2月20日～2001年（平13）8月3日	
弘瀬　正	ひろせ　ただし	小説	1914年（大3）12月30日～1988年（昭63）8月3日	
広中　白骨	ひろなか　はっこつ	俳句	1903年（明36）8月1日～1991年（平3）2月4日	
ふ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
深沢　七郎	ふかざわ　しちろう	小説	1914年（大3）1月29日～1987年（昭62）8月18日	
深沢　伸二	ふかざわ　しんじ	俳句	1927年（昭2）10月29日～1995年（平7）8月21日	
福田　清人	ふくだ　きよと	小説、児童文学	1904年（明37）11月29日～1995年（平7）6月13日	
藤枝　静男	ふじえだ　しずお	小説	1907年（明40）12月20日～1993年（平5）4月16日	
藤川　日出尚	ふじかわ　ひでお	詩	1934年（昭9）4月28日～2004年（平16）6月7日	
藤田　旭山	ふじた　きょくざん	俳句	1903年（明36）1月16日～1991年（平3）3月6日	
藤田　光則	ふじた　みつのり	詩	1922年（大11）3月1日～2000年（平12）1月13日	
藤本　英夫	ふじもと　ひでお	考古学研究	1927年（昭和2）3月23日～2005年（平17）12月24日	
藤原　定	ふじわら　さだむ	詩、評論	1905年（明38）7月17日～1990年（平2）9月17日	
古川　善盛	ふるかわ　よしもり	詩	1927年（昭2）12月8日～2006年（平18）1月	
古瀬　吟風楼	ふるせ　ぎんぷうろう	俳句	1901年（明34）9月2日～1989年（平元）4月30日	
ほ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
星野　松路	ほしの　しょうじ	俳句	1927年（昭2）1月20日～1999年（平11）1月20日	
細谷　徹之助	ほそや　てつのすけ	短歌	1915年（大4）12月5日～1988年（昭63）12月5日	
堀田　善衛	ほった　よしえ	小説	1918年（大7）7月17日～1998年（平10）9月5日	
堀越　義三	ほりこし　よしぞう	詩	1923年（大12）2月26日～2003年（平15）4月19日	
本田　錦一郎	ほんだ　きんいちろう	英文学研究	1926年（大15）11月11日～2007年（平19）1月2日	
本多　秋五	ほんだ　しゅうご	評論	1908年（明41）9月22日～2001年（平13）1月13日	
本多　ミサヲ	ほんだ　みさお	短歌	1918年（大7）8月20日～1989年（平元）7月30日	
本間　保	ほんま　たもつ	短歌	1922年（大11）7月25日～1992年（平4）7月	
本間　竜二郎	ほんま　りゅうじろう	短歌	1910年（明43）3月30日～1994年（平6）5月7日	
ま				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
前川　康男	まえかわ　やすお	児童文学	1921年（大10）12月25日～2002年（平14）10月14日	
前野　聖子	まえの　せいこ	俳句	1926年（大15）3月12日～2007年（平19）12月27日	
増田　羽衣	ますだ　うい	俳句	1907年（明40）4月1日～1991年（平3）12月10日	
益田　喜頓	ますだ　きいとん	演劇	1909年（明42）9月11日～1993年（平5）12月1日	
増谷　龍三	ますたに　りゅうぞう	短歌	1930年（昭5）1月3日～1996年（平8）5月27日	
松浦　睦子	まつうら　むつこ	詩	1931年（昭6）3月5日～1998年（平10）1月29日	
松岡　繁雄	まつおか　しげお	詩	1921年（大10）4月30日～1990年（平3）12月8日	
松尾　正路	まつお　まさみち	仏文学研究、エッセー	1905年（明38）1月7日～1991年（平3）3月26日	
松田　貞夫	まつだ　さだお	評論	1930年（昭5）4月5日～1999年（平11）9月	
松田　葉留枝	まつだ　はるえ	川柳	1906年（明39）5月27日～2001年（平13）10月	
松永　伍一	まつなが　ごいち	詩、評論	1930年（昭5）4月22日～2008年（平20）3月3日	
松原　良輝	まつばら　よしてる	詩	1931年（昭6）6月3日～2005年（平18）1月	
松本　清張	まつもと　せいちょう	小説	1909年（明42）2月12日～1992年（平4）8月4日	
間所　祥司	まどころ　しょうじ	俳句	1935年（昭10）7月14日～1998年（平10）8月3日	
丸木　俊	まるき　とし	絵画	1912年（明45）2月11日～2000年（平12）1月13日	
み				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
三浦　綾子	みうら　あやこ	小説	1922年（大11）4月25日～1999年（平11）10月12日	
三浦　哲郎	みうら　てつお	小説	1931年（昭6）3月16日～2010年（平22）8月29日	
三浦　敏之	みうら　としゆき	短歌	1922年（大11）4月1日～1992年（平4）1月	
三木　澄子	みき　すみこ	小説、児童文学	1909年（明42）1月2日～1988年（昭63）4月16日※生年については諸説あり	
三沢　坑子	みさわ　こうし	俳句	1915年（大4）7月15日～1989年（平元）4月19日	
水口　幾代	みずぐち　いくよ	短歌	1914年（大3）7月8日～1995年（平7）5月16日	
水谷　準	みずたに　じゅん	小説	1904年（明37）3月5日～2001年（平13）3月20日	
三谷　木の実	みたに　このみ	詩	1910年（明43）　1月8日～2009年（平21）3月5日	
水上　勉	みなかみ　つとむ	小説	1919年（大8）3月8日～2004年（平16）9月8日	
宮口　良朔	みやぐち　りょうさく	短歌	1923年（大12）1月26日～1997年（平9）	
三宅　草木	みやけ　そうもく	俳句	1907年（明40）2月28日～1993年（平5）5月13日	
宮崎　正夫	みやざき　まさお	短歌	1940年（昭15）8月15日～2006年（平18）1月	
宮崎　芳男	みやざき　よしお	短歌	1901年（明34）9月1日～1989年（平元）5月26日	
宮田　千恵	みやた　ちえ	短歌	1926年（大15）9月13日～2007年（平19）2月	
宮田　陽之介	みやた　ようのすけ	俳句	1902年（明35）12月20日～1994年（平6）4月4日	
宮西　頼母	みやにし　たのも	短歌	1918年（大7）2月11日～2006年（平18）2月	
宮野　駿	みやの　しゅん	小説	1923年（大12）5月12日～2007年（平19）6月11日	
宮部　鳥巣	みやべ　ちょうそう	俳句	1921年（大10）9月19日～2007年（平19）5月29日	
宮本　顕治	みやもと　けんじ	政治、評論	1908年（明41）10月17日～2007年（平19）7月18日	
宮本　貞子	みやもと　さだこ	短歌	1932年（昭7）7月9日～1999年（平11）11月	
宮脇　俊三	みやわき　しゅんぞう	紀行	1926年（大15）12月9日～2003年（平15）3月26日	
む				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
向井　豊昭	むかい　とよあき	小説	1933年（昭8）11月14日～2008年（平20）6月30日	
村上　綾朗	むらかみ　あやお	短歌	1929年（昭4）2月24日～2005年（平17）7月	
村上　元三	むらかみ　げんぞう	小説	1910年（明43）3月14日～2006年（平18）4月3日	
村木　雄一	むらき　ゆういち	詩	1907年（明40）10月3日～1987年（昭62）9月23日	
村田　和歌子	むらた　わかこ	詩	1917年（大6）2月26日～1996年（平8）6月13日	
め				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
目黒　草水	めぐろ　そうすい	短歌	1907年（明40）4月20日～1990年（平2）2月1日	
も				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
茂木　健太郎	もぎ　けんたろう	短歌	1915年（大4）9月13日～1990年（平2）1月29日	
本山　哲朗	もとやま　てつろう	川柳	1917年（大6）10月1日～2004年（平16）10月	
森　澄雄	もり　すみお	俳句	1919年（大8）2月28日～2010年（平22）8月18日	
森本　三郎	もりもと　さぶろう	詩、画家	1909年（明42）11月8日～1987年（昭62）	

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
森山　啓	もりやま　けい	小説	1904年（明37）3月10日～1991年（平3）7月26日	
や				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
八重　樫実	やえがし　みのる	小説	1922年（大11）11月1日～1999年（平11）11月29日	
八木沢　不凍	やぎさわ　ふとう	俳句	1924年（大13）4月19日～1994年（平6）3月23日	
八木　義徳	やぎ　よしのり	小説	1911年（明44）10月21日～1999年（平11）11月9日	
社　八郎	やしろ　はちろう	俳句、川柳	1913年（大2）3月2日～1989年（平元）6月26日	
八森　虎太郎	やつもり　とらたろう	詩	1914年（大3）6月12日～1999年（平12）10月24日	
八剣　浩太郎	やつるぎ　こうたろう	小説	1925年（大14）10月23日～2009年（平21）6月	
藪　禎子	やぶ　ていこ	近代文学研究	1930年（昭5）3月29日～2008年（平20）10月26日	
山内　栄治	やまうち　えいじ	詩	1915年（大4）2月8日～2009年（平21）3月6日	
山川　力	やまかわ　つとむ	エッセー、評論	1913年（大2）1月19日～2001年（平13）8月8日	
山岸　巨狼	やまぎし　きょろう	俳句	1910年（明43）3月22日～1997年（平9）4月28日	
山口　誓子	やまぐち　せいし	俳句	1901年（明34）11月3日～1994年（平6）3月26日	
山口　青邨	やまぐち　せいそん	俳句	1892年（明25）5月10日～1988年（昭63）12月15日	
山崎　剛平	やまざき　ごうへい	短歌、出版	1901年（明34）6月2日～1996年（平8）7月8日	
山路　ひろ子	やまじ　ひろこ	小説	1937年（昭12）10月18日～1994年（平6）10月	
山田　昭夫	やまだ　あきお	評論	1928年（昭3）1月2日～2004年（平16）9月15日	
山田　伍市	やまだ　ごいち	詩	1930年（昭5）3月17日～2001年（平13）9月15日	
山田　順三	やまだ　じゅんぞう	詩	1930年（昭5）5月28日～2005年（平17）7月23日	
山田　清三郎	やまだ　せいざぶろう	小説、評論	1896年（明29）6月13日～1987年（昭62）9月30日	
山田　大雪槍	やまだ　だいせつそう	俳句	1900年（明33）1月5日～1993年（平5）10月1日	
山田　秀三	やまだ　ひでぞう	アイヌ文化	1899年（明32）6月30日～1992年（平4）7月28日	
山田　風太郎	やまだ　ふうたろう	小説	1922年（大11）1月4日～2001年（平13）7月28日	
山田　政明	やまだ　まさあき	詩	1934年（昭9）6月5日～2007年（平19）6月15日	
山田　緑光	やまだ　りょくこう	俳句	1917年（大6）7月25日～2012年（平24）2月7日	
山室　静	やまむろ　しずか	詩、評論	1906年（明39）12月15日～2000年（平12）3月23日	
山本　健吉	やまもと　けんきち	評論	1907年（明40）4月26日～1988年（昭63）5月7日	
山本　千里	やまもと　せんり	俳句	1928年（昭3）10月10日～1992年（平4）7月2日	
山本　太郎	やまもと　たろう	詩	1925年（大14）11月8日～1988年（昭63）11月5日	
よ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
横井　みつる	よこい　みつる	短歌	1917年（大6）11月25日～1998年（平10）9月23日	
横田　庄八	よこた　しょうはち	短歌	1905年（明38）2月15日～1997年（平9）3月26日	
横道　秀川	よこみち　しゅうせん	俳句	1910年（明43）2月22日～1998年（平10）6月2日	
与謝野　鉄幹	よさの　てつかん	短歌、詩	1873年（明6）2月26日～1935年（昭10）3月26日	
吉岡　秋帆影	よしおか　しゅうはんえい	俳句	1907年（明40）11月21日～1993年（平5）12月5日	
吉川　泰夫	よしかわ　やすお	短歌	1906年（明39）12月14日～1994年（平6）4月	
吉田　乙丸	よしだ　おとまる	短歌	1908年（明41）7月29日～1990年（平2）8月	
吉田　寿人	よしだ　ひさと	短歌	1916年（大5）6月1日～1989年（平元）9月24日	
吉田　正俊	よしだ　まさとし	短歌	1902年（明35）4月30日～1993年（平5）6月23日	
吉村　昭	よしむら　あきら	小説	1927年（昭2）5月1日～2006年（平18）7月31日	
吉村　唯行	よしむら　いこう	俳句	1914年（大3）12月30日～2009年（平21）2月3日	
吉行　淳之介	よしゆき　じゅんのすけ	小説	1924年（大13）4月13日～1994年（平6）7月26日	
吉原　幸子	よしわら　さちこ	詩	1932年（昭7）6月28日～2002年（平14）11月28日	
米村　晃多郎	よねむら　こうたろう	小説	1927年（昭2）5月23日～1989年（昭61）7月18日	
米谷　祐司	よねや　ゆうじ	詩	1934年（昭9）1月9月～2011年（平23）12月23日	
わ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
和田　謹吾	わだ　きんご	近代文学研究	1922年（大11）5月12日～1994年（平6）11月15日	
和田　徹三	わだ　てつぞう	詩	1909年（明42）8月4月～1999年（平11）6月27日	
渡辺　勇	わたなべ　いさむ	短歌	1927年（昭2）3月11日～1990年（平2）12月	
渡辺　左武郎	わたなべ　さぶろう	医学	1911年（明44）12月6日～1997年（平9）10月2日	

人　名	よみがな	分　野	生没年月日	備　考
渡辺　秀二	わたなべ　しゅうじ	俳句	1921年（大10）2月4日～1993年（平5）12月	
渡辺　俳瞳	わたなべ　はいどう	俳句	1905年（明38）1月28日～1991年（平3）11月4日	
渡辺　ひろし	わたなべ　ひろし	児童文学	1912年（明45）2月3日～1991年（平3）12月8日	
渡辺　睦子	わたなべ　むつこ	俳句	1919年（大8）1月20日～1993年（平5）8月17日	